

の人々の後なるべし、其餘は多くは根を断ち葉を枯す。纒に残り止まる者あるも、多くは白盲青瞽の類多し。最も傷み悲しむべきは、彼の長家の先考祖家なるめり。其初め微なりし時苦寒を侵し煩暑を凌いで、許多の艱辛を喫じ盡して、歳月を重ねて漸く家業を盛大にす。其盛大なるに及んで、衆民是れを選び勸めて、終に村民の長とす。此にかいて遠近來り賀し、親眷悦び走る。是れより憐心きざし起り、俄に所々室家を補修し、門閭を營建し、新敷和襪のみかふで、衣類に付け調度に付け、次第に榮耀に誇り、華麗を好んで、家財大に費ゆ。是れより竊に邪計を廻らし、奇器を設けて、烈敷細民を貪り掠む。細民憎み恨むと云へ共、各々堪へ忍んで、涙を含んで相隨ふ。外面は伏し隨ふに似たりといへ共、胸中の哀歎悲傷何れのか歸せんや。是故に民間に謎有り、云く、桶屋の正直な、村民の長殿とはどうじや、はて村々を削り取るはさど。深山の熟柿な、長殿の御家とはどうじや、はて人知らず果ては皆禿れて仕舞はさど。皆是れ衆民骨髓に透りて、曠り恨みて云ひ出す底の暫時の戯言なれ共、村民の長たる人の先祖と、子孫の人々の爲めには、上も無き追善祈禱なるべし。何が故ぞ、長若しこの謎を聞いて恐れ慎しむれば、子孫必ず相續せん。若し又乍ち仁心を起して尋常細民を憐み救ふ心有らば、子孫日を遂ふて大に繁榮せん。左な

くば多くは彼の謎々に少しも違はず、天理に責められ、人刑にかゝつて、悲しむべし、相續し來る底の家財は盡く没却して、四壁は伐られて窟下の薪となり、境内は鋤かれて他人の田畠となり、先祖は是れより依る方なきの野鬼となんぬ。子孫乍ち断絶す。寔に羨しからざる者は村民の長家なり。去る程に仁君明主と稱せられ玉ふ人々は、何れも仁心厚くわたらせ玉ひ、御家人は申すに及ばず、遠境邊土の細民に到る迄、晝夜慈悲愛顧の遠慮を廻らせ玉ひ、最初より僭奢を制し、國家の費を恐れさせ玉ふ。奢る則は費へ多し、多き則は、苛政を好む、苛政は常に民を貪り掠む、掠むる則は人民曠り怨む、うらむる則は其の國必ず亡ぶ。養生書に云く、氣は民の如し、民衰る則は其國必ず亡ぶ、氣盡る則は其人必ず死す。宜べなる哉、氣は一身の本元にして、民は國家の根軸なる事を。譬へば此に千尺の老松有らんに、根盤三泉に徹し、枝柯九霄を拂つて、常に千秋の翠光を籠め、遠く十里の風聲を傳へて、龍吟蛟噴るが如くなるも、日々に其本を掘り、時々其根盤を發かは、老松夫れ久しく青き事を得んや、すべからく知るべし、日々に民を恵むは、日々に其本根に培ふ者なり、日々に民を貪るは、日々に國家の根盤を發く者なり。大凡公卿より下庶人に到る迄に、工あり、商あり、巫、醫、藥師、百工の族迄に、千萬種の人類有れども、皆盡く

農民の膏油を舐て立たざる者は半箇も亦無し、民微せば我輩盡くそれ道路に餓死せんか。寔に知る、民は國家の大本なる事を。是故に豐聰皇子の如きは百姓を百の御寶と呼ばせ玉ひけるこそ有難けれ。然るに是れを貪り、是れを苦しめ、是れを惱まし、是れを害せば、千神憎み嗔り、百靈恨み睨んで、天これに下すに災害を以てし、地是れが壽算を奪ふて、武運も盡き果て、國脉必ず斷絶せん。子細に見來れば、盡く是れ酷吏の貪殘より起つて、偷臣の邪計より生ず。希くは列國の諸侯、諸方の國君、無聲に聞き未形に察し玉は、萬民懷く事父母の如く、敬する事神の如く、寔に延喜天曆の御代にも劣ることなく、市にうたひ野に拍つて云はん、嗟樂いかなど。

とし藻草 卷二終

安心法興利多々記之序

此書をほこたけいま零餘なまごころと名號事、自己來源臘月八日の煤拂にして、頓て西方淨土の春に立歸るへきところなるべし。洛西祥光寺の俊風和尚は、淨土門の碩徳にして、側ら顯密禪に通ず。一とせ駿州原の白隱禪師に謁して、問答數段の上、一首の道歌を呈せらる、「紫の衣の色を耳に見て隻手の聲を目にや聞らん」。禪師之を賞して、和尚の深く六字の淵源に徹するを證明し、一肩の僧伽梨を附し、又書を戲作して贈り申されける。今兩師既に遷化ありて年あり、空しく紙魚の餌となさむも心なきに似たり。よて櫻木にちりはめて、稱名懈怠の眠りを覺さん事をはかるものならし。安永三年春三月下旬

〔華嚴〕釋尊成道の後、最初三七日間、七處九會に説き玉ひし經なり。

〔阿含〕この經に拈阿含、中阿含、雜阿含、長阿含の四部の別あり。是は凡夫をして羅漢の悟を得せしめんために説き玉ひしなり。

〔方等般若〕方等は維摩、大集等の諸經なり。般若は般若經なり。

# 安心ほこりたゝ記

白隱禪師

歸命頂禮御釋迦如來。やれく皆さん聞てもくんない。おらが親仁を何國の御人も。悉多太子がしらぬが佛か。若い時から商ひ好にて。親の譲りの家も位もすぼんと打すて。十九の年から山へはいりて。迦蘭羅阿羅々の二人の仙人。師匠と頼みて菜摘水汲薪を樵てな。奉行勤めて元手をこしらへ。三十年目に初て店出し。華嚴を名つけて結構な代呂もの。賣てみたれは。文珠と普賢の二人は買たか。あまり高くて其餘の御客は。盲か聾か見向もせぬから。是れてはいかぬと分別仕替て。阿含と名つけし安もの賣かけ。口上ひねれば店さきせばしく。御客か来るやら得意か附くやら。そこで追々代呂物仕入て。商ひ手廣に方等般若に。法華涅槃と御客の機を見て。夫々あてかふ商ひ上手に。須達と名をいふとえらい金持。滅法にほれてみ。祇園精舎と名を呼ぶ屋敷を。御釋迦にあてかひ店出しさしたら。早速其名が諸方へひろまり。とてつもないほど商ひ繁昌。天上天下に一人親仁だ譽めてもくんない。其時妙法秘密の精藥。法華の一法盛んに流行て。御若い幼様龍女と申すか。こ

〔龍女〕八歳の龍女深く禪定に入て諸法を了脱したることは、法華の提婆品に見たり。

れを買請とつくり吞込。成佛したとは我等の婦とはとえらい違ひだ。又々其時阿闍世あじきと申した無敵の王様。提婆達多と心を合して。御釋迦の店を仕舞てのけよと。己か母者人章提希夫人を。牢屋へおしこみ。御釋迦の代呂物買はさぬ了簡。そこで夫人は不樂閻浮と此世を厭ふて。智慧も元手もとさらぬけれども。五障三従かさなる大病。をほも薬があるなら下され御頼み申すと。遙に向ふて御願なされば。御釋迦は承知で五三の桐だよ。此様な客が大かたあらうと。四十餘年の長の月日を。御藏へ納めて仕込ておいたが。さらは是れから賣かけまじやうと。阿難目連の二人の手代を。左右に召連れ王宮さしてな出現なされて。韋提希夫人に彌陀の本願他力の稱名。五劫兆載思惟の薬味を。ひとつに合した六字の丸薬。一向専念産前産後にさし合てさらぬ。智慧も元手もさつはりいらぬ。口にまかせて唱ふるばかりだ。心想事成未得天眼。智慧が虚弱で元手のならない。御脈も見ぬいた五障の重病。まして難治の極重悪病これらの性には。是れより外には用ゆる薬は。さつばりないやと御勧めなされた。夫人は元より五百の侍女まで。無始より以來さとりし罪業。煩惱疑惑の瘴氣の持病に。三世の諸醫師もお匙を投げたり。其場で現益阿耨多羅。汗が流れて即日平愈。なんと皆さん六字の丸薬用てみなさい。元手のいらぬか肝心要た。あんなま

り無造作で祖父婆々だましの店代呂物かをちつくり疑ひ。何ぞ利口な物はないかと知識に問ふたら。直指人心見性成佛。御釋迦が則ち莞爾と笑へは。迦葉が莞爾と笑ふた請うら。是れか本法一嗣相傳。實の眼を開いて看れば。御釋迦も我等も是は何物。本來面目無一物とは。こりやとえらい掘出し物だ。坐禪を始めてやりかけましたか。膝がふりくふりつきますやら。眠りか来るやら。背をとやされ大きな御目玉。爰がなんても心抱所と。きばつてみれば。三年むかしに隣りへかしたる黒豆三合糠二升。思ひいだして妄念山く。これも我等が性にあはねへ。商買かよふと眞言秘密を。この様な物だと尋ねて見たれば。阿字本不生で自身の胸にも阿字が備り。羅字は元より差別とわかれて。五智も五大も金胎南部も。此胸一つで父母の腹から生れた所が。直に佛の位でとんとんと聞くと其儘。オンアホキヤなやとやりかけたれども。元手も持たずに自力の商買。阿字なものにてさつはりしれねへ。そこで圓頓妙法蓮華即心成佛。扱ても無上の妙劑なれども。我等が根機に及ひもないゆえ。題目ばかりの功能看板。讀でみれば元手がないから代呂物買はれず。四十餘年の未顯眞實。何の事だと求めて見たれば。六字の名號は法華經の略にて。藥王品には妙典八軸吞込時には。西方極樂阿彌陀の淨土へ。生れて行くやと説てはあれども。何も勘定だ廻

りくして遠道せうより。路銀のいらぬ南無阿彌陀佛を願ふか近道。なんど皆さんさうて  
はないかへ。鼠衣で二食でくらしして戒行持つは。始末勘定利口な算用。まかし我等は蚤も  
虱も。とらすにおかねへ。手をは出して盗はせねども。心に欲しくて目かけに持たしたし。  
婿もなければ子種かなくなる。虚も少しはつかねはならぬし。酒も呑まねは婚禮振舞。萬  
事の附合せ間が渡れぬ。何と是れては五戒か持てぬ。外の商買仕様かと思へは。根機と元  
手がなくては出来ぬへ。どうでも親父の教へに歸りて。元手のいらねへ六字の商買。我等  
か根機につきり合ます。出し元手が澤山あるなら。自力の商ひなされて御覽じ。細い元手じ  
や一向いけな。棒でも折つたら逐地も去地も茶の木畑で。御迷ひなさる。昔し咄しを  
聞ても見なさい。諸宗の祖師達。智慧も元手も澤山あれども。六字の薬をお捨はなされぬ。  
まして我等は。智慧も元手も根機もないから。自力のおしな他方の御船に。乗るより外には分  
別でさらぬ凡夫が其儘佛に成るとは。石や瓦が不思議に變じて黄金に成るのだ。夫れが嘘  
なら御寺の坊様に尋ねて御覽し。何と皆さん嬉しうこんだぞ。儒道や神道や心學なんどの。  
外商買から。あきない敵て。いろくくさましく悪口いへども。我等が親父の仕にせの商  
ひ。格段違ふてとえらゐんだよ。根元本家は天竺横町。夫から唐土日本へ店出し。八宗

九宗と弘めた代呂物。いやだといふたらそこらに居られぬ。恐れ多いか上々様でも。御  
用ななさると六字の丸薬。朝夕忘れす用ゐて御覽じ。四海靜かに現當繁榮子孫長久。今世  
の祈禱も來世の利益も。是れに過ぎたる薬はないぞへ。虚はつかねへ是れ皆御釋迦の味増  
へは御座らぬ。本法の事だよ。ホ、オイホウく。

明和 元申年十月。

沙羅樹下 關提翁述

# 安心ほこりた、記終

# 大道ちよぼくれ

白隠禪師

きたく、やれきた、それきた、またもござらぬ、さうござらぬ。飯命頂禮、みなさんき、ねへ、人々御所持の心を云ふやつは、是れぞ申してしつかと致した、目鼻も手足もござらぬながらも、扱てく自由なむらめをりやるよ、云ふに及ばぬこと、は思へど、千年万年此の世に暮すぞ、思てござるがうかくするまに、一作中やんがておみやれ、無常の使が迎ひにござると、一作節氣師走が俄に來た様に節氣じやあるまい、うろたへまわつて、忙しうだよ、連られ行くのをまんざら見ながら、錢金持たねば、人ではござらぬなんぞ心得錯り、欲徳ばつかりを頭一作先の皿から、かゝどのはて送、立つにも居るにも、ちつとも忘れず、偶々難、得人間世界一本この句なしへ来たこそ辛い、其の上あまたの貴き聖の尊みたまひし、五倫五常の大きな道筋、善惡邪一本この句なし正も、あまるずもらぶず説き演べ玉きて、置れしことなりや貴きことだよ、昔くのすつと昔の、まだしも此の世の出来ないうさきから、一作今年今日まで今年今月即今日、數へも及ばぬ年を経たれど、ちつとも減らず、うつとも増つさず、末世になるほど、神や佛は彌くたうとく、

〔阿闍〕梵語、此に  
信不具とのふ、此  
人、因果を撥無し、

がつかういや増し、威光もいや増し、思へばくどうでもきやつらは一作め親玉かぶじやよ、  
若しやれ皆様、惡事正根のしつばうすだざり、神や佛のちよろく寵愛し玉ふ、正直正路の  
結構な悟を、ちつともなりとも、そつともなり共、求める心ができれば幸ひ、相應に勵んで  
出精めされよ、おみさん方のおしやますことには、惡事を申して、外ではあるまい、人を  
ば殺さず火付けや盗みは、元より爲まいし、何か因果で、死ぬと地獄の、青鬼赤鬼斑鬼の  
と、根もなき虚言聞く耳塞いで、白木の凡夫が無事は貴人と、御飯の三杯喰べるに任じて、  
鵝鴨や狸々のしやべくる様だが、微細の様子は、夢にも見ないで、理窟を我でさす口先は  
つかり、本に誠に道理はしらない、たごへはしつても、行ひ惡しけりや、何んにもならぬ  
い、薬を吞まざる病人わらには、扁鵲善婆等も匙なげ捨つ、天窓を攫いたる様なるもん  
だよ、夫故佛も、縁なき衆生は濟度は仕られぬ、阿闍提だのなんかんのとて、くどくもく  
もどく説演べ玉ひて置れしことじやう、阿闍提とは、どうした人だよ、どの様な人だ  
よ、問はるゝやからへ答て申さば、あせんだいと、外にはござらぬ、問はるゝてなたが  
阿闍のきつほん、茲等の大事は、十代傳はる黄金の釜より秘藏なことをだに、たやすく心得  
あゝ、このこうての、すじつたもじつた、なんふと理窟てやつても、大事に臨んで、なんに

顛倒邪見にして、  
現在未來の業報を  
信せず、當に地獄  
に墮して出期ある  
となく、恰も重病  
の終に治しかたき  
か如し。

もならない、大事を申して外でもござらぬ、前にも所謂冥途の方より使がきた時、理窟で  
行くなら、どう共こう共云つてなみやれ、其の場に臨んで、四も五も云はせず、時刻が  
移ると、閻魔の目玉の庇ひさしがつんでる、なんぞとぬかして、引立て行くそや、皆様せつない  
こんだよ、一から十迄あかきにあがいて、うろたへまはつて現世がこうでは、未來も大方  
ろくでは有るまい、神や佛はやれく不便や、何を助けてやりたい者じやと、涙を流し  
ていたわり玉へと、自業の罪過は、どうでも通れぬ、かうじやによつて、皆さん必ず油斷  
をめさるな、魚の中でも、鯉と謂ふやつは、理口なやつめで、ありやくよいやな、とつ  
こいさと瀧津瀬登りて、龍ともなるげな、狐も稻荷の鳥居をひよっくらひよつと、飛びこえ  
神にも成るげな、鳩めはグウく、愚痴なるながらも、三枝の禮をば、見事に勤める、雀  
はチウく、忠義の一道、鵝はガアく、反哺の孝行、夜晝鳴けも、耳にも止めず、明  
ても暮ても、はあスウく、云ふこと計が人でも有るまい、立つにも居るにも、ひよこくひ  
よこつく事計が人ではないぞと、魚めや鳥にも劣ると云はれちや、一分立つまい、本に誠に  
立たずと思へば、本へ還つて、孝悌忠信行ひめされて、人とおなりやれ、本に皆様神に成  
るにも佛に成るにも、人からならねば、成り様がござらぬ、本に誠にめんごな事ない、以

の字も呂の字も知らない祖父様も、恵の字と壽の字も分らぬ婆さまも。南無からたんのう、  
 如是我聞、一字の、阿蘭陀交りの長物語は、必ずよしなよ、夫れより平日たやすく、慈悲  
 心正直堪忍、三つをたもつて、出る息入る息、無理せぬ様にと工夫をめされよ、しかつめ  
 らしくも、一本以下十八字作取年行年、百八煩悩手に取めざる、念珠は、百八出る息入る息、數珠くりめざる、一本以下十八字作取年行年、百八煩悩根本があつば  
 れ、阿彌陀の正体成るや、あんまり近くてあきれたことだよ、困つたことには、人々御  
 所持の心といふやつは、おてこてんより替るが早いや、正直正路の貴人に向つちや、慇  
 懃丁寧なしや顔なしたり、御主や親には、不情なつらつき、女房や子供にや、鼻毛をの  
 ばして、外目もあんまり阿房な様だよ、金借る朝にや、地藏に化けたり、請る夕にや、閻  
 魔もはだしで飛ぶ様なつらつき、瞬きするまに人事云ふやら、焼もちやくやら、いや早や  
 をへない事だよ、扱て又雨風雷電などは、天の制度の事とは申せど、分てもく、恐れ  
 おのゝき、謹むべけれど、然るを己が勝手に悪るけりや、一本以下十九字作今日の却て罵しり、怒りを起して呵し  
 たり、罵つたり、おへない天氣だ、どうじやこうじやと、恐れ多くも月日を指さし、其上  
 向つて小便たれたり、一本作天地に向てなにからなごまで天地に背いて、大膽ばかり、一本作自分の非を具、自身自分の意見で口をよ  
 り外には、教の道とてなんにもないや、一本以下十九字作今日のなんとかく、おそろしうさよ、おらうはど

うしやうチ、イ一本作たらは當感注意くく

○右白隠老師大道猫模暮。項見稱天目之作者。將信乎疑乎。具眼者看取矣。只今要利益而  
 書寫己耳。

大道ちよばくれ終



# 施行歌

白隠禪師

今生富貴する人は。前生に蒔おく種がある。今生ほどこじせぬ人は。未來は極めて貧なる。利口で富貴なるならば。鈍なる人はみなひんか。利口で貧乏するを見よ。この世は前生の種次第。未來はこの世のたね次第。ふうき大小あることは。蒔たね大小あるゆゑなり。この世はわづかの物なれば。よい種あらんでききたまへ。たねを惜みてうゑされは。穀物とりたる例なし。田畑に麥稈まかすして。麥稈取つたるためしなし。麥稈一升まきおけば。五升や一斗はみのるなり。まかれはすこしの施しも。果報は倍くあるものなり。況やほどこしおほければ。果報も多しと計り知れ。それゆゑお釋迦も觀音も。施しせよとすゝめたり。さすれば乞食非人まで。救ふところを發すべし。ものゝ富貴で持つ資。有ればあるほゑたらぬもの。おほくの實をゆつるをも。持つ子が持たねば持たぬもの。少しも田畑ゆづらねど。持つ子はあつはれ持つものぞ。我子の繁昌祈るなら。人を倒さす施行せよ。人をたふしてもつたから。我子にゆづりて怨となる。ひとの恨のかゝるもの。

ゆづる我子が沈みきる。升や秤や算盤や。筆の非道をし給ふな。つねく商ひするひと。あまり非道な利をとると。死んで三途に入ること。その身は三途に落入て。屋敷は草木か生ひ蕃る。非道は子孫の害となる。親の悪事が身に酬ふ。世間に敷くある物。一門繁昌することは。親が悪事をせぬゆゑ。もし又親にはなれなは。ますく重思思ひしれ。子を慈しむ親こゝろ。あらい風をも厭ひし。それほど親に思はれて。親をおもはぬあるかさよ。親に不孝な人々は。鶯や鳥に劣りたり。娘ひす子をしつけるに。惜むたからはなきもの。親の後生の爲めならば。その金出して施行せよ。飢死ぬ人を助けなは。これに勝れる善事なし。たとひ萬貫長者でも。死んで身につく物はなし。妻も子供もせに金も。捨て冥途の旅立ど。冥途の旅立する時は。耳も聞えず目も見えず。ゆくを知らず門をいで。闇をやりみちに入ること。その時後悔かきりなし。兎角命のあるかぎり。菩提の種をうゑたまへ。命は脆きものなれば。露の命と名づけたり。今宵頭痛が仕初めて。九死二生なるもあり。強い自慢をする人も。暮に頓死をするもあり。けふは他人を葬禮し。明日は我身の葬禮す。然らば頼みなき娑婆に。金銀蓄へなにする。富貴幸ひある人は。貧者に施しせらるべし。貧者に施しせぬ人は。富貴でくらすかひもなし。狗でも口はすぐるや。

飢人貧者を助くべし。慈悲善根はその儘に。家繁榮の御祈禱。慈悲善根をする人は。神や佛にまもられて。天魔外道はよりつかず。然れば祈禱になるまいか。よくく了簡せらるべし。恵施しならぬとは。餘りどうよく目にあまる。飢死ぬ貧者を見ぬ振に。暮すころは鬼神か。慈悲善根のなき人は。子孫繁昌長からじ。寶はあまりはなきもの。施行で借錢し初めよ。それこそ眞の信心よ。上たる人をはじめとし。頭立たるひとくは。われもくと共く。厚く施行に身を入れよ。貧者の命救ふなら。廣大無邊の善事なり。平生貧者に敬はれ。身につく果報あるまいか。人の喰物するのを。好んで捨ててく者は。前生に種蒔たらぬゆゑ。是非なく袖をすること。かゝる有様見なからも。おのく仁心起らぬが。とにもかくにも人として。信心なければ人でなし。此節信心おこらねは。全く牛馬にことならず。

## 施行歌終

ねたふく女郎粉引歌

白隠禪師

『女郎の誠とたまごの四角』

みそかくの能い月夜』

天じやくと皆様おしやる。てんのとがめもいやてそろ。文のかすく戀ひこがれても。  
わしは當座の花はいや。數の男の思ひもこはい。見目の好いのも氣の毒じや。器量好しめ  
と譽めそやされて。男ざらひのひとり寝を。命取りめと皆様おしやる。わしは命はとらぬ  
もの。那須の與市は矢さきて殺す。おふくか目もとて人ころす。かすの殿子はかざりもない  
が。わしがいとこはたふひとり。婆々か粉歌はおもしろか。おふくがしらへは知りやる  
まい。知音としなら歌ふるよすが。やほな客には御遠慮めされよ。

歸命頂來七佛傳來。我等の親玉釋迦牟尼如來も。僅と聽くより首だけ駄り。戀にてかれて  
命も抛ち。肝必要の小歌の文句を。老男さん老女さん皆機聞ない。諸行は無常じや是生滅  
法。生滅滅已で寂滅爲樂と。有つてもしれぬで弘法大師が。いろはにほへどに解て置かれ  
た。夫でもすめずは朽木連坊主が。大小取難段をきかんせ。眞に浮世は墓ないものでな。  
人間萬物山でも川でも。日月星辰竹木世界も。花咲や散ります。盈れば腐ます。生れりや死  
ます有るもの無くなる。うれでも皆様千年萬年。此の世に居るやと思ふてござるが。うる  
くする間に無常の嵐が。何處から來るやら俄に起ると。鬼とも組むよな剛機な男も。天人  
みるよな美ひ少女も。出る息一回止るが堺で。最早傍へもよられぬ容だよ。そこで地水火風  
の四大は。元へ歸て無くなるやふだが。しひき殘て一つの合藏識。一生なしたる善業惡業。  
これには本より形がないから。土にも成らねば灰にも成らねば。善業は善所へ惡業は惡所  
へ。幕が替りて衣裳を著かへ。因縁次第で六つの備の。天堂人間地獄や餓鬼趣や。牛にも  
成つたり馬にも成つたり。死んだり生きたり常り無ければ。この道理で諸行は無常しや。  
是生滅法と申したるものたよ。是れでも透切安氣はならぬと。佛や菩薩の教にしたかひ。精  
しく進て修行に身をいれ。貪瞋痴慢の根を斷枯して。六道生死の縁が切れば。これが即

ち生滅滅已で。こゝに到ると此の身がてのよと。眞實無相の安閑恬靜。月を枕で虚空に安臥。  
華藏世界を一目に見晴し。身心清淨諸境も清淨。寂滅爲樂と有るのはこれらだ。そこで  
夫から御釋迦やあみだや。觀音地藏と肩臂ならへて。誓願度生の手船に掉さじ。十方世  
界に神通遊化して。現世は勿論無始劫以來。父母兄弟伯父や伯母の。六趣に迷へる苦患を  
救ふて。皆々安樂世界へ導き。生老病死の根も葉も拂ふて。七寶莊嚴の臺に坐せしめ。百  
味の飲食自然と備り。天の羽衣意のままにて。天人聖衆と尋常伴ひ。微妙の音樂耳をば慰  
め。五色の天華を詠て遊ばせ。畢竟は佛にするじやが。何と皆様望はないかよ。眞更否で  
も無いならきかんせ。人々御所持の心といふ奴。これぞと申してしつかと致した。目鼻も  
手足もごんせぬけれども。扱てく自由なわらぬめでおじやるよ。佛も生出す地獄もあみだ  
す。それじやて皆様油断はならない。先にも云ふよに無常な浮世で。老男や老母は云  
ふにも及ばず。若い達者な息子も娘も。直に今夜が未來に成るやら。どうやらこうやら知  
らない身の上。浮假して居ちや不理ものだよ。否でも應でも忽ち此の世を。老も若も振捨  
ゆくのぞ。承知で居ながら余所目に見除て。頭の顛から跟の跣まで。五欲を粧ふ心のすが  
たを。鏡に寫さば二七目を見られぬ。千萬劫にも得難き身を受け。人間世界へ生れて出な

から。餓鬼修羅畜生地獄の振舞。起つにも居るにも名聞我慢で。朝から晩まで晩から朝ま  
て。高いも下いも財欲色よく。一心曇らにや明い世界を。眞暗くらく闇處境界。本來阿  
彌陀と同躰佛をば。十惡八邪の不淨をぬり付け。渾然境汚して仕舞て。我と我手に地獄  
をせしらへ。而て皆様御贈ます事には。惡事と申して人をば殺さず。火付はせまいし盜は  
致さず。是等の外には有るまへなんぞ。口なき計の理屈はよけれど。見惑思惑の微細の  
様子は。根から葉から御存知あるまへ。設ひ知ても行作か悪けりや。眞坂の時節に用には  
立つまへ。眞坂と申してどうした時なら。冥途の方から使の來た時。理屈でゆくなら何也  
斯也。言ひ分け斷り申して御みやれ。其の境に臨で四も五も云はせぬ。時刻か移ると闇魔  
の目玉に。庇かつん出るなんと、旬り。忽ち未來へ引立行くや。其の時皆さん一から十  
まで。周章騒で胡亂へ廻れど。泣くより外には仕様もあるまへ。夫から行くさきや如何な  
る處じや。どうでも大形好事あるまへ。自分の懐中自分に承知じや。御臍の下から算用して  
みて。心で意に異見を御謂やれ。藥を飲まない病人どもには。耆婆扁鵲でも療治はとしか  
ぬ。夫故佛も縁無き衆生は。濟度は成ぬの無佛性じやの。何じやのかじやのと呵て置かれ  
た。無佛性とは如何なる人じやよ。斷見常見世知辨解怠の。因果の道理を辨へ無くして。

三毒五欲の我まは放埒。釋迦の教の十善五戒も。天照太神の六根清淨も。孔子の示しの五倫や五常も。擲着没着に言ひ捨見捨て。用ぬ族を申したるものだよ。是等の類が世間に多くて。夫故地獄が野多衛多繁昌。虎の皮をば揮に糾めたる。赤鬼青鬼牛頭等や馬頭等や。目にこそ見ぬねと此の身に付きそひ。如何な貴き上々様でも。船士馬子等も長者も乞食も。惡心邪業の重いか輕いか。具に殘らず鐵牒に記して。毎朝毎晩註進致せば。閻魔大王や十王其の餘の。冥官皆々集り給ひて。御評儀極れば命を奪取り。娑婆の親子や六親眷屬。別れを哀み歎くも厭はず。さあ來たゞ悲畏々々々々。悲畏火の車に引立乘行き。葬津河原で裸にひんむき。裾もさせずに既で驅たて。閻魔の御前へ引据えますれば。向に立たる淨波梨鏡に。娑婆に居た時身口意三つで。造て置いたる罪業殘らず。分明的然うつりて見ゆれば。右も左もいささ云はれぬ。そこで逐一吟味か了れば。夫々役目の獄卒等が請取。二百三十六所の地獄へ。罪人共らを各々驅ゆき。業風烈しき爐炭の焰で。天も焦る大流猛火の。うづまく鑊湯火坑を拂へて。逐込投込茹たり蒸たり。悉皆割木の燃見るよに。黒人まがへに焦たる體を。鐵棒につんざし曳きつり出して。鐵の臼碓にて搗いたり抹いたり。大盤石にて背を壓したり。金箔打よに五體を打のべ。鐵作りの牛にも馬にも。

鞆曳せて鋤わり耕し。或は獄門磔などして。銅柱に手足を打ちつけ。鐵爪鐵嘴の鴉や鷹等か。目玉も陰玉も突き啄み。其の外無量の阿責の模様は。八寒八熱刀山劍樹や。叫喚衆合や黒繩血の池。逃ては出られず死ぬにや死れず。苦み號て啼々と泣く聲。天地にせまりて震動電雷。其が十日や三十日じやなへぞへ。百千萬劫晝夜を分たず。ちよつと憩する暇もないげな。眞に誠に話にするさへ。身の毛が豎て戰慄とするよだ。何と皆極怖はくはないかよ。扱て又修羅や餓鬼趣の苦患は。畜生殘害驚怖の次第は。色々様々語るにや盡させぬ。そくて其のよな責苦を受ぬる。罪科の族は此の世に居る時。如何様とうした惡業を成したる。報じやあらうと思ふてみさんせ。餘所の身の上計りしや有るまへ。即人々心の樂屋は弄玉つかひの手妻を見るよに、右から左へ替るの早さは。有徳高位の人前訪て。殷勤叮嚀殊勝な目元も。主人や親へは不正な面つき。女房や子供に鼻毛を延すも。脇目に餘り阿房な様だよ。金借る朝にや地藏に化けたり。戻して呉れいと附るゝ夕にや。閻魔も負賣出しそな怒面。瞬する間に總來と替りて。憍慢無作法人をば悔り。詭曲追従己を欺き。天道化育の心に背て。殺生などは無慈悲の極頂。物の命で妻子をやしなひ。口に嗜みて我身を娛しみ。設ひ手がけて殺しはせいでも。害ひ惱めて難義をさせつゝ。苦み傷むを不便と

思はず。渠等も親子や夫婦は有るのに。我身を抓て痛さも知れぬか。向の患は厭はぬ身がつて。錢金持たねば人並ならぬの。浮世は渡れぬ杯とて。ろえ。強盜逐劍壁きらぬいでも。算盤筆先不直のとり遣。滅多野多羅に強欲かはいる。神のものでも掠る分別。先祖や主君の御影も忘れて。一門朋輩犬猫まじはり。舅姑が白眼は娶女も青髓。不實不孝の火と火を摺合ひ。悪口雑言無慚愧千萬。夫等が惚て二張の弓曳きや。婦等も持て兩樹つかあて。ちよつと脇から焼付けられては。胸を燃して焼餅やきつ。火の手が上れば忽ち狂亂。折節類に角をも生じて。溢溺死が榮でも有るまい。已が邪見か氣儘にならぬと。餘所の専造讒言陰言。誇り誇られ互に腹たて。人をば落して自分が身揚り。我他彼此く争論諍。恚恨が募れば截たり伐たり。博奕遊俠亂酒に耽りて。親の命もちぢむる逆罪。何から何迄大膽而已。これらは皆々惡趣の種時。折角過去世で善事作したる。功德の果報で此の身は得たれど。死ぬと未來は必定地獄じや。夫故佛はやれくふびんや。一切衆生は皆是前世の。父也母也恩ある族じや。何とぞ扶で遣りたいものじやと。泪をこぼして勞りたまへと。自業自得の罪科はのがれず。心の田地に蒔置く種じやて。萌切り生出て一粒萬倍。無間の苦患を受けねばならない。それが否なら今日今から。人間根生にきりかへ直して。神や佛や聖

人君子の。教の道理を肯ひ辨へ。孝悌忠信獨をつしむ。信心怠けず修行を仕ますりや。差して難義な譯でもごんせぬ。魚類の中でも鯉とや申して。利發な奴めは禹門の龍をば。一心勇猛勵ですめば。登りおふせて龍とも成るげな。狐も稻荷の鳥居を偪起。鵬と飛越しや神にもなります。鳩めは苦空無常をとなへて。三枝の禮義も見事に勤むる。雀はちうく忠義を嘯り。鴉は孝行反哺のやしなひ。折節見ながら御目にもとまらず。尋常聽ても御耳へいらぬか。鳥類魚類や四つ足などにも。劣ると云はれちや一分立まへ。眞から底から立たぬと知たら。憤激起して心入れかへ。皈崇三寶先祖を敬ひ。兩親舅姑に孝行第一。夫婦愛敬別義を守て。昆弟友子の禮容したしく。親類朋友信を闕さず。貧賤病苦の族を慰み。分限相應家業を持いで。國王領主の掟に順ひ。慈悲と正直堪忍三つを。自身に勤めりや人まで見習ひ。教へず自然と導き進ませ。上下諸とも和らぎ睦びて。毎も莞々笑てくらせば。佛神天地の御意にも協ふて。八百萬神梵天帝釋。大黒毘沙門御守り給へば。惡鬼邪神は何處かへ逃げうせ。無病息災延命長久。天下泰平五穀も成就。御家も榮へて善子も出來ます。猶又皆禱朝夕忘れず。摩訶般若や南無阿彌陀佛も法蓮華經も。皆是無明の根を切る刀じや。口から出る聲御耳へ入るとに。諦々御となへなると。煩惱

妄想追々消ぬはて。自然と三昧發得しまして。念々佛心佛心念佛。こゝを去らずに往生淨土じや。またしも近路坐禪が何より。望な御方は大善智識に。眞實篤り參禪しめされ。こゝをいふても盡いた牡丹餅。聽いた計りて御腹は飽れず。水も飲まねば冷暖知らない。六凡四聖も唯この一心。一心悟れば娑婆即寂光。一心迷へば即ち三途じや。返すくも御油斷なざるな。今にも無常の嵐が起ると。暫時待つてと云ふ間はごんせぬ。次第くに一時く。後へは遠うなる前へは近なる。死で此身はどうなるかうなる。平生忘れず覺悟が肝心。諸佛菩薩も昔は凡夫じや。どうでも彼衆は覺悟がよかつて。萬徳圓滿御成就じ玉へ。衆生濟度が御自由自在じや。然れば各々彼衆を見ならへ。寶の山にて空手を振すと。自分く覺悟を解めて。渴に隨で井戸掘せぬよに。希ふず皆様この一大事を。聽分は嘴分け打捨ておかすと。菩提の道をば踏んでみ来る。御志をば發して給なへ引

### をたふく女郎粉引歌

### 見性成佛丸方書

白隱禪師

私事は、小田原勇助と申して、生れぬ先の親の代から藥屋でござります。推賣は天下御法度でござりますれども、先づ功能の一通り、御聞きくだされませ。私賣弘むる處の藥は、見性成佛丸と申して、直指人心入りでござります。此の藥を御用ひなされませれば、四苦八苦の病を凌ぎ、三界浮沈の苦みも、六道輪回の悲みも、安樂になります。此の藥と申しますは、天竺の伽毘羅國淨飯大王の御子悉多太子と申して、生れながら七足歩み天上天下唯我獨尊と仰せられて、各々様方が御存の檀特山の憂別れとは、其時藥種を把かに山におん入りなされまして、難行苦行、其の後に五千四十餘卷四通りの藥法書が出来ました。其の時御弟子の内十六弟子並に五百人と秀でた上手が出来まして、衆生の病を直す其の根元は成佛丸で、此の藥を傳へられました。其の後天竺にて四七二十八人ござりまして、二十八人目の達磨大師がきびしく傳へられまして、大唐にては、三三六人、五家七軒と別れましたが、兎や角とござりました。神光の臂の痛み、玄沙の足の痛み、雲門のちんばも



なほり、百丈の鼻皿も留り、其の外敷々ござりますれども、中々申し盡されませぬ。吾朝にては、千光國師始めて傳へられまして、其の後に二十四人の妙薬師が出来まして、其の後紫野大灯は、天子様御用ひなされましたが、其の時顯露丸秘密丸と申して、賣薬師が出来まして、成佛丸と功能を争ひ致されたが、救命あつて三井寺、奈良、比叡山邊の賣薬師と禁裡にて論義致されたが、大灯がかたれました。花園の鳳皇様は、美濃の伊深へ救使を立てられ、關山國師を召出され、此の御薬を御召上られ給ひ、御褒美として天子様の御盃を賜りました。花園屋と申すは、即ち私本家でござります。此の薬の製法、先づ趙州の柏木を斧できり、六祖の臼ではたき、馬祖の西紅水を汲み、大灯の八角盤で煉立、白隠の隻手にのせ、俱低の一指で丸め、玄沙の白紙に包み、其の上書を禪宗臨濟郡花園屋見性成佛丸と記す。此の薬を丸呑に成されまると、から見識と云ふものをばきまして、一生毒がぬけませぬ、随分く能くくかみてなしてあがりますと、行くも歸るも、立つにも座るにも、へその下へ呑込み置きますれば、たとひ天上に生れても樂まず、地獄へ落ちても苦まず、又誹るではござりませぬが、今時は六字丸と申して發向致しまするが、是は朝飯前夕飯後に御用ひなされますれば、凡夫の保養には成りますれ共、斷未魔の苦みには、中

々役に立ちませぬ。又世間の死に仕間に念佛丸と申すは、是でござります。此の薬には、代物が三錢宛入りますが、私が成佛丸には、一錢も入りませぬ。先はあらく、さあく御用ひなれぬかと申すは、かないません。

## 見性成佛丸方書終

# 御代の腹鼓

白隠禪師

天地の誠の道は明けく、日月のめぐり違ひなく、春は花さき秋實り、日出度治る天が下、  
弓は袋に矢は箱に、鎧兜と云ふ物も、五月人形に見たばかり、屏風襖や繪草紙に、唐や日  
本の軍事、能や謡や芝居物、みたり聞いたりなるとさむも、今太平の御蔭や。その辨へも  
荒磯の波間に遊ぶ鯛すゞき、雲間の鶴や鴨雉子、表たり焼いたり、飲食に不足云ふたり好  
み事、是れなに故と尋れば、世のうきぶしのしらぬ故、ひだるい寒いと云ふことは、乞食  
非人の身の土の事と計りに心得て、あれは有るほど、足る事しらぬが土の驕り事を、飯が  
いやなら砂糖餅、あんまどり、きげんどり、誠の軍の切合をみたい物じやとあだ口も、  
あゝ勿躰無いや恐ろしや。昔度々大合戦、爰に矢さし、彼處に石火、矢貝鐘太鼓時の聲、或は  
家を打てばたれ、町も在所も焼き拂はれ、子の手を曳て遁るも有り、逆様に負て走るも有  
り、妻も夫も引別れ、枕並べんよるべもなく、中には腹に子をもちて、いつ汝時とも知ら  
ぬ身の、何國いかなる野末にて、いつ身ニツ成るとぞ、雨のふる日も風の夜も、松の下

ふし草まぐら、老も若も徒歩はだし、草鞋一足賣る家なく、寒うてもひもじうても、握飯  
一つ小判一兩で買ふと云ふても賣人なく、息もすう／＼、足ひよる／＼、にげゆく内に、  
流矢にてあへなく命果すもあり、きらるゝやら、つかるゝやら、咄しに聞くと恐ろしや。  
扨て源平の大軍、ひよどり越のさか落し、八島の浦の舟軍、切つきられつ修羅の道、皆是  
れ雲の上の人、あらい風にもあてぬ身を、討死手負生捕られ、其の外平家の御三門、或は  
姫君局方、花の姿も波の底、鱈じやちほこの餌食となる、あはれと云ふもあはれかなれ、か  
くあらんことなき上をも、うき目つらき目敷しれず、此の方々の身の上の難儀にくらべて  
は、人の數にも入りがたく、此や蠅にも劣る身の、いかほど難儀するとも、露もつくと  
も思はれず、ましてつたなきわれ／＼は、そのことわりも辨へず、一つか二つ不仕合せ、  
心に叶はぬことあれば、世の災難を我二人請取る様に思はれて、浮世を恨み身を嘆ち、神  
や佛に恨事、無性に苦むものぞかし。吉凶禍福は糾へる繩の如しと聞くぞかし、喜ぶ後は  
悲み有り、仕合あれば不仕合せ、生れたものは死ぬる筈、梅も櫻もちればこそ、又さく春  
もあるぞかし。皆是れ天の誠の道、夏はあついが夏の道、冬は寒いが冬の道、人には人の  
實の道、此の誠にも違はねば、家も齊ひ國治る、只此の誠にそむくやいな、家國天下大

騒ぎ。それに今日われ／＼は、雨にもぬれず露うけず、一日食はずに居た事なく、一と夜  
と裸でねたことも、ないは如何なる果報ぞや。世の爲めになる事としては、一文がこともし  
たことなく、世界の邪魔に成る事は、大分覺もあることよ。我のみならず、親や子や夫婦  
兄弟一つ家に、飢えず凍へず過すこと、御先祖父母の御めぐみ、又其の上にありがたき、  
申すも恐れ多けれど、昔上々様方が、鎧兜や長刀かたなを命がけの御苦勞で、今この如く  
御泰平、農作すれば田畑有り、米粟粟稗なんなくと心まかせに作り出す、山行き野歩きす  
るとても、指一本さす者無く、江戸長崎へ行いたとて、こつちが無理云はねば、拳一つ打  
つ者なく、腹がへつたら一膳飯、日が暮れたらはたで宿、河には橋がかけてある、橋がな  
ければ船渡し、馬あろうか、駕籠あろうか、甘酒上間鹽梅好し、あんまり御馳走過る故、  
終り御料理の喰過し、頭痛腹痛瘧つかへ、節氣季かに胸をいためたり、分散欠落首く／＼り、皆  
御馳走の喰過し、なんほ御馳走なさるとも、腹が減ねばくはぬがよし、飲んでわるいは飲  
まぬがよし、云ふてわるいは云はぬがよし、買てわるいは買はぬがよし、それで御腹があ  
ん梅よし、親子にごくあん梅好し、夫婦兄弟あん梅好し、寐ても起ても鹽梅好し、誠や  
目出たき天下太平。

御代の腹鼓終

# 猿法語

## 解題

この法語の著者虚室生白は、如何なる人にや、序および奥書によりて、寶曆年間の醫師なることは知れたれど、いまだその出處進退を詳かにせず。序のうち「師の告げ教へられし端々を書い留め」云々といひ、又奥書にも「師はかくのごとく教へられたり」としるせる如く、すべて師説を録したるものなり。されどその師といふも、何人なるやを知らず、なほ考ふべし。三卷すべて十三則、辨するところ太た平易なれば、婦女子にも能く解することを得べし。また猿法語と名つけゆゑんは、序のをはりに見えたれば、此に贅せず。

猿法語序

人あり我に言ふ、其方は先祖より浄土宗にて、今相續する家は一向宗なり。然るに儒道を學はるや、佛法は異端なり、虚無なり方便なりなどと言ひて、佛の道に疎く、年もはや耳順に及べども、後世の勤めもなし、折節は誦經念佛して、菩提の道に入りてよろしかるべしとくれく諫めらる。答て言ふ、をしへの趣親切なり、儒は聖人の教を學び、仁義禮智信の道を説きて、人をも導く事をなすをいふ、佛法をそしり争ふ事を儒とはいはず。我は醫を業とす、されは少々聖經賢傳を學ぶといへども、其道を究めて佛教をそしるべき功方もなし。又佛法のはし／＼をも聞及ふといへども、儒道をなじりて偏に佛説を明らかにせりたるにもあらず。此故に是非褒貶をなす程の見解もなし。唯世法にては、及はぬまでも五常を守り、佛法にては、五戒の片端をも慎むと思ふばかりなり。來世の種を蒔て極樂に往生せんと思ふ欲もなし。夫につきある師の告げ教へられし端々を書い留めおきたれば、是を以て足下の責をふさかむと思ふ、是れとても正理に叶ふべきや、又はあやまれる所もありやしれす。されば古人の言に似たる事は似たれども、違ひたる事も、たらぬことも多かるべければ、是れを猿法語といふことしかり。虚室生白判。

# 猿法語

虚室生白

菩提といひ道といふ辨

師の曰く、菩提といふは、天竺の言葉にして、唐土にては道のきはまる所を菩提といふ也。それ道といふは、人々日々に行ふ所の道なり。今時世間の人、菩提といふは後生の事とばかり覺て、今生のうちは惡を止むる事成り難く、世を渡る營みにも偽り多く、財寶をむさぼり、色にまよひ、時としては人をまぎらかし、よこしまの事のみ行ふゆゑ、手前一分の働きにては、後世たずかる事なり難しと思ふ故、折節佛像をかみ念佛し、或は題目を唱へて、百万千遍の數多ければ、いかなる惡心ありとも佛のたすけありと覺ゆるなり。夫故に念佛唱へ題目唱ふるうちは、菩提の勤、後世の種に似たれども、其勤をやめて外の事をなす時は、また心のまゝに惡を行ひ、明けても暮れても、念佛題目澤山に申すをたのみにして、一生をくらす事、我ぞわか心をたぶらかす、誠に愚なる事なり。元より題目となへ念佛する事めしきにはあらず、千遍も萬遍も心を一つにしてとなふる心は、一筋にして數か

二  
なれば、功德も積りて頼母しきに似たり。然れ共二點の惡念ありなば、幾千萬遍の念佛題目なりとも其まゝ消失せて、冬三月の雪霜の一時の春の日にきゆるか如く、皆跡かたもなく空しく心をつひやす計りなり。然るに念佛題目を百千万遍も多くとなふる程功德深きと説く事は、元より衆生は欲深き生付なる故、名號に心をよせ敷をかゝねざれば、外の惡心止むゆゑに、佛法の法便を以て教へたるなり。譬へば小兒の小刀をとりて遊びをなすに、手をそこなはん事をあそれて、黄ばみたる木の葉をあたへて、こがねなりといひて小刀に取替へるがごとし、實は木の葉は金にあらず。念佛の功德も、人の唱ふる如くに唱へたる敷をつみかさねてある物にあらず。然る時は、誠に菩提の道遠からず、道の至極する所をさして言ふなれば、平生己れへの行ふ道の外に菩提を求むべからず。人たるの道は、仁とはいつくしみの心深く、義とは今日の人たる儀を忘れず、禮は上下其禮をうしなはず、万事にわたりて尊卑の差別を明らめ、少しも其理にたがはざる事をわきまへ知る所則ち智なり、信は五常のくさびなり、万事信なくんば有るべからず。女も又その如く三従のみちを守り、いかりを以て事を破らす、和して流れざるをもつて心とすべし。此れ男女の道きはまる所なり。賣人は又天下の寶を自他に通用する役人なれば、あながちに自分一人の利

101A  
徳とばかり心得ては、人の物をむさぼり奪ふ心のみ深くして、手を出してぬすまぬとも、其心常に他のたからを盗みて居るがごとし、其過輕きにあらず。自他をへだてず、金銀財寶は、天下の寶にして、他に在るも他の寶にあらず、自分に所持するとも自分の寶にておなし、只他人の手に滞りてうでかされば、其分用ゆる事なく、また自分にささめてはたらかさぬも、猶ほ石を積みて置くも同じ。故に何にても他につかはして、其金銀をうでかして、又手前の金銀も出して、餘所より物を取りあつめ、其うでかす徳によりて、人にも利をあたへ、我も利を得て、妻子けんふくを恵む、此慈悲平等の念にてあきなふ時は、是れ道のきはまる菩提なり。今日かくの如く道明に正しき時は、明日とてもうたかふ事なし。されば今生正しくんば、未來の事露程を念じ煩ふ事有るべからず。然る時は念佛題目のつとめ、今日面々家業の上と同じ菩提の道にて、二つ有る事なし。  
人の人たる心を明らむべき辨  
人と生れて人たる心なきは、そのまゝ畜生也。人は萬物の靈にして、天地の中にて最も勝れたる靈智となはり、上一人より下賤しき乞食の類にいたるまで、誰にならはされども、善事を善と知り、惡事をあくとしり辨ふる故に、かじこき巧をも仕出し、男女上下ともに

六根の上のはたらき、目の見る所、耳に聞くところ、鼻にきくわけ、口に喰ひわけ、手足  
 身体のはたらきまで、誰なまじむるとはしらねども、過ぎしむかしの事までも、見し聞き  
 しによらず、わすれ遠ぶこともなく、世間千萬人の其名其面、何方にと、め置きたる覺え  
 はなければ、十年廿年の後に逢へども、時に應じて其人を知る。畜類鳥類の性とても同じ  
 事なれども、其心くらくして偏なるが故に、何の知り辨ふる事もなく、夏の虫の火にやく  
 るをも辨へず、人にたくらふれば天地懸隔なり。幸に人々此生を得ながら、知ればしらる  
 智恵も備りなから、我が身を傷ひ、其心を知らずして、一生をむなしくおくる事悲むべ  
 し。仁はいつくしみと讀み、物をいつくしむといふにそくばく有る事なり。第一我をさへ  
 忘るれば、いつくしむの道自然と備はるべし。大跡人のなすを見るに、我が身二つのため  
 に衣食をもとめ、下人を苦め、晝夜榮耀の爲めに心をつくし、露程も人を恵む心なく、下  
 人をは我が身安樂の爲めに召仕さずと心得て、朝より夕にいたるまで、下人の苦しむ事をも  
 察せず、我が身に備はる實は人にあたへぬものと深く執着して、たとひ下人に食をあたふ  
 れ共、我が身に飽きてはみぢらしたる物をあたふ、さようにしては、下人いかで感心する  
 事あらんや。實ある人、信心ある人は、少しの物といへどもわけあたへ、一樽の酒を河水

に投して、これを飲むかごとくすれば、下人も主人の心を感じて、命にもかはらんと思ふ、  
 これこそ誠の樂、我が身の安樂といふべけれ。畜類の互に争ひ奪ふを見れば、露計りも他  
 のためにあたふる心なし、已れか身ばかりかたふなり。されは右のことくなる心あらは、  
 今日より形は人にして、畜生道に陥る事、無慘なる事なるべし。されは家に奢る心ある時  
 は、人のうやまはさることを憤る。實に人に敬はれん事を思は、我が身を謙りて人に交  
 り、厚く世の風流をこのむ輩をさけて、道知る人に交り、家に下たる人にも言葉をあま  
 ず、下僕にいたるまで、常に同躰の心をおこし、貧福因果の道を考へ、慈悲の心をもつて  
 我が身の飾りをへらし、常の身持人らしき行義を正し、誠を顯はし、假初にも人をそねま  
 ず、父母はいふに及ばず、我より年長じたる者には、言行禮儀常に心をつけて敬ひ尊む時  
 は、下人も其心を感じてをち恐れ、外よりも侮りかたく、自然と其威に服じ、假初にも先  
 より無禮する事なし。我が身常に恣に身持をして、いやしき心を持ち交るものは、こびへ  
 つらふ者計りを愛し、氣使ひなる人といふは、いみさくる心にては、下人も心にあなごり、  
 時としては無禮し、うしろ影にてはそしられ、何事か家にあじき事出来たる時は、内外共  
 にされはこそと心によろこやうに成る事、皆我が身持よりかこる事なり。惣じて人は仁



道を専らにして、少しも邪なき時は、其果をうけて其形正しく立て行ふなり。畜生に成る  
 ひくひは、邪ばかり行ひたる故に、其偏氣を受けて、其身も横にはしるなり。幸に今形た  
 てに歩み、心は善悪を知り辨ふる身に生れて、此時彌々つゝしまされは、今日の行に隨つ  
 て、愚痴にして道に心なきは、畜生に入り、貪欲にして善根をせされは、餓鬼の苦患をま  
 ぬかれす。我慢の心強く、奢る心高くして怒多ければ、修羅の苦うたかふ事なし。貪瞋  
 痴の三毒とも盛にじて、一つとしてかけされは、地獄の苦に陥り百千無量の劫を経て出  
 る事難し。是れ皆外より来るにあらず、我とてしらへたる事なれば、今日大信心を起して、  
 心を正しく行ひなは、今まで造りし罪ありとも、雪霜のごとく跡形もなく、成佛得道う  
 たかふべからず。  
 自身の外に法を求むべからずといふ辨  
 宗旨の善悪を論する人多し。宗とは、一心の旨としてつとめ行ふ道なり。外に心移さず、  
 自身の外に法なき事をたしかに決定すべし。何事をなせとも、曰れか心より出て、人々の  
 家業より初めて、万善万惡をなすに至るまで、我が心より出ざる事なし。十方億土の極樂  
 も、自身よりあこり、八万四千の地獄のすかたも、皆自身より生ずるなり。たとひ佛を念

し神を信じて、不思議の感應を得る事あるも、自身より出てざる事なし。かくのごとくの  
 明なる心性なれば、此の心をいつの時代にわけべたて、浄土、法華、禪の、眞言の、  
 互に是非をあらそはんや。何宗にても、惡をなせば惡果を招き、善をなせば善果をまねく、  
 中にてすくれたる宗旨とて言ふ人あり、すゝむる人もさやうにをしへて、人をたぶらかす  
 なり。其の宗旨になりたらは、たとひいかなる惡をなしたりともくるじかるまじきか。心  
 は形もなぐ色もなぐ、名もなぐ、寸量もなし。禪と名を付ぐれば禪宗といへとも、禪とは止  
 観とて、一切の分別妄想散亂轉動を止むるといふ。何れの宗旨とて、此道理なくして叶ふ  
 べからず。觀とは、本智の明なる正智恵をもつて能く、一切を観察して、自身の本性を  
 我と明め、世間出世間の道にかなふと叶はざるを知りわきまあるなり。是れ又何れの宗旨  
 にても、此觀智なくして菩提成就すべからず。佛の浄土と説きたまふも、衆生の自身一切煩  
 惱惡業の穢を止め、自心清淨にして、能く萬法を明に照し見る。此眼備はりたる時は、世  
 間萬法をわたりても、一として心をけがす事なく、今日そのまゝ安養の浄土なり。自性心  
 かくのごとく退轉なきを、阿彌陀佛無量壽如來といふ。かく知りわけて決定するを、觀智  
 といふ。禪の浄土のと名は別なれども、本心の躰は同じものなり。法華も又同じ道理なり。

佛、法華を説きたまふ時は、直に衆生の本心生付たる中道實相の旨をしめさる。中道といふは、生滅なき本跡のまゝ、今日の境界のまゝにして、六根をも明なる圓満の妙相、佛も衆生も一佛乘、同躰の佛とせしめし、人々の六根は蓮花の色を顯はし、一心を蓮花の中の實にたとへ、此一心に随つて、目には色を見、耳には聲を聞き、鼻にはよきあじきの香をき、わけ、舌には種々の味をしり、身には暑と寒とてわきやはらかなるゝあるれば悉く是れを辨ふ、意には百千万の事を知り、是の一心の實に付きたる蓮の花のやうにして、皆一心本來尊きも賤きも、同じ生れつきの本性にして、一切衆生皆是れ吾か子と説かれたり。是れによつて、六の巻には、六根清淨の旨を説き、一の巻には、佛の光明をはなち給ふ時、あらゆる世界の六道十界のすかた、佛の光の中に顯はれたるを、其座の大衆見たる事を顯はしたるは、皆一心法界、一同の佛乘なる事をしめし、二の巻には、長者火宅の譬喩あるも、みな此道理なり。其外八の巻の内、何れも中道にしてかたよらぬ理を明したるものなり。實相といふは、今日面々男はをこの實の相、女人は女人のまゝ、六道の別れありとも、そのまゝの實相にして、外ならぬ事を示したるものなり。眞言宗とて、阿字觀といふ事を示し、心に阿字本來不生不滅の金剛大日の相を觀念し、口には眞言をよみ、身には印

をむすひ、かくのことごとく身口意の三業を三密秘藏とて、即身成佛毘盧舍那佛の躰を、今日の身の上に成佛すと説きたり。其外諸宗とも、夫々の教あり。何れの宗とて、利根鈍根中根の機に随ひてをしへをなす。いつれか面々の一心、成佛の理より外なる事露はかりもなし。心の外に成佛の道理を説くを外道といふ。然るに今般淨土より外に成佛の道なし、法華經より外に佛法はなし、澤山に念佛の數を百億千萬もつめは成佛するををしへ、法華の題目を唱へたにすれば成佛するををしへ、禪宗にはひたすら坐禪をすれば悟るををしへ、わか宗旨のみすぐれたるやうに教ゆる事は、皆是れ世俗におなじ事なり。此生付の本心は、淨土宗にても、法華宗にても、禪にても、眞言、天台にてもなし。名を付くれは何になりともなる事なり。必ず宗旨あらそひする人は、佛法の大意、夢にもしらぬ人としるべし。右は宗の字の事なり。旨とは、面々至極して此理に隨ふを決定したる己れかたもつ心を旨といふなり。かりうめの茶物語にも、我が宗旨、人の宗旨とて、よしめし的事など語るべからず。今時分の出家に、法の本跡、佛心正直の旨を眞實にはげます人なく、只それの宗旨の上に學ぶ書物を覺えて談義し、家々の立派をならひ傳へて、兩替屋の手代か帳面の間を合はせよみたて、勘定は達者にすれども、一つとして我が金銀にあらず

るかごとく、みな宗旨の帳面は、大鉢間は合はすれども、多くは十念授くる人は、よみ渡したる金銀の数はかりにて、手前の信心は、十念受くる人の十分一の志もなく、法華を説きて是れより尊き法なしと教ゆれども、其身持、檀那の布施をかねて、榮耀にほてる分別より外なし。禪宗とて、口には書物に有通りを唱ふれども、書物をしるべにいふまでにて、直に已れか今日の身に行ひ、自身そのまゝの道理に實と決定する人まれなり。其上日用の行ひから、實の道にかなはんと心さす出家は多く見及はず、一向に在家の人は、心正直ならば道に入りやすかるべし。

直に成佛の道を決定する辨

直に成佛の道を決定する事、人々本來よりの生れ得たる佛性本性を能く知り辨ふべし。然るに古より佛道に心さす人を手引に色々ありて、久しき修行をつみ、百千の苦行なされば、成佛なり難しと教ゆるなり。佛の教も、皆其如く見ゆるなり。其後もろくの祖師達も、修行功作久しくして、佛道を成就すると教ゆるなり。しかれども、佛道にこころさす事は、信心一つにて成就すると心得べし。信心といふは、まかひ事あり、今時の信心を見るに、佛神の前に詣て、俄に肝膽を碎き、胸をきはり、顔をじかめてをかじを信心として

其場を立去れば、よこしまの事のみ行ひ、或は俄に難義の出来る時に神佛を頼み、身の苦しむに信心に拜し事、我をわか心をたぶらかすとかじき事ともなり。信心といふは、信はまこと、よむ、此まこととは、六根の働のうへ、日夜常住、君臣父子、夫婦兄弟、朋友の交りに至るまで、其道にたかはざるやうにとむるを、信心といふなり。たとひ金銀財寶を用ゆるとも、信心おこたらぬ心ならば、一錢といふとも利益なき事に用ひす、人のため、子孫のため、神佛の善根功德にはをしむ心なく、是れを施し日夜常住に作法をみたさす、道を行ふ人に近き、中にも眞の善知識を尋ねて、うやまひ法を聞く心にしたしかにうけかふ所あらは、其如くに用ゆるやうに心掛くべし。扱て直に成佛の道といふは、心より外に佛になるものはなし。此心は過去のむかしより、今日現在、後の世の未來に至るまで一心にして、始もなく終もなくなし。然らば今日は浮世をわたる故に、あじき事をする筈、當分は思ひのまゝになくさみたのじみて、後の世に成佛するためとて、出家に少々の施物をあたへ、或は佛前に詣て、少しの錢を投ちらし、夫にて一生ありたきまゝになしたる罪とかをまきらかさんとする愚なる人の心をかじき物なり。尤も悪き事にはならねども、それつらの善根にて成佛する事、ゆめ／＼かなふべからず。先づ我がうみ付けられたる此身の妙不思議

なる事、心に無量の事を知りわくる事を、能く信心を忘れず、明慧にじるべし。造化の神變妙用にあらずして、何にて有るべきと。六根の上をくはしむれば、百千萬の筆をつくすともしるし難し。眼はわづかに二寸にたらぬものにて、大山巨海を二目に見渡し、天のひろさも此眼の中にしづみ、一生の間、百千萬の人に逢ふて、其顔姿を見覺ゆ、毎日百萬の品々を見分ち、大なるも目に入り、芥子程の物とても見失ふ事もなく、萬法皆眼の中に入りて心に知り辨へ、一つとしてたかき事なき、是れをつらく心をつけて、常に忘れず考へたらんには、自然と妙なる事心に徹すべし。眼かくの如くなり、目もまた同じ理なり。諸の聲は、百千無量、人の物いふより、雨風の音、物のひびき、琴三味線、泣き聲笑ふ聲、一切物として音なき物なし。然るに一つとして聲の形なく、音の色もなく、大なる音かすかなる響、口にはいへとも、其形あらはれず。然るに人々耳にかじこき智恵あんで、聞違へぬやうにと待つ心かけもなければ、つゝに大鼓の音を鐘に取ちかへたる事もなく、惣じて物の音、我が耳に入るに、一筋に此方へ来るやうに思ふ。十人百人千人万人して、東西南北、上下より聞けとも、おなじやうに聞え、左程に大勢の耳に入るほど澤山なる聲ならは、一人ばかりの耳には餘るべき事なれとも、あまりもせず、形なくして、鐘太鼓、琴

尺八、一度にならせとも取まきる、事もなし。けつて形ある物は、品々をひとつにすれば取違ゆれとも、聲は終に混雜せずして、細き耳の穴に覺悟なくしてよく聞きわけ、此妙不思議を我と知り辨ふべし。次に鼻に香をかく事も同斷なり、別して匂は音もなくして、沈香伽羅の匂と白檀甘松の香と、形も音もなければ、聞きわけべきやうはあらぬとも、覺悟用心なくして、其品わかること、能く心をつけて知るべし。香にも千萬無量の品々あれども、一つとして形なく、書物にかき付けてありとも、文字に匂もなく、心に覺ゆてゐるとても、服中に其香もなし、唯ひとり鼻のみよくかぎわけて妙不思議なる事、聖賢佛菩薩も其理の至極を説きつくし難し。舌の味をわかち、身にふれてはきやはらかき、暑さ寒さを知りわきまゆる事、意の上に、右眼耳鼻舌身の五根より入る所の百千萬の品々、紙に書付けは、百千萬卷有るべき事を、形もなく胸中の廣からぬ所へ、一つとして取ちかひもなく知りわかち、廿年三十年の事とも、我が一生の知る人、其名其面、幼き時より見置きたる所までも、我が家の財寶の品々、覺えたる文字の數々、何程廣き野原に置きならべたりともせばまる程の事を、一寸はかりの胸中に皆おさめ置く事、父母も教へず、佛祖も言葉に顯はし得ず。我はよく知りて、それ／＼に用ゆれとも、しかるわかちかたき此妙

を、日夜常住起居の間も、信心を以て心につなげなは、我と佛と二つなき事を知るべし。然れども常に信心なき人々と、茶物語にこのひねを語れば、かならず争ひのはしとなり、只口かしてきままでにて、實の道にかなひかたし。たとへは面々に金銀を以て心に大切の物を深く信心するゆゑ、我か金銀の事をば、假初にも人に聞かせぬ如く、法の信心もそれと同一事なり。斯の如く自身の妙なる事、佛も諸の祖師も、此一心の明なる旨をせきらめんために、色々の難行苦行したまふなり、惣じて上人とても下人とても、男女のへたてなく、此明なる佛心は備りて、少しなりとも増減もなく、初めより凡夫と究まりたる種もなし。然れども直に成佛の旨をしゆる人に逢はぬゆゑに、まはり遠くならひ覺えて、我等は迷ひの衆生にして、我と悟る事成りかたく、末代末法の世に生れて、自身成佛する事かなひかたきゆゑ、佛菩薩の方をたのみ、來世は必ず極樂へ行くひ給はれど、月に二度か二度か、または折節事についてにか、佛の前にて小言いふて拜むをたのみとするはかり、それにては、いかにしてもたすかる事有るべからず。又ある族は、後の世には富貴の人に生れ、金銀妻子珍寶に榮花を究めんとをかじもあり。極樂の佛土のねかひやう、後世の榮花のねかひやう、ませこそにて決定したる事なし。これつらの、後世の願の事は、佛法の中のいるはなり。

前にもいへる如く、今生此身の心にて、未來永々までも、此佛心さしかへるなく、取替もなし。今生は凡夫にて、未來は佛となるならば、瓜を植ゑて後に、茄子をならせんといふか如し。たとへは鐵を金にせんとして鑄物師に頼み置かんには、いかなる上手の鑄物師なりとも、鐵は金にはすべからず。今生凡夫の鐵の、いかて佛の金となるべき。只よく我か六根のはたらき、一心の不思議自在なる事を知らば、今日すなはち本來成佛、在家は在家のままにして其道あきらかに、男女上下の位を改めず、そのまゝ神通光明常に明なり。世の愚なる人は、佛の通力といふを佛にはかりあつて、面々は及ばぬ事と心得るなり。右にいふ所の六根のはたらきそのまゝ神通なり。然れども以前よりさやうにはうけたまはらぬことなれば、急には落ちつかず。また辨舌よき人にいひまはされては、俄に疑ひもあこめ、我か心の申いろく、なる私し根生ある事、手前に覺えあるゆゑに、此心にては今日直に佛身佛跡とは思はれぬと、我と退くやうになる。是れ今時はかりにかきらす、佛の時代より、天竺にても唐にても、むかしも今も末代も、此病絶ゆる事なし。たとへは一生鏡を見ぬ人あらんに、其人我か顔をつゐにしらす。人あつて鏡を見する時に、右の鏡をしらぬ人は、心めて鏡にむかひ、我か顔を見て、曾て見なれぬ顔なれば驚き、是れいかにまに物の化け

あらはれたるやうに思ひ、已れか顔とは更に思はず。鏡をしめす人、是れ汝か顔ぞと教ゆれども、一往二往にてはうけかはず、ひたすら見せ、ますますをしゆれば、やう／＼に我か顔にてもあらんかと思ひ、後には鏡になれそみて、いよく次第に疑ひなく、已れか生付の面とたしかに決定して、扱て此上にて百千萬人よりて、其顔まことの顔にあらず、人か偽りて教へたるものぞ、今時の人の顔、何として見る事あらんといへども、一たひたしかに已れか面目を決定しては、いかやうに妨げられても、疑ふ事なく、迷ふ事もなく、已れか面とおもふか如し。直に今日本來成佛と決定して、我か今日のはたらき、能く／＼思案して佛力自在の妙相心は、本來成佛の至極と、佛心の面を髓に決定すれば、いかなる富樓那の辨舌をもつていひ妨げても、本來佛心の面を知るかゆゑに、まどふ事ゆめ／＼なし。是れよき善智識の鏡に逢はぬゆゑに、まはり遠く法を求むるなり。法華經の中に、長者窮子の譬喩を説きたるも此事なり。

地獄の沙汰、并に閻魔王の辨

夫れ地獄の現する事は、力をもつてまぬかれ難く、目に見ぬ事とてまゆる事なりがたし。總して三毒とて、面々備はりたる日々病あり、貪嗔痴是れなり。貪は貪欲にして、用に

もたぬ物までもむさぼりほじがる欲心、手前へ取つて己れが露の間の身一つのために食り用ひ、有るが上にも彌増にためあつめ、人を恵み善根作善の事にせんと思ふ心なく、食する物もよきものは、己れが口腹を養ひ、人にあたふるものは、すたるものよからぬものをくはする心、是れいふに及ばぬ事ながら、常にさやうに仕付たる癖なれば、地獄のもといなる氣も付かず、是れ貪欲の後は、餓鬼道なり。此身死して後はいふにおよばず、現在今日かたちうつくじき人の姿にして、心はそのまゝ、餓鬼道に落ちて居るなり。餓鬼は腹は飢えつかれて、たま／＼食に向へども、水飲まんとしても、忽に猛火もえ上り、其苦患かきりなしとかや。是れ現在貪欲多き人、常にむさぼりの念深くして、及ばぬ事をも戀ひしたひ、心に思ふやうに叶はぬゆゑに、叶はざるを苦しむ、身に熱氣生じて、顔も赤くなる、是れを煩惱といふ。煩はわづらひ、惱はなやむと訓す。煩ひ戀ひ求め、色々と手だてをなす、是れ煩なり。求め叶ひて後、それに付きてなやむ事出来ること多し、又もどめてかなはざるには、猶ほ／＼なやむ、是れ惱なり。大躰色をこのむにて知るべし。右三毒の第一貪煩惱なり。次に瞋はいかるなり。いかりの事をやぶり物をそこなふ事、人々心に知る事なり。怒生する時は、身に熱氣を生ず、是れ火よりおこる。怒は人と争ひかたん事を先と

じて、是れ修羅の因なり。死して後修羅の眷屬となる事はいふに及ばず、現在人いかに  
 きは、心かならず此道に落つるなり。況んや其果をや。是れ三毒の第二なり。痴煩惱は常  
 に疑多く、物を明らかに察する事あたはず、何やら胸中くも深く心くらうして、人に言は  
 んとしていふこと能はず、心のうちをいふこといふことほるばかりにて、人の言ふ事人のす  
 る事、皆疑はしく思ひ、さらば言ふてはらす事も叶はず、せんぶくして見る程の事にても  
 なく、とてお益に立たぬ事をうつらうと胸にぞめ置く。是れ無明の闇に迷ふ第一のさば  
 り、たとひいかやうの善知識にても、このさばり少くは残るといふに、いふより言傳ふるなり。  
 是れ痴煩惱にして、到てくらきは畜生道にいり、輕きは人間に生じても智慧なく、物毎に  
 愚にして、常に人中に交はれども、我が及ばぬ事をはさじ置きて、人を猜み心に恐れ多く、  
 獨居しても暗うして闇路に迷ふ心地して、現在人は人に有りながら、心は畜類に落つ。悲  
 しみ有様なり。右三毒のうち何れかおおく何れか輕じといふ事なく、此三毒ともいそなは  
 けたる人は地獄に入る。地獄といふは、數多くじて八萬四千といへども、衆生の分別感業  
 の數ほど出来るなれば、無量無邊にして、筆にもつぐし難し、言葉にものべつくされず。  
 然るにいか程地獄ありとも、右三毒を元とじて、それより無數無窮の地獄の枝葉を生ずる

なり。此地獄の有所を譬を以ていはんに、誰にても夢を見る時、夢に苦しきことのみ見て  
 なやまされおそはる、其人夢の中に夢なりとしりわきまゆるはたらきあれば、夢には苦  
 しまねども、それを見破る力量出す事叶はず、眠覺めてはじめて夢なる事を知りて、さめ  
 たる心より見れば、跡形もなき夢にて、いかにともする事なきは、人々思ひ知りたる事な  
 り。されば夢の始も終もなく、其在所とては天地の間にもなし。なき事をこしらへ出  
 じてくるしむは、無明の眠深き故なり。切て又目覺めて能く萬事をわきもふる時の本心は、  
 ねかりて夢見るときには、何方向にかくれて夢を氣の付くことなきを深くしるべし。水の  
 こほりと變するがごとく、晝のあかるき夜となるがごとし。水と氷と別の物にあらず、夜  
 と晝と元より一般の虚空なり。本來迷はぬ本心なれども、彼の我が顔をしらぬごとく、信  
 心決定の眼開けぬゆゑ、いつとなく夢を見出すごとくに、今日諸の境界の縁に引れて、或  
 は貪欲、或は瞋恚、或は愚痴、三毒の境にいつとなく引きおとされ、最後の一念、其つよ  
 き罪科の業に引かれ、夢を見出すごとくに、貪欲の心つよき人は、大海の荒海に漂ひう  
 きつしつみつ、目鼻口より水にせめられ、大浪にあし上げられて、虚空に上るかと思へ  
 は、又引潮に引きおとされて、天よりならくの底におし落さるゝ心地して、其中にも日こ

る少しは念佛等の心もあらしたねによりて、苦しみなからず、佛陀三寶をなげく心も夢の心地にて、生すれども引業のつよければ、あらゆる苦をうくるなり。是れ食欲は水の性にし、楞嚴經にも、欲を思ふものは身なめらかになり、男女の二根に液を流すと説けり。それゆゑに最後の一念、此軀をはなる時、あらましかやらの苦をうくる。其人々によりて苦を受くる事、百千無量の有様にして同じからぬなり。次に瞋恚よりひかれて苦をうくるものは、怒は大なるゆゑに、最後の一念に一生の間いかり罪科二度に競ひ起りて、大なる火の中へ逆さまにおとさるゝ心地して、手足をはり泣きさげび、其苦筆に盡し難し。愚痴おもくして、今日現在にて、佛心を明むる事なく、一切の空なる事を決定せずして、むなしく闇夜の心地にて終る輩は、たとへばせばき切通の中にて、兩方より岩にてはさまれて、行く事も叶はず、飯へる事も叶はず、急にくるしみみてあせりもかく内に、身より熱火もぬ出て、或は泣く涙大河の水となる心地して、あるもあらぬゆるゝの苦を受くるなり。皆是れ今生今日目も耳も心もたしかなる内に、佛法の大事、一心の本源をたしかに決定せずして、うつらうつらと御佛を頼みにして、めくら唱へにめたど佛の名をとなへたりとも、今日の上心のさばき儲ならねば、肝心の時に至りて、三つとして用いたるぬ事なり。

天賦地獄の生する事は、かくのこどくなる物にして、何方にぞ左様の在所あるかと尋ぬれば、目覺めたる人の夢をたづぬる如くにして、世界中の人夢見て寝いりたる中にて、目覺めたる人は其夢をしらぬがごとし。かほとにあたなる夢に苦しむは淺ましきやうなれども、手からわざにもならず、尋ねてもなき地獄なれば、くるしかるまじきに似たれども、業の引く所なき事を我と作り出してくるしむには、佛といへともすくふ事叶ひ難し。一向何方にも地獄の立所定めたらば、折ふしはぬけても通るべく、又は罪人あまりたる時は、そのうち取落しも有るべきなれども、面々に手作りして我とはまる時は、百千年の後ぞとも、地獄の修復にもおよはず、てしらへてまつ鬼もなし。今時なま才覺なる者か、佛も方便にて衆生をおとすまでに説き置きたれども、實に左様の事なしなどいひて、人々佛心の源をしらぬ身をして、いかて地獄の源をしらんや。地獄の根本は、汝の心より生ず。汝今日いろくの事をたくみ出して、たくむに隨て善事悪事を作り出し、愛欲の心より男女の形を作り出し、其外家を作り、萬の道具を作り、或は心いかりて喧嘩を作り出し、日々夜々になき事を作り出す。ひとり地獄の説猥に傳へんや。若し今日人界の上はある筈にして、死しての後の事はなき事とせば、今日現在を實にあるものと思ふなら



ん。また現在のある物の源をば、ある物より出来たとしるか、なき所より出来たとしるか、元なき所より出来たらば、現在の出来ものとても、鏡の中の影のごとく、水の中の月のごとし。又元は有所より出来たりといはゞ、出来たる元なくなりたる跡と二つありと思ふならん。腐儒庸才の類、すてしく名利のために書を讀みちらしたる分として、此佛心の本源、衆生の本性を夢にだも知るべからず。現在の有相破れすんは、未來空相の妙有なる事知り難し。直に己れか心のありくど物を知りわけなから、心の有所形ありといはんや。是れにて委しく心を付けたらんには、佛法の大事は、手間のそれぬ事なり。然るに右の百千無量の地獄は、三毒を根本として出来たれども、三毒は必ず外の物にあらず。佛心の光明なり。地獄色々にあらはるれども、皆佛心の縁に隨て顯はれたる物なり。夢の心は目あきたる時の心の變じたるにおなじ。然らば地獄も外の物ならぬゆゑ、現したりともくするしめるまじき物なれども、燃えたちたる火のいろくの薪にもえうつりて、やむことなきがごとく、六道輪廻して、百千萬劫の苦終るときなく、火はおなじといへども、沈香伽羅にもえ付きたるにはほひ香しく、惡木馬糞等に燃え付きたるは人は是れを嫌ふ。八寒八熱の地獄といへども、佛心は常に明なれども、さめたる人の夢見る人となりたるごときなり。

人にかはりはなれども、夢を夢と辨ふる事あたはず。地獄佛心そのまゝなれども、我どはたらく力量なし。大跡地獄の現する有さまかくのごとし。總じて地獄の品々ある事は、世間の人の惡業の品々あるに同じくして、筆に盡しがたし。次に閻魔王のごと、是れもいづ方にも所定りて、閻魔の所一ヶ所有るにあらず、人々我慢のつよきこと、八萬四千の煩惱の總つかさなり。此我慢の形顯はれて、心の關となり、右夢の譬のごとく、我と見出して通ること叶はず、或は善惡をてらしわける鏡もあり、或は舌をぬき、或ははかりにかけられ、又は粉にしてふるはれ、閻魔王前のせめ、一つとしてまぬかるべからず。其のせめのいろく有るべき事とも思はれねども、夢の色々を見出してあらぬ境界を現するごとき、たとへば幻術の者の手巾を結びて馬をこしらへ、目前にて瓜を植ゑて疊の上へ蔓をはせ、奇妙不思議の事をなす。それと同じ事にて、地獄ある手前にては、おしぎのせめに逢ふなり。若し一念佛心を慥に信心して、萬事にかはらす、諸事日用の事、金銀財寶に至る迄、我が心にとんじやくなうして、人の物を預りたるごとき、用ひながら頓着なく、諸の愛欲色欲に付きても、鏡にうつる影のごとく、喜び怒り、善き事にも惡き事にもくつたくなうして、善事はよきにしまし、惡事はあしきと知り、物にまかせて一生を暮

しなは、過去も夢物語のごとく、現在も空の雲のごとく、未來も虚空のごとく、三世十方に心にかゝる事、露ほども有るべからず。右皆私の了簡にあらず、佛説正法念處經等の中に閻魔王の事委しく見えたり。然るに今世に閻魔王の印判とて、日本にも五七ヶ所に有りて、人々類に押付けられ、閻魔の應をやすくと通るとかや。たとひ一ヶ所にありとも謀判なり。閻魔王に印判有るものならば、何として此世に出し置くべき。其替り彼方に有るべきならば、今の判は謀判と成りぬ。若しむかし古判ならば、是れ猶ほ用いたつまじきなり。其正印判といふは、押したる跡後々の證據とする物なるに、類におしたるまでにて跡もなく、たとひ押しておくと、體閻魔の所へ行かぬゆゑに、是れもあた事なり。總してかやらのまきらしき事、世上に多きなり、心を付けて知るべし。

不生不滅の辨  
不生不滅とは、死して後に不生不滅にいたるといふにあらず、今の身の上、日夜一切のはたらきのまじにして、不生不滅なる事をたしかに信すべし。此事は別して筆に顯はし、それを讀みて覺えたりとも、茶物語のたすけになり、人と争ひの方人となるまでにて、却て法のためによるしからぬ事なり。必ず志なき人、又宗我を立て、かたくなしき人などに見せ

たらんは、謗のはじとなり、謗も信心の妨と成りぬべし。第二面々六根の上にて、能くなく不生なる事を肯ふべし。先づ眼の上にていは、物を見るとき、白き黒きいろくの物を見れば、則ち其品々を知り分つ。見ぬ先より覺悟して、白き物の知りやう、黒き物の見様とて、心を生じて見るにもあらず、五色一つに交りたるを見るにも、心のまきれぬやうにとて、用心して待ちたるにもあらず、露ばかりも分別なうして、物に對すれば、其まを明に見分ける事、是れ不生にして見るにあらずや。不生なるものは、必ず滅する事なし、不生不滅と先後二つにはあらず、不生即ち不滅なり。猶ほよくはしくいは、たとへばものを見物するに、一目に見渡すとき、向ふところの見る物、其品々かすべは、百千も有るべし。それを一目に見渡して、是れは黒し、是れは長し短し、丸き四角、大小上下の品、色も千色、物も數に集る、人々男女貴賤、知る人しらぬ人、是れは家、是れは野山といふことくに委細にかすべは、千萬無量なる物を一々の數品程の數の心を生せずして、見るどひとしく、間もなく知り辨る本來不生の本心、始もなく終もなし。見る上さへかくのごとく生滅なければ、見ぬ時にも生滅ある事なし。寝ても不生、さめても不生、喩へは鏡に向ふがごとく、縁にまかせて種々の影顯はるれども、影のまじにして實跡ある事なし。元

より鏡は明にして、影のために鏡の明を失はず、物に對せぬとて、鏡の明へる事もなし。此生付たる靈妙の本智、百萬の境界に觸れたりとも、つゝに生もなく滅もなく、増すこともなく減ることもなし。然れどもこのむねたしかに決定なく、信心することなければ、我しらすに物に心を奪はれ、我にひびきなる事にはおちおち、曰かなれそめたる氣くせに任せて、生滅の心となる。古語にも、一翳在眼、空花亂墜、一妄在心、恒沙生滅すと云へり。心生滅すれば、六塵の境に迷ひ、それよりして貪瞋痴の三毒おこり、生死六道の所に流轉して、永く輪廻をまぬかれず。さるによつて、六塵の境界に逢ふて、鏡にうつる影のごとくに嫌ひもせず、貪着もせず、時々随ひ、物々に任せ、我が身のひびきをやめ、私の心をかこさず、世をわたる時は、一切の上生滅なくして、今日より佛心圓滿の位なり。生滅はおけさめするところなり。信心のおこりさめも、皆生滅の心なり。六塵といふは六根に對するといふ。眼耳鼻舌身意を六根とし、色聲香味觸法を六塵と云ふなり。六根と六塵と二々に合せて見るべし。右總して眼の上二つにて、其外の五根の上はおして知るべし。扱て今日の上かくのごとし、不生不滅なれば、生れぬ先の過去も、此身終りて後の未來も、生滅ある事なし。然れども初心の人は、現に母の胎より生れ出たるは生なり、此身臨終し

1011K

てあとなければ是れ滅なり。生死生滅、目前にあるをいかにて不生不滅と知り、生死を脱すると言はんと疑ふなり。曰か分別なりとしれば、生も生にあらす死も死にあらぬなり。近しいは、母より生れ出たる時、我と生るゝと覺えたる事有るへからず。二歳三歳の時分より、母胎より生れ出たがといふ事を聞き覺えて、過ぎしむかしの事を分別して、生を引出すなり。死する事は、明日にもせよ、來年にもせよ、今此場になき事を爰に分別を以て引きよせ、死を引出すなり。過ぎし跡を分別せず、來らぬ後を分別せずんば、生死いつれの所にかあらん。其上生れたる時、生を知らねば、生れながら生をはなれ、死する時も死の分別あるうちは、息は引取らず、其分別覺なき時、死するなれば、死も死をはなれて死するなり。總して生死を恐るゝ故に、輪廻まぬかれず。たとへは細き橋高き岸などにのぼる時、危きと分別しておそれながら渡る時は、かならずけかをなすがごとくなり。右は大信心の人にあらざれば、生死をまぬかるゝ事能はず、今日是れさへ決定すれば、本來成佛うたかふ事なし。

心を鏡にたとふる辨

心を鏡にたとふるに相違あり、心は六根の源にして、眼耳鼻舌身意ともに鏡の面の如し。

六塵は六根に對する時、眼にいろ／＼の物を見分けて、心の上に知り分くる事、鏡に影のうつるかごとし。耳も舌も同じごとわりなり。然るに我が身の總躰、鏡にたくらぶるに、鏡は裏表あり、人々の身は裏表なし。眼に見る中に、耳より聞きて知り分ち、舌より影顯はれ、身より觸れて品々をしろ。身に百所針を一度にたて、火を百所につけたらば、百所のあつさ、一度に知りわからず、背足のうち、いたゞきの上にて、いかやうなるこまかなるものさはりても、その儘知り分つ。全躰頂上より脚下まで、水精のすきとほりたるごとくにして、壁の外にて、人音物おとすれども、皆其品々に知り分くる事、鏡のおよぶ事にあらず。其上耳に聞く物おと、脇にて響き、其後に耳に入りて聞き知るといふにあらず。何程遠き所にて物音すれども、鳴ると一度にきゝしるなり。少しも間もなきこと、心をつけて知るべし。是れ心を生せずして知る證據なり。又心を月にたとふるに、月よりも明なり。月は天上に顯はれ、山河國土をてらしめて、淨穢のへたてなく、人の見ぬ所とてわたくしなく照して、人を惠めども、少しにても思にすることもなく、其光三千大千世界をてらして、つるに止む事なく、誠に大なる事なり。人の心もそのごとく、心のひかり月におとらず、能く一切をてらしわけ、六根より光をはなち、生よ死にいたるまで用ひてつき

す。上下尊卑のへたてなく、何れも此光をなはりあれども、我が顔をしらぬかごとくにて、我と光の明なることをしらす、空しく外にむかふて尋ね、大事の佛心の光明をわづか夢の内のためしみに引きかへ、永劫沈淪の苦をうくる事、誠に歎はしき事ともなり。能く信心をおこし、我が身に立皈り、明けても暮れても、自心大事の心月を我とくらまると深く誓ひて、行住坐臥に心にかかは、自然に月よりも明なる事をしらん。是れ虚靈不昧の心月なり。凡そ月といふは、夜を照して晝をてらすこと叶はず、人は晝夜のへたてなく、六根みな光にして、聞き分け食ひわけ思ひわけ、物陰にても能くてらすは、この心月なり。月は物かけを照さず、人はてらさぬ所もなし。月は萬劫生死の關を照破する事叶はず、心月は一念の信心決定して、元來備はりたる光明を以て、生滅去來の関路をてらしわけ、輪廻のくもりをはらふ事、天上の月の及ぶことにあらず。然れども不信心にして、我と打捨て叶はぬことと退くは、涅槃經に説けるがごとく、老婆か家の様の下に大分の金銀を埋めて有るを知らずして、それを教ゆる人に逢はねば、一生むなく袖乞して、貧しき目に逢ふといふ譬喩におなじ。

心身二つあらざる辨

身と心と二つに見るより迷を取る。佛の時代よりして、身は假なる物にて、焼けば灰となり、埋めは土となる。地水火風の四大をあつめて身となし、心は其内にやどり、此身終れば、又外へわたり、あなたをなたと宿替すると思ふ。此迷ひ大跡なる事にて、落付かぬ事なり。然るに心といふは、形もなく色香もなく、只能く萬事を知り分ちて、明なる物とまでは知りやすくして、皆六根の中にて、意根の思はくといふことをしらす、此場は一きは親切大信心の所にて、念佛題目を頼みにして日をくらす輩のしる事にあらず。歴々禪を學び、坐禪悟道を專にする輩も、此所においては、しらぬ野原にてめぐらざるまはしたる心地して、うろたえる所なり。總じて佛身は自身の上そのまゝなる事をしらぬ輩には、六根のうへ明なるもの、そのまゝ本智の光明とせめせども、其段得と信心して後は、又その已か本心を執着する病を退けされは、同じ生死輪廻の本と成るなり。目に物を見て赤白を知りわくるは、此身に付きたる眼玉の能く光るゆゑに、物の影うつりたるものなり。鏡よくみがけててらせは、よく影のうつると同じく、然るにうつりたる影か、誠の物かと思はれは、影はあたなるものにきはまりて、一つとして取るにたらぬものなり。是れにて能く知るべし、眼に白き黒き百千萬の物を見分けるは、眼玉よりうつる影にして、本心といふ

にあらず。耳より入り、舌より入り、六根より入る影も、皆同じ理なり。それをいかにといふ、不見不聞、不嗅不食、身にふれず、意に思はぬ時は、心は何方へ片付きたる物と、是れに因て六根より意にうつりたる物を心に思へは、猫の鏡を見て手を出したるかごとく、そてもなき影を實の物と見る猫のかるかなるを、今の修行に引きなそらへてしるべし。然れどもその影外のものにて、實の物は別に有るといふにあらず、影と本体と一般なり。そのことく六根の上、六塵の影うつりて、眼は色としり、鼻は香としり、耳は聲としり、一つとして外の物にてはなれども、それとどむる見か害をなすと知るべし。さるによりて、身も心も元來二つなし。水と氷と二つなきにて知る、二つと見る見を止むれば、身心一如、物我同躰といふ物なり。いにしへより此別々に見わくるあやまちより、二つなき中において二相を見出す、目を押して月を見れば、月二つありと見るかごとく、元來法の眼正しからぬゆゑに、自然の二相を見出し、六道の迷是れよりおこるなり。兎角に一切の事において、我を分別してこしらゆるゆゑ、迷なき中に迷を出來し、現在今日、人の付合にも人の思はぬ事を手前よりうたかひの分別をおこすゆゑ、向ふの人は氣も付かねども、此の方よりへたつる心出來て、いつとなく中あしくなるなり。色にふけることも耳通りなり。

唯色よき人を見て、色よしと見るに科はなけれども、其上にいるくくの分別おこりて、食着の念を生ずるゆゑ、それよりして心くらみ、世のあしきさまを出來し、我とほだしたかゝるなり。此身心不二の事は、筆に盡しかたく、たとひ筆につくしたりとも、見て益にたす、我と心に怠らず、常に信心に心を付けざれば、得心する事ありかたし。

一心法界といふ辨

一心といふは、曰れか五尺の身のうちに一つありと覺えて、我か心は我が一分の心、人の身にあるは、此方にてはなしと思ふゆゑに、法界の衆生の數定りて、此娑婆世界に喩へは、一万人に一万の心なはり、其内にて千人も死する時、内五百人は淨土極樂にも往生し、内五百人は六道の中にうるたへ、殘る九千人にして、現在に人數減する等なり。然るに次第に入まして生れ出る時に、今生れ出る人は、六道の中より段々に生れ出たらんには六道の迷人皆人界へ出て、六道にて其數ほとへる等なり。扱てまた西方極樂へ往生して、不退轉といふて、一度極樂へ生したる人は、かさねて六道輪廻に出る事なき事なり。然る時は佛の出世よりこのかた極樂をねかふ人、日本ばかりにても大分の事なり。殊に三千年このかたねかひ人おびたしき事にして、其上に唐土天竺にても大分の願人、年積りては

砂の數を以て算へたりとも、かそへつくさるゝ事にてはなし。然るに三千年以前に釋迦成佛在てより、其後成佛の沙汰なく、十方億土の道遠き故に、しれぬといふわけも有るべきなれども、一佛出世すれば、十方世界あらゆる地獄の底までも、其光明照渡りて知れぬといふ世界なし。其上極樂遠くしてしれぬにしても、右大分の衆生、極樂ねかひ多き中にも半分は叶はずとも、三か一も極樂往生有るべし。然らば三か一往生しても、其數大分の事なれば、最早六道輪廻の方の數かへるか、又は人界の方かへるか、いかさま衆生の數へる等なれども、次第に人はまし、罪つくるかちの世の中なれば、地獄餓鬼等の惡趣もさそな大分すすならむ。何れかまし、いづれかへりても、極樂と人界と、地獄と餓鬼と、修羅と畜生と、天上と菩薩と、聲聞と緣覺と、此十界合濟の數さたまりたらば、いづれぞ増減なきことは有るまじき事なり。是れ皆一心の法界のわけ明ならぬ故に、衆生に數定りたると思ふなり。極樂往生といふは、左様の事にてはなし。又衆生も左様に數ありと見るは、常見外道とて、九十六種の外道の隨一なり。此一心といふは、人はかり一心にてはなし。心といふ名は別々になりて、面々色々の心にかくれたる時の名なり。元來天地も草木も、風雨も雲雷も、地水火風も、人間畜生、天上地獄有りとあらゆる、皆一心性なり。生類とな

る故に心あり。地水火風草木の類に顯はれたるは心ならずして、是を法性といふなり。心と性とは二つにして、分れたる所を見れば二法なり。たとへば大海の水は平等一味にして爰を見れば萬法一心性の如し。然るを其海水をひとつ汲みては手桶にいれ、又くみては茶碗に入れ、百も千萬も色々の器にくみわけて、或は甘き物にまじへ、或は酸き物、苦き物、くさきもの、香はじきもの、赤色白色、五色百色、無量の色香に交り分けたる時に、一つ大海の水なれども、分かれたる品々、器物も別々それくの縁に觸れて、手桶の水は茶碗のへたてをなじ、酸にまじへたるは、酒に造りたるとは格別に見え、大小便にまじりたるも、茶の水手洗水とは、はるかのおちかひ、何れも同じ大海の水にまきればなけれども分かれたる品々、しはらく數あるに似たり。然るにその一々の水に月影うつる時、天上は元一つ月なれども、一々の水毎にいづれも月一つづつ、うつらぬはなし。是れ自然の理なり人々別々に法界一性の水を汲みわけ、面々の入物に、一つづつ、影うつり、此器物の月影と彼の器物の月かけとは、別々にして一つになりかたし。面々一々に心をなはり、わかれわかれの心になりたれば、其中にも心すなほなるは、甘き物にまじへたるごとく、惡心はらたちそねみにくみの心あるは、苦く酸き物にまじはりたるごとく。まじり物入物わかれて

より、いかにしても一つになしかたなく、自然とへたてそねむに至るなり。爰にて大信心の心を起し、法界一心のまなこ開けて、一切にかはる事なき人は、其水元の大海に入りたるかごとし。さなき人は、其入物より又外のいれ物にうつり、或時はよき器にうつり、或時は小便たこのやうなる物にうつり、本來の大海に歸る事なり難し。是れを輪廻とも、流轉ともいふなり。是れにて衆生さまりの數有るべきものか、増減の有るべき物かを能く能く知るへし。このまじへりの事、不増不減經に、文珠の佛と問答ありて、中々大てい的事にて通せぬ事なり。又輪廻の事を火にもたとへて有り、一度沈香伽羅にもえ付きたるは、よき果に生れたるかごとし。それまでにて消ゆれば別事なきに、現在沈香の火の時、色々行ひあしく、色欲、財欲、怒嫉妬等の薪に又してはもえ付き、段々にもえ行く程に、消ゆる間もなく、次第に惡木馬糞等に燒けうつり、本來不生のいにしへに歸る事なり難く、輪廻やむ時なし。よき薪の時になりとも、惡き薪の時になりとも、只今日物々の上にて、分別執着いかりそねみ、惣して物に滯る心を止むるは、火を散らさず、それ切りに火をしめすかごとし。然るに火を消したる如くなるか成佛ならば、死しての後空を成りて何もなき所ぞと心得て、無見空見といふに落つるなり。無にも空にもならぬことなり。薪に燃え付

きて、火の手のあらはれたるは、縁生といふて、縁起は無性と説けり。縁より生したる物は、實跡なき事定りたる道理なり。凡そ人間も草木も形に顯はれ、聲にあらはれたる物の香にても、味にても、皆縁より生したる物なり。鏡中の影のごとく、水中の月のごとく、ありくとも有りなから實跡なき事なり。是れによつて薪の縁盡きたる時、其火消ゆるに似たり。實に消ゆることなし。石にも火打にも火の性備はりて、いつにも打ちては出る事必然の理なり。打ちたる時火の光あるを、火はじめて出來たるにあらず。打ちもせず火も出ぬとき、火絶えたるにあらず。火消ぬても生したるにあらず、火消ぬても滅したるに非ず。人も又かくのごとし。今日現在燃ゆる最中なれども、誠に現在にてなし。其まこと不生の境界なり。このわけ信心なくしては、中々親切に落付く所にてなし。返へすくも心をせめよ。

男心女心ともに隔なしと云ふ辨

男女とてへたてなし。心はたれども同じことといふこと、習はすともしれたる事なり。男子にても、執着多く、怒つよくなれたまらぬみ、色に溺るゝ心深きは、女人にひとし。女人にても、此菩提の心明に、今日の上正しく、右に段々言ひたることくに用ひたる人は、

男子に違はず。是れ佛説の通りなり。法華經の中に、文珠の大海の中に入て説法せし時、八歳の龍女直に成佛して、南方無垢世界に到り、八相成道したると説きたるもこの事なり。それを今時法華經か有難き經なる故に、女人成佛したりといふはをかしき事なり。法華經八卷は、佛滅の後に、阿難佛、一代の説法を覚え居て、一々に書立たる物なり。總して經皆その通りなり。今時分法華經を幾日と限りて講釋し談義する様に、佛の別して日をかきりて説きたる事にはあらず。此一大事不生不滅、本來成佛のむねを説きたるは、何れも大乘といひて、上根大智の衆生のために、直指の旨を説きたるをば、華嚴經にては法界と名付け、般若の時は、大智慧と名付け、涅槃の時は、佛性と名付け、法華の時は、蓮花にたとへ、何れも佛法本來不生不滅の旨を、時々随つて名を替へたる事なり。淨土といふも同じことなり。男女貴賤露ほども其性に増減ある事なし。しばらく時の果あしくて賤しくなり、福か叶はずして下人ともよはる。其心に一切を照し分ける六根のばたらきは、何れも違なし。夫れ故菩提に心をかくる人は、かならず人を使ふに敬の心を以て、つゝしむて疎にすべからず。法華經の七の卷に、常不輕菩薩の事あり。常にいか様の賤しき下女下男の類にも馬方船頭の類にても見れば、手を合せ禮拜をなして、爾等皆當作佛と唱ふれば、皆心



なき賤しき下人とも、打寄てをかしかり、又はしかり、此狂氣者として、石を打ちつけうちたけは、また遠くのかれて、其者どもに手を合せ禮拜して、右のことくに唱へ、後には佛道成就せりと説かれたり。皆法界一相の佛心、何れか佛跡ならぬ物はなし。今日主従の法なれば、言葉作法こそ其品々分つとも、心は右の心さして、内心に敬を生ずれば、家來も又其心に感して、上下平になるべき事なり。女人は成佛し難しといふ事、形によるべからず。但し女人は自由にあるきて善知識に逢ふ事叶はぬ故、我に有る佛跡といへども、鏡を見ぬ人のたとへのごとし。教にあづからねば知る事成り難し。男子とて、今時分の通例の佛法聞くばかりにては、女人の外へ出る事成り難きよりも劣りたり。殊に眞の善知識たる人すくなければ、いよく遠く、いよく空しく日を送り、最期の時には悔ゆれども叶はず、其中にも生れつき病にまけず、外より見たる所は、大往生杯と百人は百人ながらうらやましがる其心のくらさ、闇夜に道しらぬ所に行きかゝりて、途方にくれたる心地しもうるたえる事をしらす。是れに因て誠の道を明め、一大事の本心をたしかに肯ひて、信心決定して臨終する人、百千人の内に一人も稀なる事なり。しかし我が本心不生不滅の道を明めずとも、今日の上二つとして惡事なく、眞實實道にして、只何の辨へもなく、佛

法ありかたし、後生一大事とはかり覺えて、念佛の外何の辨へたる事もなく、そのまゝ終はるやからは、人界の福報を失はず、三途の地獄はまぬかるべし。されども心もとなきは途中にて惡縁に引かれなば、元來決定の大信心なき故、又惡趣に引きおとさるべし。御用心く。

臨終要心の辨

世間にて臨終の時、よくものをいひ、正氣みたれず合掌し、念佛となへ息引切る者を見て大往生なりとて、人々是れをほむる。そのまねせんと願ふ心を、我と我が心に尋ねて見るべし。人の生付にいろくあり、氣強き人は、いか様の節にいたりても正氣なるものなり。大往生の事においては、それを頼みに成り難し。氣弱き生付のものは、少しの病にもまくるゆゑ、臨終の時分、何とやらよろしからぬ風情あるも、あなかちに臨終あししと言ふべからず。此身は四大を以て合成したるものなり。四大といふは地水火風なり。大の字を付けていふは、地は世界國土に普き物にて、我身も其中より分れて來る物なれば、法界皆大なる中のわけ地ゆゑ、地大といふ。身のうちの津液、すへてのうるほひは、皆水大の性にして、大に法界にみちたる水を分ちたれば、是れを水大といふ。身の動くは風大の性、

身の温熱は火大の性、此四大を合せて成就したるゆゑ、皆かゝ物といふなり。然るに四大のうちにて、地大の勝ちたるは、生付其心くらゝ敷、氣もおもく、水大の過ぎたるは、和かに柔和にして、しかも愛欲に溺れやすく、火大の勝ちたるは、怒つよく嫉妬深く、人を恨み氣強く、事を破りて情てはく、風大の過ぎたるは、氣とんてきにして、天窓かちなさばく事を好み、浮氣なる生付、四大等分に生付きたるは、何にても申分なき不出不入と見ゆるやうなる事なり。右此生付にいろく有る事なれば、臨終の時の次第は、四大のなれきはにて、宜しからず打見たるも、様子よく見えたるも、其時の打見たる所にて、善悪は言ふへからず。臨終の時の事を、今からしならふへかす。其時正念に膝をくみ、掌を合せて佛に向ひ、言ひ度事といふやうにせんとて、ひたと心かけても、いか様の事にて存じよらす打切られんもしれず。水に溺れ火に焼かれんもはかり難し。兎角善悪共に過ぎし事を悔むべからず恐るへからず、末の事たくむへかす。只當分くさし當る所を善に付きても惡に付きても、はらたつ事に出逢ふたるにも、悲しき事、嬉しき事、隠しても此事はなしたきと思ふ事の出来たるにも、其時々信心をおこし、宜しからぬ事は、毒を見るかごとく、善事は灸をすゆるかごとく、當機く心に用ふるごとく、誠の信心なれ。臨

終の時の事を、今からのせんさくはいらざる事なり。臨終よく仕したきと願ふ心を尋ねて見るへし、外聞をかざる名聞の心つよきか故なり。臨終は、念々生滅念々遷謝といふ事をしるべし。凡そ念といふ物をみづから知るに、一念くあとかたもなく、前に思ふ念と跡より出る念と、次第くにうつり行き、かきけすことくなるを、遷謝といふなり。然れば前に過ぎし念を過去といひ、當機の念を現在といひ、此末に出る念はまた出来らぬゆゑ是れを未來といふなり。然るに過ぎ去りし念は跡方もなければ自性なく、當機現在の念を思ひながら、自性あるかと立歸り知る時、念といふ物かつてなし。是れ現在の念も跡方もなし。未來の念はまた來らねは、猶ほ自性あるへき様はなし。かくのごとく三世共にしはらくもといまる事なければ、一念くの臨終にして、たゞ當機くを深く心をつけ、露ちりほども、善悪ともになびかりのごとく、水にうつる月かげのごとく、谷にひよくこたまのごとく、鏡にみゆる影のごとく、跡をかへり見す悔まず、いまた來らざる事を、深く思ひはかる事なく、當念も自性なしとたしかに決定して、此一大事の所を信するを、念々大往生といふべし。然る時は、此身の終りの時節に、臨終宜敷せんと今よりたくむは、杞人の天か落ちぬへしとて、おそれ走るかごとし。されは當念々々上のにて、或は腹立、

或は色に迷ふか、または貪欲おこる時、其念どもに鏡にうつる影なるを辨へずして、つねに其念に引かれ、よこしまなる心をおこし、悪事に及ぶ事、是れ一念の臨終をしることなひたるものなり。當念の遷謝し臨終する事にさへ、自在ならずして、いかて身のをはりの臨終心のまじならんや。其上臨終の後、極樂往生するといふ事を、此世の富貴榮花にぐらぐら如くに覺えて我人さやうのたのしみ深き所に至り度く願ひすれども、佛の説き玉ふ極樂といふは、さやうのわけにはあらず。

往生極樂の心得違ある辨

極樂といふを、苦に對する安樂と思ふ故に、淨土に往生したらんには、先づ居所奇麗にして、夏の暑も有るまじく、冬の寒氣もなからん、飢ることも有るまじきと、假の浮世の樂の如くにおぼえて淨土を願ふ輩多し。左様に心安く月日を送りて、なす事もなく、心のまじに住居とする佛は有るまじき事なり。至極の樂なるか故に極樂といふ。至極の樂は、苦もなく樂もなし、苦樂どもにはなれたるを、眞の淨土といふ。淨土といふは、維摩經に、心清ければ佛土清しと説けり。又衆生の心すなはち菩薩の淨土とも説けり。今日面々の心、一切貪瞋痴にかされず、諸の善惡の境界を見る事、鏡の中の影の如く、善は善と見て、

さしてよるご事もなく、惡は惡としりて、甚だ憎む事もなうして、しかも善事はなす筈の事、要事はさぐる筈の事、かくの如く今日の渡りはを心自在にくらす時は、物にあざろく事もなく、さして恐るゝ事もなく、難義到來しても、其時にまかせて、跡を悔ゆる事なく、いか様の事を人がいひかけても、心に知りて是れに動轉する事もなく、益なき事にはあらずおこともなく、物々の上、鏡の明にして、能く照し分けるかごとく、黒きはくろく白きはしろく、少しも違ふ事なくして、しかも鏡は黒きをてらしたりとも、にくみいご事なく、白くうつくじきかうつりたりとも、塵程もとむる事なきか如し。其心たいらなる事かくの如くなるを名づけて、淨土といふなり。たとへば身にけかれあり、心にかゝる事あれば、瑠璃の寶殿のうちに居たりとも心けかるゝ事を知つて、安からざるべし。若し其心淨き時は、いか様の見くるじきあばら家に居るども、心常に平にして、少しもにくみいご事なし。是れ心清ければ佛土淨しといふこと歴然なり。淨土は必ずしも所によるべからず、去此不遠といふは此事なり。また唯心淨土、己身彌陀ともいふなり、然るに西方十萬億土と立てたる事は、西方は日のをさまる所に、日の照すうちは、方法のわかれ有りて、諸の差別の境に迷ひ、善惡のわかれ、賢愚の差別、上下男女、三毒のちまた、六根

の品々、心もかくの如くに散亂して、なき地を見出し、種々無量の跡に迷ふ、是れ皆日の光あるうちに、十界六道の輪廻多し。若し一念無生の所に至りて、一切善惡の差別なく、無爲無相の心地に至りたるを、日の西方にをさまりたるに喩ふ。又西の字は、三四を書きたる字にて、四方のわかれまちくなるを、一体無相、不生不滅の心にをさまりたるを、西方ともたどへたりといへり。十萬億土といふたるは、身に十惡あり、身三、口四、意三とて、身の三つは、殺生、偷盜、淫慾、此三つは、身に於て行ふ故に、身三といふ。口四とは、綺語といひて、まぎらはしき事をかさり云ひて人をたぶらかす。惡口とて、拙き詞を以て人を罵り、人の害に成る事を云ひ出し、怒憤りて、はなはだ惡言を吐出す等の類なり。兩舌は、爰の事をかじこにてあしくいひ、かしての事をこゝにてあまやかさまに云ひなす類なり。妄語に、いつはりみたりなる事を語る。是れ口に作る四つの罪なり。意三とは貪瞋痴なり。貪は道理なうして物をむさぼり、身の榮花に奢をせん爲めにあたはざる財寶をほじかり、飽くまでつみたくはへても、是れを我がものを執着して、與ふべきにあたへず、わかつべきに分たす、是等は我が物ながらにむさぼるなり。瞋はいかりはらたつ、痴は愚痴なり。此三つは意の内にて作る罪なるゆゑに、意三といふ。是れを總じて十支の

煩惱といひて、此十惡を八萬四千の煩惱の根本として、一切の地獄を建立するなり。此十惡、元一念の起りより生ず。其一念といふは、元無念の性なり。無性の本性は、本來まよひもなく、悟もなき佛衆生同躰の本心なり、しかれどもいつとなく忘れたるが如く、道にふみまよひたるが如く、無明の一念にさへられ、一念起るとひとしく、十支の所にわかれ、本性常住唯心の彌陀をうしなひ、水の氷となりたる如くに、本心變じて十惡となる。是れを十萬億土遠しと説かれたり。近きたとへをいはは、我が居所に在りながら、居所を餘所に覺え違へ、其家に在りて其家をとほく覺え違へたるが如し。若し自心自性の一念立歸りて、自らてらし、みづからしらは、本來迷はず、本來さどらぬ不生不滅の無量壽佛彌陀經に説きたる所の現在說法といふものなり。此の如く一心不亂にして、元來みだらぬ事を決定する時、十萬億土、一念のうちに越えて、苦樂をはなれたる眞の極樂、不生不滅、不退轉の所、上品蓮華に化生して、阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり。若しまた實に西方極樂は、十萬億土のあなたに有りといはは、さほを遠き前へ一念の内にはいかやうに往生したる物ぞと、ふかく心をつけて見るべし。佛説にいふ所の一佛土といふを先づ知らんに、須彌山の四洲、南を南瞻浮州といふ、此娑婆世界なり。東を東勝異州といふ、北を北閻留

洲と云ふ、西を西瞿耶尼州といふ。此娑婆界はかりも、五年十年休む間もなく行きたりとも、西瞿耶尼州まで到る事叶ひ難し。然る所須彌のの四洲を一つにして、是れを小千界といふ。此小千界を又千合せて中千界といふ。又中千界を千合せて三千大千世界といふ。是れを一佛土として、則ち今の釋迦牟尼佛の淨土なり。此一佛をつらくはかり見るに、心も詞も及はぬ程の事、それを十佛土にても夥しき事なるに、百千萬をかさね、億といふ數に至り、又此億の數十萬億の佛土を過ぎて往生する所を淨土とせば、いかなる早わざにも、一念の内にてゆるといふこと叶ひ難し。一念といふは、たとへば飛火してあつとあつさをしる間の如く、至て間のなき事なり。一念をしるに、直に無念なり。無念の當躰、直に阿彌陀佛といふ事をしらねは、十萬億土をこゆるとも知り難し。扱て又西方に實に極樂の土地定りてあるとならば、京の入口の如く、是れよりして、穢土と淨土の境目といふ限り有るべし。若し淨土に限りあらば、其淨土の西の方、南の方、北の方は、また穢土なるべし。其西の方の穢土よりは、東方阿彌陀を唱ふるや、北の方よりは南方のあみだ、南の方よりは北方阿彌陀といふ也。極樂の近國の人、十萬億土とは云ふまじきなり。又かくの如くに限りある淨土ならば、釋迦以來、唐土、天竺、日本に至るまで、三千年間に、西方願

ひの人多ければ、一々往生して淨土にいたる時には、もはや今時分往生する人は、極樂のえんはなにも居らるべからず。前にもいふ如く段々往生するのみならず、不退轉といひて一たび往生する人、退轉して立ちのく事なし。左様に行きとまりする大分の往生人なる時は、此方の人も滅する筈なり。大抵極樂の事かくの如く云ふとて、淨土宗をそしるといふにはあらず。極樂か淨土宗はかりの請とりにてもなし。みな自性をくらまし、眞の彌陀佛をしらぬ故に、深くせめてかくいふなり。阿彌陀經の本意あしく心得れば、胎うりのなきからくりのやうに成る。それ故に不信心の儒者の類に出家もなじられ、いきつまりて我が手作りの仕損ひのやうに思ひ、顔を赤めて居るやうなる哀れ世の中の佛法也。よくよくつとめてこれを知るべし。

事理體用を知るへき辨

總して世間出世間ともに、事理躰用のおかし、性と相との差別を知らねは、見偏固にしてつかゆる事多し。事と用と、相と色と、空との二つの時は、色皆同じ事にて、あざに顯はれ、形にめかれ、品々差別あるを事相といふなり。あらはれたるによつて、色ともいふ。理といひ、躰といひ、性といひ空といふは、たとへば火にていはば、焼ゆる所のかたち、其光を

事とも相とも用ともいふなり。其火の本性を見るに、形もなく、手にも取られず、無相の理なるゆゑに理といひ、火の本跡をさして、跡とも性とも云ふなり。然るに事相色用は有相といふて、現にあらはれある物なれば、有と名付けたり。理と跡と性とは、目に見えず、無相にして虚空の如くなるゆゑに、空といふ。空といふにも、三空のわかれあれども、こゝに略す。然るに法を學ぶ人、有相に執着するもあり、無相空に執着するもあり、禪者などの病には、一切の法空にして、何もなく、水中の月のあれども實にはなきが如く、今日此身も焼けは灰となり、埋めは土となり、心も谷の中のひゞきの如く、鏡の中の影の如く、山河天地、草木國土も皆歴然として有るに似たれども、すべて壞滅に歸する物なるゆゑに一切皆なしと信して、因果も地獄も、すべて假に説きたる物にして、心も空にして、無性なるかゆゑに、たとひいかやうの惡事をなしたりとも、水にゑがきたるか如く、つみどかもしと教へをなす故に、尋常の行作にあらき所あり。是れ皆空無相の所に見をおこして、空見とも斷見とも、無の見ともいふなり。又有相に執着する修行者は、地獄も所さたまり、極樂もかくべつに在りて、功德を執着し、佛法を世間の法とべたくに覺えて佛道のしなく有るに數まよひ、佛と衆生と尊卑の跡を忘れかね、實にまよひの煩惱あり

一〇六〇

一〇六一

と思ひ、煩惱の外に菩提をもとめ、悟道といふ事別にある事物と思ひて執着し、迷の心性、則ち本智圓明の實性なりと當跡に徹する事あたはず、有相に執着して、大解脱を得る事なし。是れに因て無相空に眼を附ける人は、理窟にはかり落ちて、今日世間の行、一つとして道理に叶はず。又有相の佛法に執着する人は、後生功德の事はかりを佛法と心得て、或は宗旨の善惡を論し、念佛經陀羅尼の數を執着し、實に土山を築く如くに功德の跡有ると思ふ族は、金銀をほしかる念も、功德をほしかる念も、心に立歸りて知らば、同じ貪欲の心なり。然る故は事と理とひとしく、有と無と二つなく、色と空とかたよらず、跡と用と融通して、其見偏固ならぬ時は、今日物々の上にて、少しなりともかたくなしき事なし理事元二つなし、水氷一つなるが如し。總じて法を信するは、已か心をさめ、今日のはたらきすなほに、心におこる所の貪瞋痴を能くてらして、三毒即戒定慧の三學、法報應の三身、佛なる事を知れば、法の理を聞きて、法の事を一如にして、萬事の上、能くをさまらなり。今時法を信する人利根さに能く聞き覺えて、口に云ふ事辯舌よく、誰なりとも相手にして云ひ聞かせたかり、人に云ひかたん事を専らとして、其身の上は、法聞かぬ人の身持よりあしく、貪欲盛に我かしてさに、人のそむきたる事従はぬことを噴りて、瞋恚甚

しく、我が身の上をかへりみる事なき故に、愚痴のやみ明ならず。かくの如く一切事の上をまらぬをもて、理と事とべたくなり、前いふ如く事理は元一般にして、理を知らば、事相の上をさるる等、事の上正しくば理おのづからくらからぬ筈なり。水を知らば、氷外に有るべからず。氷を知らば、外に水をもとむべからず。色空有無もおなじことわりなり。

師はかくのごとく教へられたり。此外聞きし事も有りしかども忘れたり。元より我が狂愚疎懶にして、右にいふ件々の病氣愈え難し。されども其症を診して、此法をもちひば、少しき補なからんや。若し無病人の前には百般の妙薬、みな塵空に歸すと云ふ。

寶曆十一年辛巳年正月

### 猿法語終

### 快馬鞭

#### 解題

快馬鞭は、大靈叟、霧隱叟らが、勅諭佛護神照禪師東嶺和尚の某居士に與へられたる入道要訣をはじめ法語および道歌二十一首を併せ編して、かくは名つけたものにて、初學のためには、いはゆる快馬の一鞭たらむか。

東嶺和尚の行狀につきては、霧隱叟の物したるこの書の後序に詳なれば、ここに贅せず。けだし禪師は、透翁和尚と共に鶴林門下の二神足を稱せられ、學徳ともに高く、盛に家風を宣揚せられたりき。著はすところには、無盡燈論その他數種あり、この書のごときは、その緒餘のみ。

快馬鞭序

夫諸佛真源。衆生本有也。雖然因背覺自隔。緣合塵逐失矣。於是三光老師。特悲憫爲誘引。頑階之徒。述法語數篇。并道歌廿一首。可謂夜途玉炬也。讀之則從躡及細。自淺至深。親聲此道進趣之軌焉。若能熟讀而深凝心慮者。大事因緣其庶幾乎。爰某禪人。請叙斯篇之起盡。不忍確辭。因應于其需云爾。

寬政庚申二月日。大靈夏書于濃陽壁觀亭。



# 快馬鞭

東嶺禪師

## 入道要訣

夫れ禪宗の凡夫地より、直に佛地に登ると云ふに、五の料簡あり。一には同性の義、二には異途の義、三には情勵の義、四には進修の義、五には歸本の義なり。是れを要路とす。第一同性の義と云ふは、人々具足する本性と、三世諸佛の本性と無二なり、功德莊嚴も均し。光明赫奕たり、智慧神通悉く同じ。譬へば大日輪の光明の山河大地を照さる處なきか如し。賤しき糞土の上も貴き金玉の中も、替ることなく明なり。然るに盲人は其の光りの中に在りながら見ず知らず。悲むべし。第二異途の義と云ふは、本性は諸佛衆生と同體不二なれども、其の意の指す處、おのゝ別なり。佛は南に向て本心を照し玉ふ。衆生は外に向て萬境に亘る。故に愛する物に貪欲を起し。惡む者に瞋恚を起し、思ひ凝て愚痴となる。此の三毒の性に迷ひ味されて本心をも失へり。貪欲深きものは餓鬼となり、瞋恚深きものは修羅となり、愚痴深きものは畜生

となり、三毒齊しきものは、地獄に墮て種々の苦を受く。是れを四惡趣と云ふ。恐るべきの至りたり。貪瞋癡あれども、自ら誠め恣にせざるものは、人間なり。生生此の身を失はず、貪瞋癡漸くしづまりて、誠めざれども恣ならざるものは天上に生る。是れを六欲天と云ふ。三毒の性滅して、定慧の徳あれども、定愛の見ありて、瞋癡の餘習あり、是れ色天十八種の中に生る。定愛己に盡くれども、未だ佛の智見を開かざる、是れを無色界の四天と云ふ。聲聞緣覺の行者、此の天にあり。前の四惡趣に人天を加ふれば、六道となる。聲聞緣覺と菩薩と佛とを加ふれば、即ち十界となる。凡そ六道の中は、設ひ人天の樂を受くるも、皆苦の本なり。如何となれば、貪瞋癡煩惱の深き心を以て、此の世界を成じ、此の身を感じ出せり。然れば此の業煩惱を滅せざれば解脱せず。此の六趣の苦界を解脱せざれば、眞の安樂にあらず。此の苦界を解脱せんとすれば、先づ無常を觀すべし。生あるものは必ず死す。わかきも頼しけ無し、強きも危し、富貴なるも衰ふ。尊特なるも保ち難し。長壽も八十年に過ぎず。然れば此の世無常にして樂むべきことなし。貧しければ無に苦み、富めるものは有に苦み、高きは高に苦み、賤きは賤に苦み、衣食に苦み、妻子に苦み、財寶に苦み、位官に苦む、兎に角に煩惱の性を正して、解脱の道に到らざれば、國王大臣諸

天神仙の位に升ること、電光朝露の如し。只しばしか間なるのみ。縁合すれば、了了としてあれども、縁散すれば空し。父母の縁を假て此の身を得たり、地の縁を以て皮肉筋骨となる、水の縁を以て唾涕膿血となり、火の縁を以て暖和柔順なり、風の縁を以て氣息動轉す。此の四縁忽ち盡れば、身冷に息絶えて、我と云ものはなし。然る時は此の身は實の吾にあらず、只假の宿のみ、如何に此の假の宿に貪著して、永劫の事を顧みざる。此の無常苦空無我の四波羅蜜を觀して菩提の道を求むるを、聲聞四諦の法と云ふ。是れ諸佛入道最初の要門なり。又緣覺の十二因縁と云ふは、それ本心暗きか故に種々の業を作る。是れ無明と行との二つなり。業つもりて習性となる、其の父母に縁して胎内にやどる。是れ識と名色となり。體形備つて六根漸く成るを六處と云ふ。出て生れ未だ好惡を少しも辨へざるを觸と云ふ。三歳の後は、早や味を悦び、美しき色を愛する。是れを受と云ふ。十歳以後、財色を求る心あるを愛と云ふ。十五六歳を過ぎては、頻に貪著するを取と云ふ。廿歳より盛に業を作て罪を恐れざるを有と云ふ。此の業を作り罪を重ねる中に未來の生處は、善惡ともに定まるを生と云ふ。一生此の如きの業のみ作りて、老い衰へて死する。是れを人間十二因縁と云ふ。緣覺は、其の事を觀じて、煩惱を盡くして菩提に入る。皆是れ諸佛入道

の方便なり。無明の暗き心を悟りて、其の實性を見得すれば、無明即ち佛性となり。行即ち道となり、諷即ち智徳となる。然るときは、十二因縁、皆正法に隨順して、遂に解脱の大果に至る。又菩薩の六波羅蜜と云ふは、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧なり。前の聲聞緣覺二門の修行は、只自己一人の益にして利他の法なし。菩薩自利道行の中、又化他の行を兼ねたり。法の爲めに財を惜まず、上は師長に供養し、下貧賤に施與するは、是れ財施なり。己か智徳の分量に隨て、人の爲めに説法教化するは、是れ法施なり。此の二施を以て普く衆生に施す、是れを布施波羅蜜とす。内に道心を護持し、十重四十八輕の戒行を修するを戒波羅蜜とす。觀理を忍受し、毀譽の境界に轉せられず、一念の瞋恨生ぜざる、是れを忍辱波羅蜜とす。自利利他の大行に於て日に増長し、怠慢を誡め勵み進むるを精進波羅蜜とす。坐禪工夫を專一に心掛け、一切の妄想を離るゝを禪定波羅蜜とす。教理を究め佛意を察して、諸の迷情を覺破するを智慧波羅蜜とす。是れを菩薩の六波羅蜜と云ふ。此の聲聞緣覺、菩薩の修行を三藏とも云ひ、又は三乘とも云ふ。諸佛成道の方便にして、萬古不易の法なり。一佛乘の學者、是れを小乘三藏の法なりとて、痛く退くるは、小乘の偏見を碎て、大乘の妙理を開悟せしめんか爲めなり。大乘の妙理を信解すれば、三

1050

1051

乗の行門、皆大乘門の補翼たり。譬へは臣民奴婢は、君主よりは劣れりと雖も、若し是れを捨る時は、君主の威徳を失ふか如し。臣民多きの故君主尊し。小乘満足するか故に大乘の道廣博なり。三世の諸佛、歴代の祖師も、皆是れ三乗の行門より法成就には至るなり。今心ある人は辨へ思ふべし。四惡趣の苦患、何れか恐れざらん。人天の福徳も頼むべきにあらず。兎に角に聲聞の四諦こそ、各か好き修行なり。此の世の中は皆苦なり。無常にして心ばそき栖居なり。何事も終に空に歸す。身すら我か物にあらず。況や妻子珍寶及王位眷屬牛馬等をや。死する時は獨行、誰か我に伴ふ。何物か身に隨ふ道具なる。今や他人は前生の親子夫妻たり、今の親子夫妻は未來の他人なり、今の牛馬魚鳥は前世の眷屬なり、今の眷屬は未來の牛馬魚鳥なり。業に引れ縁に隨ふて、如何なる生を受け、如何なる身とならんも計り難し。然れば今の親子夫妻の至て親しきものも、別れては何國にありて何となりて有らんも知らず。骨肉の親も唯五十年の間なり。譬へは一夜の宿りの友を以て深く愛し、餘の人を指し憎むか如し。一夜明けて宿を立出れば、其の友は西東にちりて、我獨り行く、先の憎むたる人には、又其の夜の友となる。唯頼むべきは菩提なり。求むべきは佛果なり。此の身は十二因縁を以て出來たる業障の皮袋なり。先づ無明の根元を破るべ

し。根元破れて末葉の持つてとはあらじ。財法の三世をも、分に隨て心掛よ。佛の禁戒を守つて犯すと勿れ。物に堪忍して瞋を起すべきらず。朝夕佛神に祈り誓て、勵み進で念念忘るゝ事なかれ。暇あらば坐禪せよ、法を聞きて迷を覺破せよ、是れ菩薩の六波羅蜜の法なり。其の根本性は諸佛と同一體なれども、佛は内に向ひ、衆生は外に走るの二念錯りより、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六趣、聲聞、緣覺、菩薩の三乘、おのゝく九界の衆生を分れたり。是れを異塗の義と云ふ。其の本に歸すれば、又同く諸佛同一體なり豈に願はざるべけんや。

第三憤勵の義と云ふは、諸佛同體の性を得んとならば、先づ無明の根元を明にして悟るべし。如何か明らめん、自の本性を疑ふべし。如何か疑はん、眼に色を見、耳に聲を聞て、身には冷暖を覺え、意には順逆を辨へ知るべし。是れを見聞覺知とて修行の種なり。凡夫は色を見ては色に迷ひ、聲を聞ては聲に迷ひ、冷暖を覺えては冷暖に迷ひ、逆順を知ては逆順に迷ふ。是れを衆生の外に向ふと云ふなり。菩薩の修行は、其の色を見る時は、其の見る底のものを疑ひ、其の聲を聞く時は、其の聞く底のものを疑ひ、其の冷暖を覺ゆる時は、其の覺ゆる底のものを疑ふ、其逆順を知る時は、其の知る底のものを疑ふ。是れを諸佛の内に向ふ

と云ふ。此の如く修行する時は、先づ凡夫衆生の向け處とは別なり。諸佛の向け處に均しく、其智徳を成せざれども、先は菩薩子仲間へ入りたりと知るべし。常に諸佛に大願を掛け、神明に祈り祖師に誓ひ、此の如く一大事を一度は成就して、自利利他の願海に遊ばんとなり。朝に起ては、如何に開敷とも、先づ此の二念を立て、先づ此の見聞の工夫を試み、而して後に其の作業に隨ふ。食を喫する時は、先づ此の二念を先として、此の工夫を試むべし。廁に登る時は、先づ此の二念を立て、此の工夫を試むべし。日暮て寝ぬる時は、暫らく臥具の中に坐して、此の二念を先として、此の工夫を試み、而して後に身を放て臥すべし。是れを諸佛菩薩の正直正路の修行とす。諸佛同體の本性を取失ひて、六趣四生の間に迷ひ來るを憤りて、根本性に向て工夫の心を勵むべし。是れを憤勵の義と云ふ。第四進修の義と云ふは、先の根本の工夫を勵まして念念に進み、事事の上に修し習ふべし。彼の工夫の正念を提て、行時は行時に修し、居る時は居るときに修し、人と言ふ時は言ふ時に修し、言いはずして靜なる時は、いよく正念をはげまし、物を見る時は、見る底を疑ひ、物を聞く時は、聞く底を疑ひ、事繁くして物に奪はれ易き時は、奪はる底の物を疑ふ。此の奪はるゝ底の物は何物かと疑ふ時は、奪はれても、又工夫の正念を離れず。病あ

る時は、其の苦惱を以て工夫の種とすべし。兎に角に工夫は事の多きも、又ますく進むの二端なるべし。只尋常物靜なるのみならば、工夫の精彩と云ふにことあるまじ。工夫の精彩なければ、得力と云ふこともなし。國の亂れを治むるには、大事に及で戰場に向て、已に危きに臨んで恐れず、取かへり引返して戰ふてこそ、勝利は得るものなり。工夫の法戰も是れに同じ。諸の境界に奪はれ、諸の想念に亂さるゝこと、勝負を決するの好時なり。此の心を辨へ、懈怠の心なく進むべし。物靜なる時は、是れ予誠に城内に在て兵法軍術修練するなりと心得て、丹誠を抽んで、修行すべし。物躁しき時は、是れ予戰場に臨んで勝負を決するの時なりと心得て力をつけて工夫すべし。得力の有るもあらざるも、共に諸佛菩薩正直路の中へ旅立したる人人なり。譬へば世の強盛なるものは、一日に十里十四五里を行くに、弱きものは、五里三里を行くか如し。百里の遠き國に至らんに、強きものは八日九日には行き易し、弱きものは廿日に及ぶべし。然れども至りて後は、同じ國に居て同じ人とのもとにあるが如し。力をつけて精進勇猛なると、志怠りて進みかねたるも是れに同じ。根性利根なると鈍根なるも亦同じ。病身にして成りかたきと、堅固にして行ひ安きも同じ。人の利鈍により根機の強弱により、省悟得道の遲速はあるべし。修習すること

〔四德〕淨、樂、我、常なり。

と道を得るとに至ては、殊なることなし。頼もしからずや。願はくは賢きも愚なるも、貴きも賤きも、此の正直修行の旅立をせよかし。此の進修の中に又一義あり。工夫純熟すれば思はず量らず得力を得べし。得力はあれども、得行は怠るべからず。精彩を着くれば、自ら得力はあるものなれば、得力に大小ありて、小悟却て大悟の妨となる。小悟を捨て取らざれば、大悟必ず得。小悟を取て捨てざれば、大悟必ず捨る。譬へば人の小利を食れば、大利を得ざるか如し。小利に貪着せざれば、大利かならず成る。小利積り積れば、終に大利に至る。小利を取りて進まざれば、一生只小悟の分際にして、自在大解脱境界に至ること能はず。大悟に至て自在の道を得ざれば、事と理と相應せざるか故に、外道邪見の中に入る。恐るべし。小悟を得ては、是れを種として愈進み、進んで修行すれば、諸佛の大利悉く現前し、祖師の關鎖自然に透過し、誠に事理相應し、行解不二にして、大解脱自在の境界に至るなり。是れを進修の要訣と云ふ。一切の法理を盡し、一切の道德を感じて、普く一切衆生を利益し、其の機宜に應じて、説法教化すれども足らざる處なく、我ど人と共に大涅槃四徳の岸に到る。此の大行大願を以て、生生世世自利利他を已か所作として、盡未來際退轉なかるべし。其の中間に誤りて退くことあれども、また打返し引戻し

修行すべし。人の路を行くに脚上わく路滑かにして倒る。其の人倒れたりて起きざれば、遂に其の處に轉び死す。倒れては又起きあかり、又倒れては起きあかり、進み進めば、竟に到るなり。經に曰く、一戒を犯すれば、直に佛前に懺悔して、又道に進むとは、此の事なり。第五歸本の義と云ふは、前の如く工夫ますく進み、修行純熟すれば、終に諸佛同一體の性に歸するなり。是れを成佛と云ふ。禪宗の見性成佛と云ふは此の處なり。最初の一念錯て内の本心に向ふべきを、外の萬境に亘て、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道に浮き沈み生を隔て世を累ねて、千生萬劫、輪廻して車の輪の如し。同じ苦患を受け來ること數へかたし。生生の骨を積まば、昆浮羅山よりも高く、其の膿血を漉えおかは、大海の水よりも多からんと如來の説き玉へり。今得難き人間の身を受け、殊更逢ひ難き佛法に逢ひ、中に大乘不思議の正法を聞くこと、上もなき人の僥倖なり。是を取り誤て捨て置かば、猶ほ又上もなき罪なるべし。一度人身を失へば、二度得難きこと、摩訶の天の上より絹絲を下るして、大海の底なる針の耳を貫くか如しと。又六道の輪廻は生を隔たることのみならず、一日の中に浮きつ沈みつすることなり。心正しく事邪ならざるは人間なり、我に違ひて瞋恚を生ずる時は修羅なり、我が好む物に執着すれば餓鬼なり、物思ふて心お

〔兜率〕梵語、此に妙足と云ふ、五欲に於て止足を知るの義、欲界六天の一なり。

とがる時は畜生なり、思も深く悟執も強く、瞋恚の焰やますして、人を苦め物を害する時は地獄なり、是れを人の道を失ふて三塗の種を作ると云ふ。又時ありて心静り、物思ふ事なく、胸すみわたりたる時は、身は人間にあれとも、心は天に遊ぶと云ふ。然れば凡夫の一日は、六道を輪廻すること數を知らず。其の中人の心を持つこと稀なり。況や天に遊ぶことをや。先づは畜生の物思ひ、餓鬼の悟執、修羅の瞋恚、三塗に遊ぶこと多し。動もすれば地獄道に入て、人を苦め物を害すること多し。誠に一日の中、何の道に遊ぶこと多からんと見よ。先づは惡道の心、三分に二なり。人間は漸く一分を守る。地獄又其の中に交る。左れば只尋常の心持にて、此の惡道は免れ難し。此の一日の中に修行の心を發し、聲聞の四諦の修行、緣覺の十二因縁の觀法、菩薩の六波羅蜜の大道、此の心を起して、彼の三塗の種を斷すべし。大乘の工夫を勵み進んで勤むるものは、縱令得悟は未だ得ざるとも、三塗の心絶え、人天の遊を越えて菩薩の階級に升る。聲聞緣覺さへ尊ふべし、況や菩薩の道をや菩薩の道すら尙ほ有難し、況や一佛乘の法をや。見性悟道は、諸佛頂上の禪なり。是れを心にかくるものは、佛の道の事なり。念念の上、無上の功德門を成就し、舉足下足、皆般若の妙行に及ぶ。夫れ般若は、讀誦の功德すら尙ほ貴し。況や是れを行ふ者をや。人を

頼んで讀誦せしむるもすら尙ほ災厄を免る。況や自ら行ふものをや。諸佛歡喜し、菩薩手を引き、天神地祇は此の人を擁護し、惡鬼邪神は、影を見ても恐れ慄く。精靈幽魂は、此の人の縁にふれて解脱の種を得んことを思ふ。是れを最尊最上最第一の法と云ふ。分に隨て遵行すべき也已矣。

有信士某用者先。携白紙一卷來謁。書于予教誠。予諾而收之。笥之。久矣。歲月相逼無暇。思索。因操觚任意漫書之。曰。入道要訣。願長昏看過。以爲進道之一鞭也。

寶曆丁丑孟陬日。

東嶺頭陀圓慈書

奉大聖寺宮

御宮様不圖遠く行脚に思召立せられ、御淋しきのあまり、一入暑邪にもさへられさせ玉ふのよし。親き友に別れては、皆力落し候事常の義なり。況や骨肉の御親みをや。左こそあらせられ玉ひぬれ。是れ人倫の道なれば、上も下も同じ習のくせならぬ。然かあれども、只あながちに愁へさせ玉ふばかりにては、凡夫衆生に同うして、道人の御心にてはおぼさじ。道人の御志と申すは、再び御對顔の思召こそいみじく候へ。左あればとて、凡夫の人を尋ぬる様に御尋ねさせ候のみにては、萬劫までも再會は叶はせ玉はず。若し再會の時あるとも

1027

1028

〔法性觀〕一切萬法は本性平等にして變易なるたゞなしと觀するを法性觀と云ふ。

業縁にひかれて、やゝもすれば三塗に出逢ふもの多し。誠に御對顔の思召には、法性觀に如くはなし。經に曰く、三界唯心、萬法唯識と。三界とは欲、色、無色の三界にて、貪瞋癡の三毒の境也。即今面前、目に見、耳に聞く處、是れ直に三界なり。此の目に見る上、直に我か本心なりと觀じ。此の耳に聞き候上、直に我か本心なりと觀す。左あれば松は松の姿にして本心なり、竹は竹の形にして本心なり、天井は天井なりにて本心、疊は疊の儘にて本心、衣裳は衣裳にして本心、飲食は飲食の儘にして本心、山は山、河は河、男は男、女は女、人間は人間、畜生は畜生、其上其の儘皆本心佛なりと心を靜めてひたすらに觀する、是れを萬法唯識觀と申すなり。此の法性觀を常に御心掛有らせ候へば、いこし心境界不二の位に入り玉ふて、諸佛聖者の道場に登らせ玉へば、宮様何國ともなく、此の道場の中に御座有らせ玉ひて、いつよりも魔滅やかなる御顔にて、法喜禪悅の樂身にあまり、解脱超昇の徳、心にあらはれん。華嚴經に曰く、三界唯一心。心外無別法。心佛及衆生。是三無差別の大事、了了分明に開悟ならせ玉ふなりと。大地は打ちはずすとも、全く相違なきものなり。此の心空無相の正觀なれば、大般若の深行となり。諸法實相の妙觀なれば、法華經の一大事因縁也。禪宗絶念了當の工夫、甚た以て近道なれども、かくつかれ玉ふ折節

にはけはしき山坂は及ばせ玉はず、只此の法性觀を晨夕の慰みとし玉ひ、看經にも坐禪にも御心持惡きに付けども、是れのみ觀じさせ玉は、誠逆縁變じて増上縁となりて、死者生者共に手を把りて、毗盧頂額をも踏み玉ふと云ふべきか。折節病中、再三心を碎き書き續けても、成難き筆に任せて書き亂し捧げ奉て、憚り多きことに候共、一には簾下の御心を休め奉るの端ともならんや。遂には成菩提院様、涅槃路上を莊嚴し奉らんとす志なるのみ。あなかりに文章の拙き字法の正しからざるをとかめ玉ふ事勿れ。

答輕兼神佛一人

御細書の趣き、披見を遂げ候處、多年文字の學路に遊びて、近代世に行にる、儒士の教を聞てし召し玉ふものにて、中々參禪學道の器とは相見え申さず候へども、御不審を答へ申さぬも、本意なく存じ候ゆゑあらしく、書き記し進覽せしめ候。來書に儒道にて事足りぬれば、神佛の兩道は、畢竟無益の義との御覺悟なるよし。左も候ば、隨分儒の道を相研かれ、仁義を踏みあやまらぬ様に、五倫の間に行ひ得ぬ人々をも教化なされ、君を堯舜の君たらしめ、民を堯舜の民たらしめば、此の上何の加ふる佛法かあらん。尙ほ専らに御興行あれかしと祈り奉り候。古へ孔聖の世を去ること久しからざるに、皆人浮華に走りて、

口に仁義を云へども、誠は利養を貪り、形に禮容を飾れども、心には忠孝を忘れし故に、莊子と云ふ者出で、其の虚を誇りて世を定めんとせり。是れ又聖門の外護とこそ覺え侍る。況や世下り人つたなくして、誰か仁義の道を唱へ、誰か忠孝を專とする、上一人より下萬民に至るまで、仁義忠孝の貴きことを知らざるものは無し。まして公侯伯子男の尊貴の位にある人は、文武の賢客を左右に列らへ置て、朝には孔孟の席に交り、夕には孫吳か室を伺へば、仁義忠孝は、世を治むるの大本、智仁勇嚴は、人を得るの根柱なることは、耳に飽き胸に滿て知らしめざるはあるまじ。然るに其の貴と知る道を用ふることは成り玉はで、動もすれば身の奢に引れて、上を掠め下を虐げ、先祖先君の血をしぼり臍を碎て大業を樹てられし功恩を忘れ果て、群臣萬民の膏を流し身を苦しめて財穀を捧ぐる艱難は露顧みず。已か一旦の口を喜ばしめ身を樂しまんとて、衣食の美、男女の色に心を味ませる者幾千人ぞ。此の時に當て、文武の諸官魏々として、前後左右に環列せる者、知れども説くこと能はず、思へども教ゆること能はざるは何ぞ、是れ他なし、心學道行の足らざるか故に、妄想の爲めに智慧を掩はれ、利養の爲めに忠孝を隔てられて、君の道を失て、中庸を以て世を治むる能はず。臣の道を失つて直諫を以て政を正すこと能はざるか致す處な



り。此の時若し心法を明らめ得て、妄想の本を断ち禪關を透り得て、利養の塵を碎くもの  
 あらば、君君たり臣臣たり、父父たり子子たり、おの／＼其の宜しきを得て、聖門の忠孝  
 再び明にして、王者の大業、重ねて興らば、是れ誠に君を堯舜の君たらしめ、民を堯舜の  
 民たらしむるにあらずや。心法は天下國家の益にあらず、禪關は士農工商の補にあらずと  
 云つて可ならんや。且つ心性の説は、孟子にはじまり程朱潤色したる者と一向に創り去て、  
 唐宋元明に眞實の儒は絶えて、二千餘歳の後、日本に一兩箇の眞儒ありと云ふこと、心得  
 難き大言なり。譬へば邊國に獨の英雄ありて、近國を切り服て、城郭を構へて令を降し、  
 法度を立て、大言を吐て、帝王一人の外、霸主を始めとして、列國の諸侯は、共に皆政法  
 を失ひ俸を治め得ず。只人の財寶を掠めて身を立て、名を沽るものなり。今我獨こそ道  
 を暗し徳を富にして、眞の王佐の臣なりと云ふか如し。夫れ孔子を天子に比せば、孟子は  
 即ち霸王なり。漢魏より唐宋の諸賢は、列國の諸侯の如し。山川道隔りて敵對なければこ  
 そ、何事もなく罵詈する。若し直に逢て一戰に及ばば、邊將の小城、争てか列侯の雄威に  
 當り得ん、今の世の人も左の如し。年代異にして其の人なきか故に、己見を恣にすれども、  
 道と云ひ學と云ふこと、なか／＼末代の者に及ぶべき事にあらず。此の旨能く思惟あるべ

きことなり。偕て聖人の道は、只人倫の間にありつべき行を成し玉ひぬれば、心性の理に  
 關らずと云ふこと、彼の新儒の論より出でて、是れ又耳を掩ふて鈴を偷むの教なり。凡そ  
 人茶を呑み飯を喰ふ事、共に心に思ふて後にこそ成るべけれ。況や君に忠を盡し、親に孝  
 を爲すことも、心に能く辨へ知りて後、其の道も行ふものなり。然らば心を離れて立る道  
 と云ふは、一として有るべからず。定めて宋儒の説の佛法心性の説に似たるを憎んで、一  
 向に退けて聖人の道は心性の義にあらず、只五倫の間の道のみと言へるならん。譬へば人  
 の弓箭を教ふるに、心持に用は無いらず、只業を學べと云ふか如し。心こゝにあらずれば、  
 視れども見えす、聞けども聞えず、食へども其の味を知らざれば、焉んぞ心を離れて、其  
 の業を能くすることあらん。彼且つ言はん、心は業に用ゆるのみ、其の性を明むるに足ら  
 ずと。是れ又樹の枝葉花果を愛して其の根莖を輕し、家の奴婢僕従を尊びて、其の主君を  
 知らざるが如し。其の花を愛して其の根を知らず、其の僕を尊で其の君を知らずんば、智  
 とせんか不智とせんか、且つ性は心の密なる者なり、根の深く藏れて見えざれども、必ず  
 しもあるが如し。其の根を知て移して芸らざれば、樹を成して、花果を收むること能はず。  
 君の嚴に坐させども窺ひ難しとて、極て無しと云はんや。其の君を知て従ひ事へざれば、

家を治め子孫を保ずること能はず。天凡上代の人は、其の根機利にして、而も心定れるか故に、聖人の道を行ふ者、自然に其の性に復りて達するか故に、仁義忠孝の道皆性より發して、能く節にあたることを得る也。孔子も己に克て禮に復るは仁を爲る也。一日も己に克て禮に復れば、天下仁に歸す。仁をするは己による、人によらんやと云へり。是れ誠に克は性の止に求めて、人倫の間に求むるにあらずる證なり。若し人倫の間を云はんをせば、一日禮に復て、天下の人何としてか皆仁に皈せしめん。顔回、三日陋巷に仁を張るとは、間居晏坐して、性に復りて仁を求むることを言へり。又剛毅木訥は仁に近しと言へるは、此の性に復りて仁を求むるには、一旦勵み進て、剛毅木訥の工夫に入らざれば成辨し難き故なり。若し人倫の間に行ふのみならば、柔順利辨のものこそ、仁にも近かるべきに、卻て剛毅木訥を進しと云ふは如何。是れ許多參詳すべき聖言ならずや。本より神道儒道ともに性理を離れては、其の道を得ることを能はず。末代は其の道を學べども、性理まで到るるのなき故に、かのノノ其の書のみ傳はりて、旨を得る者稀なり。殊に吾が朝は神國也。夫れ神道と云ふは、悉くも日本の王道にして、人人の主君の正道なり。然るを此の國に生れなから神理をも究めずして、巫祝左道なるをて輕して蔑り玉ふは、誠に本を忘る、事なり

一〇六

一〇七

とや云はん、君を凌ぐとやせん。凡そ神道には三の教有りて、宗源、齊元、靈宗と云ふ。中にも齊元の神道は、専ら政家の道にて、五倫の道を明にせり。是れ禁庭に第一に行はるゝ法式にて、大相國家の君臣の義を守り、忠を盡くすも、皆齊元の神道也。又神道に王道師道の二義あり。昔者開天の始め、天祖と云へる大神、師道六世の神、高皇產靈尊に詔して、天竺國を開かしめ玉ふ。同じく七世の神、神皇產靈尊に詔して、震旦國を開かしめ玉ふ。此の義を以て、天竺、震旦は、師道の國なるか故に、下代教化の道は、皆西より來て東に傳ふれども、王道は吾が國の正道なるか故に、皇孫一統して他姓を交へず。君臣の義嚴正にして、神武天皇より以來、臣たる者君の位を奪ふこと一日も無し。間反逆の者あれども、皆天刑神の罰を受ること目前に分明なり。夫の秦は六國を亡して始めて皇帝と稱し、魏は漢帝を亡じ、晋は魏を奪ひ、及び元の宋を亡すに至て、中華悉く俗を變じて夷狄の風に歸する等のことは、竟に聞及ばざるなり。日域小國なりと雖も、異國の大軍も是れを取ること能はず。是れ我が神明の道の異域に超越して、威徳巍々たり。靈魂了了たるゆゑならずや。政家以て今をはじめ、神職以て古を祭る。己に行ひ、民に教ゆるを、是れ我が神明の眞儒と云ふ。古へは政家神職兼傳へて、直に行はれたれども、其の後分れて二となり、

快馬鞭

即今の攝家と卜家と是れなり。近來儒佛附會の教は、家家に皆神道の秘受を失ひしより、後人の混亂するを習傳へて正義なりと誤るのみ。然れども朝廷并に神學に委しき者は、其の的傳を受け得て、皇天神武の正道今に炳然たり。然るを此の國に生れながら異國の聖人を貴て、吾が祖神を蔑り輕するは、其の家の主君を蔑りて卻て他の主君を敬ふか如し。不忠とやせん、不義とやせん、況や先君皆かのく其の道を尊崇し玉ふて、神社佛閣六十餘州に充滿せり。然るに僅の才學に誇て、巫祝左道の類なりとまで可ならんや。天照大神の託を西天の真人に譲り玉ふを始めとして、豐受大神は、法燈國師に衣を乞ひ、宇治大神は、大空禪師に戒を受け、出雲の大神は、雲樹三光の室に入り、北野天神は、徑山きんざんの堂に昇る是等は神明の佛法を崇め玉ふ驗なり。吾が上宮太子は、神儒佛三道の中興にして、常に曰ふは、神は人の始を教ゆ、儒は人の中を教へ、佛は人の終を教ゆることぞかし。樹の根莖有りて枝葉有り、葉枝ありて花果あり、又根莖を生ずるが如し。神は根莖なり、儒は枝葉なり、佛は花果なり、三道互に扶けて、一箇道德の大樹を成すと云へり。藤家先祖の鎌足公、幼稚にして太子に仕へ、神の旨を傳へ受けて、上の始末終の道を以て、君を泰山の安に置き玉ふ。此の後代代の聖君賢臣、皆禪に參じ法を明らかにめて、其の徳を天下國家に及す

者、勝けて數ふべからず。中にも平の時頼は、聖一大覺の旨を悟て、仁政を千歳に稱し、楠正成は、三光關山の禪に徹して、忠功を萬世に顯はす、甲斐の信玄は、快川等の諸師に參じて、兵法の一家を立て、越後の謙信は、鐵堂等の諸者に講して、武威を四塞に震ふ。今川の雪齋長老と云ふは、即ち清見の太原和尚にて侍べる。義元是れを師として禪關を究め、武道に達して皇祚を守り黎民を養ふ。是れを國家に益なしと云ふべけんや。然るに今其の王業の癡れ、聖徳の塞れるを惜み哀む心無きは、身を忘れ心を欺くに似侍らん乎。中にも若し仁義の道を慕ひ、忠孝の教を志す君子の輩あらば、三度此の文を復せよ。若し能く自性を明らかに得、自知を研き出玉ふは、彼の克己復禮の大仁了了として手に入て、堯舜を羨濶に見、文武を且暮に伴ふことを得て、誠に聖君賢臣と云はれんも、耻なからまく已矣。

右御不審の荒増書記し、佛法神道の蔑るべからざることと、參禪學道の天下國家に益なきに非ることを書著はす。此の上の御不審あらば、直面にて御尋有之べく候。紙筆に著はしそふことは、其の文法に泥み、故事來歴を争て、遞に筆陣の様に相成て、眞實の旨を失ふ者に候。仍て向後は書を以て御答へ申さず候。穴賢。

大凡修行は、時を知るを第一とす。若し時を知らざれば、無益の功德を費し、卻て已か道力を損す。譬へ春は耕し、夏は耘り、秋は收め、冬は藏すか如し。公己に春の時を経て耕す功成りて見性の苗うるはしく植て、耘るの功のみ。其餘の事は、秋冬の時に還して然るべし。一切の田地とは、順境、逆境、動靜、憂喜の間に於て、邪箇一片得力底の大禪定を移し用ひて熟せしむべし。耘ると云ふは、善念、惡念、迷心、悟心、出るに任せて照破して、物に勝るゝの大機を研磨すると、一振の名劍の如くなる是れなり。此の外古則公案等は、先づ暫く延引すべき事要なり。古人も得力の時は、歡喜甚しければ却て道根を損すとして、三日三夜寐させしもあり。兀菴の二字を書て、三年是れを守るべしと教へし名師もあり。洞上の古徳は、見性の後三年、偏正三昧を修せしむ。偏正三昧とは、我示す處の夏の修行なり。總じて古徳は、おのゝく落着て、徐徐と根本より修行す。然るに此の節古則なを僉議する時は、歡喜心にて胸中少しく動轉しある上に、又彼れ是れもかき、道根自然に損じて、譬へ幼少の稚子に品品の藝を教ゆるとて、なぶりちらして責め殺すか如し。是れ行者第一用心の至要なり。若し此の嚴制に違せば、決して野僧か同參にあらず。

夫れ參禪は、行住坐臥の上に在りて、動靜によらず。只見聞の間に心を認め、我か佛性は如何なる者ぞ、空とやせん、有とやせん、又かく見るものは何物ぞ、かく聞くものは何物ぞ、尙ほ斯くも疑ふものは、是れ誰ぞ、尋常捨置かず。長久遠大の志を以て疑ふべし。必ず自分の智慧才覺を出して、此の道理ならん、彼の道理ならんと、少しも了簡を加ふると勿れ。只工夫純熟すれば、佛性自ら現前す。又人の説き聞せる道理を以て、我見解の扶にすると勿れ。設使如何程の玄妙の理なりとも、皆是れ古人の糟粕にして、汝か眞の道に非ず。是れを以て祖師の語にも、蠱毒の郷を過る時に、水一滴を活すと得ざるか如くにせよと云へり。譬へば飲食の風味を説きしめすか如く、みづから嘗て見ざれば、正味を知ると能はず、辛きに多種あり、甘きにも多種あり、況や但只此の道理を辨へて、人の言説を假らず、自身の佛性を疑ふべし、是れ我宗の正行なり。然れども學者の根機足らざれば、信心專精ならず。工夫純一ならば、日を隔る瘡の、一度は熱し、二度は寒毛豎つか如く、年月を累ぬる計りにて、眞正の田地に到らず。是の故に常に佛祖に誓ひ求めて、自利利他の大願心を祈るべし。又身命財を擲て深く法を求めると、諸衆生平等供養の大布施とす。諸念起れば直に

工夫を以て制するを持戒とす。能く萬境に堪へて心を動せざるを、忍辱とす。片時も忘れず、全體相續するを精進とす。工夫常に現前して、他念なきを禪定とす。迷心起れば、心の亂れを治め、佛教祖錄に就て、志の誤を正すを方便とす。一切衆生の苦患を觀察し、三世諸聖慈行を慕ひ學ぶを願波羅蜜とす。工夫増進すれば、業障日に滅して、身心自在なるを力波羅蜜とす。是れ初心の學者、平生用心の趣きなり、其の中間、何様の障礙あるとも棄置くと勿れ。若し退心するとも、又打返て往過を咎めず、己後を慎み、工夫の忘れ易きを患へず、只思出し、引返すと遲きを患て、那時か是れ打失の處、那時か是れ不打失の處と、強ひて心掛あらば、必定して道を得んと、槌を持って大地を打つか如し。何ぞ疑ふとを用ひん。若し又佛性眞箇に現前せば、古人の公案を以て試むべし。差別の關鎖向上の一路など云ふと、皆是れ見性以後に重重に磨して、淺深魚細を辨別し、佛祖の骨髓を徹證せしむるの大事なり。明師に見えて決擇すべし。錯て會すると勿れ。

示二世繼了智禪尼

厥の後は、打絶て消息をも承はらず、修行の志增長致しそるや。平生の工夫御心掛なされそるや。卑濕汚泥に蓮の花開きそるや。有り難き結構なる自性の蓮花を煩惱の汚泥に染し

そるば、勿體なき事なりと、日夜に恭敬禮拜成され、持佛堂の本尊より大切に供養なさるべく候。其の供養には、別の子細はなし。彼の見聞の工夫は第一の飯と御心得、坐禪は汁の如し、懺悔發願は菜の如し。偕て堪忍の椀に盛り正直膳に排し、信心の箸を以て、自己本有の如來を供養すべし。茶湯には柔順の心を善とす。上たる人には敬ひ、同じ下なる者はあはれみをかけて、惡き聲を憎まず、悲らす、言葉和田の道理を云ひまかせ、彼れも是れも皆自分の稚子を思ふと同様に心掛るを、柔和善順の人と申す也。如期の供物を以て日夜に自身佛を祭るを、諸の供養の中には、法供養第一なりと佛も讚嘆成され候。是れを常常御心掛なされ、其の供養の躰梅好く出来るを平生の樂として、此の外に樂むべき者は世の中に一向是れ無しと、觀念なさるべく候。折節法語遣し申す様に吳吳御頼そる、志の貴きまゝ思ひ出し、筆に任せて書き述遣はし候。穴賢。

發心修行之文

夫れ圓滿の覺體は、一切衆生の身の上に本より具足して、凡そ衆生たるものに、佛ならざるはなし。譬へは大日輪の普く照せども、目なき人は見ると能はざるが如く、人の大智惠光明は常に前後左右に輝き亘りて、諸佛菩薩に少しも異なるも無けれども、悟の眼なき故に、唯

た目前の境界に心散亂れて、早晚其の有様を見失ひしより以來、貧賤癡の間に惑ひぬれば終に心も心につれて、諸品の身となる、六道の間に互に親となり子となり、夫婦兄弟となり、縁に任せ業に曳れて、一度は逢ひ、二度は別れて、幾千萬生と云ふとも無く、浮ぬ沈ぬしける程に、凡そ生める者は、魚鳥畜蟲の類までも、皆前生の父母兄弟ならざる者はなし。彼の皆己か佛心を見失ひしより、是れ迷ひ苦しむ、我も同じく我か佛身を見失ひしより斯く造も取誤て、唯た目前の境界にのみ奪れて、いつ果しもなく、同じ三途の業を造りけるるかじ。想ふに彼の多くの者どもは、前生の業深ければ、未だ餓鬼畜生の間に吟ふ中に何の幸や我等のみ貴くも人の身を受け、剩へ佛の法の上も無きことまでも聞き侍りたれば何卒我が本具の佛性を見出し、諸佛菩薩に劣らぬ智徳をも取返し、竟には自在の力用までも、殘ることも無く研き出して、又彼の前世の父母兄弟にてありし六道の者共悉く救ひ取り、一度は迷はぬ先きの菩薩場へ引造して、本の通り佛身と成り得させたき事なりと思ひ願はくは諸佛菩薩も深く哀愍をたれ玉ひ、諸天善神おのゝ威神力を加へ、業障も消滅して、疾く本具の佛性を現前せしめ玉へと祈るべし。唯返すくも我か佛性は如何なるものぞ、見る者は何物ぞ、聞くものは何物ぞ、佛性ならば、なにか我計り見出し得ぬ

との有るべき、如何に愚なる者なればとて、佛性に相違はなきものを、見出し得れば、本意なき事にあらずや。何卒して我小知小見に止まらず、幾重の關をば踏破りて、眞箇の佛性を明め、佛祖の境界に入得て、猶又其上の差別の智恵、向上の宗旨までも、分相應の丹誠を盡して、生れ變り死に化りてなりとも、十分に手に入れずば置かずまじきや。其の差別向上の法理とても皆我佛性の中の本有を僉議して、至て擇び上げたる處なれば、先づ根本の佛性を見出し用ひ得たる上の事也。左之右之、我佛性は如何なる物なるや、水に在りて水を知らず、火に入りながら火を覺えざる如くなりと聞き及びぬれば、さぞ我か今の目前に佛性の道理あるべしと深く疑ふべし。然れども若し目の前の境界をのみ疑は、妄想の心自然に起り易し、唯た其の目前の境界を見る底の者は何物ぞ、聞く底の者は何物ぞ、又斯く疑ふ者は何物ぞと、起ても居ても寐ても寤ても、工夫を相續するを第一とす。此の如きの法の道理を辨へ知りて、發願修行の心眞實ならば、大地は打はずとも、見性成佛は疑ひ有べからず。

#### 病中三の用心の事

一には死を極む。生死無常は、人間の定法なり。況や道人、生死事大を以て、平生の受用

とす。是の故に病中に先づ死を極めて事に迷はず。身を看病の人に任せて、安心にして住すべし。

二には息に依て身心疲れて、行業及ぶべからず。只息風の身の内に觸るゝを覺ふ、是れを諸法實相の境として、正念相續を試むべし。

三には願を勵ます。病若し治せば、益す心を改め、行を勵ますと誓ふ。命若し盡きなば日頃の大願の如く、大丈夫の身を受けて、二聞千悟の人と爲り、普く一切衆生を利せんと勇み誓ふなり。

右病中の用心とは雖も、無病の人も油斷有る可らず。

發願文の事

南無佛、南無法、南無僧、南無自身具足圓滿の如來。今我三の大願を起す、願はくは大悲哀愍して此の心を扶け玉へ。

一の願には、我身本より佛の性を得て、智慧神通相好光明皆具足して、佛菩薩と同體の徳有れども、貪瞋痴の業に味まされて、淺狹の身となる。我願はくは佛法僧の三寶に歸依して、一度は我に具りたる佛の性を見届すんば置く可からず。

二の願には、左あるから悉く人人も同じ親子兄弟、一門他人並に餓鬼畜生地獄の罪人に至る迄、皆眞の佛の性を失ひ、假の此の身に迷ふてころ、種々の苦患を受るなり。我願はくは早く我が性徳の一切智を得て、普く是等の本の佛の道に歸せしめすんば有るべからず。

三の願には、我今より後、生生世世、此の二の願に依て、分に隨て修行し、よしや身は惜るとも志は退かず、菩提心次第に增長して、誓て邪見の路に入らず。我も人も諸共に菩薩行願の海に遊んで、遂に諸佛の上も無き道を成就せんとを。

願以此功德。普及於一功。我等與衆生。皆共成佛道。

十方三世一切佛。諸尊諸菩薩摩訶薩。摩訶般若波羅蜜。

道詩二十一首

庚午の夏江戸牛島の庵に在て道歌二十一首を詠してもつて信男信女にあたへたまふもどよりもほとけとおなしわれなからなにとてかくはまよひぬらむ  
たちにも見るやきくやと氣をつけてうせにしもとのわれふこひしき  
目に見るとみくにきくをさるへにたひたすらにたつねらるへい

たつぬれはかれこれ法のあらはれて得るそ知るそとまをふかなし  
 おみそめてなほやまふかくいぬれはゆきまかふへきみちのおほさよ  
 とにかくに信を願をそいにしへの人にならひてゆるかせにすな  
 あさゆふにほとけにのり祖にちかひさくれやみちのあらむかきりを  
 おかくおもひたけくうたかおてゝろあらはほとけの性もめのまへに見舞  
 あらはれて鏡にものうつれともなかくいろはわからさうけり  
 これよりはひたすらみかけならひてしてゝろのあかのあらんかきりは  
 みかきゆくかゝみのあかのありなしは差別のかけをうつしてそみる  
 見る性はいちひやうとうの鏡なれと言句のかけはせんじやまんへつ  
 うつりてもてまかたしなのわからずはまたひやうとうのくもありとじれ  
 くもりなくあまりにかけのうつりぬれはかゝみすなはちものとなりけれ  
 かくまてたふさりのそとをつくしてもやしなふみちにいまをはつたひ  
 まるめてはまたうちくたきくたきてはまたはまるめてとし月をへよ  
 きのおよりけおはくさうのまざるかてゝろみたもつじんのじやうねん

すておかすたゝあしもとにきをつけてありやゝととふ主人公  
 しかくをほとけや祖師のいたゝきをふみしめてゆく峰のほそみち  
 いたり得ていへにかへうてわれひとりねたりおきたりしる人もなし  
 かへり見て来しみちすぢのありさまをかたりてならお里の人く

# 快馬鞭



快馬鞭後序

師諱圓慈。字東嶺。江州神崎縣人。族源氏。宇多天皇九世之孫佐々貴裔也。五歲而謁古月和尚有出家之志。九歲而父投于本州大德亮山和尚。薙髮受具。十七歲而南方發足。初謁古月翠巖之二大老。晨參暮請無敢倦矣。於雲門胡餅話得入處。次入丹之大道和尚室。侍巾瓶也凡三年矣。以爲雖見數員善知識。一箇而無如古人雪峯巖頭之用處者。不如此去向山中苦修。遂拂衣還鄉。於蓮華峰締庵日夜打坐。至寢食偕廢。居之久一事無所得。寬保元辛酉年某月一日。坐久疲倦。自謂道高則魔盛也。今我是何障礙耶。我於此生誓不求道。言訖放身仆矣。頭未到地。豁然大悟。即作偈曰。法王身矣法王身。大地山河絕一塵。佛教祖禪元在我。頭々無不少林春。翌年春之。駿陽謁于鵠林。林一見如舊相識。徃復問答。在無盡燈論第六向上章。今略焉。尋求印可。林即授衣并法語曰。圓慈首座。潛參密究。超越流輩。辛鍊苦修。不顧軀命。久而徹見正受老人平生受用。可謂動矣。是故我正法眼藏前兩三件口訣全授與了也。誓扶起已墜真風。永相續焉云々。師初住無量。初開龍澤。請鵠林老師爲開祖自謙爲二世。大振鵠林門風。衲子塵至。無處容多衆。第宇柴扇頗有綿蕤風。可謂東道主人

也。一住二十餘年。無日不接衆。寬政辛亥春。應尾瑞泉。興輝東荒廢。規矩森々嚴々矣。時有大風吹折林木。比屋顛仆者十之一。鄉人僉言。輝東大木吹倒。古碣放光射天。衆聞焉駭。從是師有西歸之嘆。臨行作偈示徒曰。人生七十古來稀。出輝東庵何國之。老僧今年七十一。出輝東庵何國之。遂促駕赴江州。鄉人瓜瓞綿々。留師令居齡仙精舍。日講自註三法孝經。四衆臨筵。末後一日陞座。既欲下座。侍者請與衆說法。師怒罵一聲而下座。時寬政壬子春閏二月十九日。示徵恙溘然坐寂。塵壽七十二。慧臘六十三。弟子奉全身在瑞泉之西河側。閣維得設利羅無數矣。塔于輝東坤維曰兒孫放光。在于龍澤曰三光。嗣其法者。豐州英。聯燈多。關堂樞。是也。其餘得法者。隨分揚化者。在于四方。人僉知之。吾豈敢所識乎哉。今茲春遊方日。得師遺稿曰入道要訣者讀之。似恰面聽示誨者。故尋求散在四方者。編曰快馬鞭。乃鏤于諸版。匪欲公于世。唯與信男信女欲爲快馬一鞭者也已矣。

于時寬政庚申臘月丁卯。參學霧隱謹撰。

# ますほのすゝき

## 解題

ますほのすゝきは、洞上の尊宿爲霖禪師が、文化十三年の初冬、備後福山の草庵にありて歸依の徒に示されたるものあり。爲霖禪師は越前角鹿の永建寺に住し、盛に化を北越に揚げ、その篋下より多くの龍象を打出したりきといふ。師資、機縁および示寂の年月等は、編者いまた之を詳かにせず。

ますほのすゝき

爲霖禪師

長明の無明鈔に云はく、「ますほのすゝき」と云ふことあり、或人はなしに、「ますほのすゝき」と申すことには傳授あり、渡邊の僧正こそ能く知れりと云ふ。その座に一人の法師あり、これを聞き、雨ふりし日なれば、篋笠をかし玉へと云ふ、何をするやと問へば、其の「ますほのすゝき」のことを問ひに行くべしと云ふ。座中の人申すには、餘りさはがし、雨晴れて行かるべしと云ふに、曰く、おろかなることを云ふ人かな、人の命は、雨の晴るゝを待つべきや、若し雨の晴るゝを待つ中に、我れ死するか、僧正死せば、此のこと空しくなるべしとて行かれけりと。此の人誠にありかたき人なり。道を學ばん人、この心を能く得ば、何の道にても得ずと云ふことなからん。我が道を學ぶ人を以て之を試るに、今時の人、初心より師に隨て、佛の經文、祖師の語句等をあまた聞き覺えて、心には一句一文もわきまへず、或は一則の話を授り拈提する人あり、此の話頭の解せざることを、蚊子の鐵牛を咬むか如く、盲者の鐵壁に向ふか如くなれども、是れを問ひ求むることをせず、自

から心中に工夫をなして合點せしと思ふ心もなく、空しくすぎぬ。たとひ少々心掛るに似たるも、今日用事あり、明日なすべし、今は障りあり、後に問ふべし、雨ふるはうるよし晴れてからと云ふなり。此の今日は障りあり、明日、今は用事あり、後と云ふは、只一念の怠りより起る悪念なり。怨敵よりも恐るべし。只此の一念一生を錯り多生を錯る、怨敵はた、一身をそこなふのみ。此の一念は、生々の道根を失ふ、恐るべし慎むべし。た、誠に道に志す時、萬事をさしおきて進むに、一切さはりあることなし。是れ善と知らば、一刻もさし置くべからず、た、今雨ふるまで晴る、を待たば、又何か障り出来て、是れを問ふべき時節到らざる中に、我が身命は空しくなりぬべし。光陰は人を待たず、身命は延ぶべからず、命はかぎりあり、道はかぎりなしと知るべし。徒に怠の念を生せば、精進の心は、日になくなり、退屈の念を生じて、終には我等が及ぶ所に非ず。上古の聖人にあらずんば到り難しと云つて、自ら夫人の境に入て出ることあたはず、あはれむべし。人身を受けながら道を學ばず。精神の心なき者は、禽獸に等しからん。彼の上古の聖人とは、何者ぞや、人なり。人學びて聖となる、その故如何となれば、佛も眼上に眉あり、我も又然り。祖師も鼻下に唇あり、我もまた然り。何ぞ及ばざらん。さて此のいやしき心は、何よ

り起るすと尋ぬるに、此の身を我が物と思ふより、かくあさましくなるなり。此の身は元と父母の物なり、故に父母、我を生みしより、凡夫になさんとは思ふべからず。我を育ふ時、古人に劣るやうとは思はざるべし。誠に父母の心には、佛祖、聖賢にもすぐれたる智者にもなさんと思ふなり。その父母の大切にそだてたる身を、我が物と思ふ迷より、人の人たる道も學ばず、自ら此の身を凡夫の境になけ捨る、誠に不孝是れより大なるはなかるべし。僧は、其の大切なる身を父母よりもらひ受て、佛祖に奉り、大道を修して、慈悲廣大願行を續き、永く我が身命ををします、佛法の大海に入て、多身の衆生を扶けんか爲めに、我が一身をなけすつるを捨身とも云ふ、是れ則ち棄恩入無爲時眞實報恩と云ふなり是れを出家の孝と名く。たとへば武士の君に仕へて戰場に赴くか如し、緩かも身命を我が物と思はば、私の心起て汚名を取るべし、君の爲めに死すべきに當て、父母に不孝なりとて死せずんば、却て父母に愧をあたへ、君にも不忠をいたし、未練の臣と云はれなば、不孝是れより大なるはなし。その故に、父母生みしより、忠心の士となして、奉公もよく勤め不忠者と云はれぬ様に、大切にそだてたる身を、それとも知らず、已れの私に引かれて、不義不忠をはたらき、君父に愧を與ふるは何ぞや。た、我が身、我が物にあらず、父母よ

〔解脱上人〕すな  
はち笠笠の自慶上  
人なり。傳は元亨  
釋書に詳なり。

りもらひ受けて君に奉せし身なれば、君の爲めに死するは、一だん不孝にして父母の恩を  
棄るに似たれども、眞實は恩を報するなり、是れ無爲に入らずんばなしかたし。其のわざ  
はかはれども、その理は一なり。此の理を知らずして、出家の佛法の爲めに捨身するを笑  
ふ者は、いまだ已れか君の爲めに身を捨つる程の忠心なく、自心の歸所を知らざる故なり。  
若し身體髮膚父母に受けてそなたひやぶるは不孝なりとて、冬は暖に寒苦にあたらざる様  
に、夏は涼しく暑熱にあたらざる様にして、一生たゞ安閑無事にして空しくすごすと、身を  
そなたはざるをせば、木偶人も同じかるべし。此の身を大切と思はば、早く此の身を捨つ  
べしとは、解脱上人の示なり。此の身を捨つるとは、寒さをも忍び、暑さをも忍び、遠き  
をもちとはず、艱難をもちとはず、樹の下、石の上たりとも、我が身をかへりみず、好き  
師に隨て道を學び、人の人たる道を知り、自らよぐ得たらば、天下國家にも及ぼし、萬民  
の苦を救ひ、衆生の迷をもさとさんことを心掛け、せつかく父母の辛苦してそなたたる此  
の身を一生用に立て、空しくせざる様に、時々父母の恩を思ひ、身を大切につとむるこそ  
父母の恩を報するとも云ふべし。譬へば黄金は大切な物とて、藏に積みて戸をしめ、これ  
を守るも益なし。黄金の大切なるは、世に出して用ふるが故なり。用ひされば、その功

あらはれず。その功なきときは、石瓦も同じことなり。玆に一人あり、旅行を思ひ立ち、  
發足の日、父母金子をあてへて云ふ、是れ大功なる物なり、むだにつかふべからずと。さ  
て途中に出て宿を借るも飯をくも、金にあらざればかなひ難し。しかじなから父母これ  
を大切にせよと云ひしゆゑ、つかふべからずとて、野宿をし飯をもくはず、金を首に掛け  
飢死す、終には人に奪はれて父母にも返さず、我が物にもならず、空しく失ふが如し。元  
と此の金の大切なりと父母の教へたるは、用ひて自由し飢渴をもしのぐ爲めなりと云ふこ  
とを、父母に能く問はざるが故なり。さて此の金を出して用ふる時、直に飯にもなり、餅に  
もなり饑頭にもなり、又は宿もあり坐舖もあり、奴も婢もあり、何故ぞと思ふに、彼の父  
母よりもらひたる大切なる金を用ふるが故なり。是れを大切なりとて、覆子に包み財布に  
入て用ひざる時は、彼の身は大切なりとて、暑さ寒さをいとひ、あやまちせざる様にとて  
藝術をもならはす、道をも學ばず、身を錦にまとひあやに包み、人の苦は捨て置き、我の  
み樂みをせんことをたくみ、空しく大切なる五穀を費して、一向に所能なきが如し。何ぞ  
禽獸に異ならん。譬ひ此の如くすれども、百年の命は持つべからず、誠に凡夫の境に自ら  
入るなり。僧は、此の身を佛に奉り、一切衆生の爲めにかけ捨て、此の如く用ひて自由す

るなり。士は、此の身を君に奉り、天下萬民の爲めにだけ捨て、此の如く自由するなり。夫れをば心得たかひて、僧は佛法の爲めに捨身するるとて笑ふは、武士の主君の爲めに戰場にて死するを笑ふに似たり。復た是れよりあさましきものあり、今の世を見るに、或は酒を嗜みて身を亡し、或は色に溺れて身を亡し、已れか一たんのいかりによりて身を亡す者十人か九人までなり。大切なる父母の遺體、主君に奉りし身を、已れのすきこのむ者に失ふことをばあやします、却て僧の佛法の爲めに捨身するをあやしむは、至愚と云はんか。又出家の不淫戒のことをそじつて云ふに、天地の間に生を受けたる者、人より虫けらに至るまで、皆これ陰陽和合の物なれば、交合を思はざる者なし。是れをたつは、人倫の道にたかひ、天地の性にそひき、天下の人の種なくならん、是れ聖人の道にあらず、故に出家は外をつゝしむと雖も、内心是れをたつことあたはず、或は密犯をなす者ありと。此の言尤もしかりと雖も、佛の戒法廣大なり、廣く是れを説く時は、天地の外に出づ、細かに是れを説く時は、蟻蟻の小虫に及ぶ。佛法を學ぶ佛弟子とは、出家のみに非ず、出家は諸の弟子の中聲聞衆の一部なり。此の外、菩薩あり緣覺あり、天人あり龍神あり、國王あり大臣あり宰官あり、禽獸あり虫類あり、悉く心を傾け歸仰する時もらすものなし、みな是れ

佛弟子なり。中に就いて出家のみ不淫戒を授く、其餘は悉く邪淫戒を授く。在家もし正淫ならず、邪淫を恣にする時は、孤獨の身と雖も治まらず、況んや國王大臣においてをや。桀紂は天下を失ひ、吳王は國を亡す。故に聖人の教にも夫婦別あり。詩には時を待てとつぐことをいましむ。戒法の趣き一理のみならんや、十六條戒あり、四十八條戒あり、二百五十戒あり、五百戒あり、その廣大なるに至ては八萬四千戒あり。守りて破るゝ戒あり、破りて守る戒あり、守らず破らざるの戒あり、たゞその聲聞出家の一戒を以て佛の大道を破すること、亦至愚ならずや。皆その學ぶこと少なく、問ふことに怠りて深く物の奧義を窮めず、己れの小量を以て物をはかり、我がすき好む所をほめ、我が知らざることをばそしる、まことなるかな、古人の云はく、其の見る所すくなき者は、疑ふ處多しと。已れの知らざるを非とせば、小人より見る時は、孔子もまた非ならん。此の如く争ふ時は、天地盡くるとも、是非つくる時なからん。あはれむべし、大丈夫を生れて、生涯是非の中を出ざること。我が佛道の活眼晴を開いて見る時、天地の中、天地の外まで、毫髪ばかりも非なく是なし。此の時一切衆生悉く成佛とも云ふなり。此の一切衆生とは、轉輪聖王より竹木細蟲に至るまで、一物も殘る物なし。此の時儒神佛は云ふに及はず、一切の諸道悉く

皆佛道と云はんも亦可なり、みな儒道と云はんも亦可なり。一切の名目は、皆めとより付けたる名なり。その本を失て後の名を争ふは、また狂せりと云はんか。彼の淫戒の持ち難きを、無理に堪へて表をつしじみ、密に犯すと云ふもなきにあらざれども、これ人欲の私なり。私を以て公を破るべからず。既に人欲の私をすて、仁義の公に返れとは、儒の教なり。我が性の好む所に隨はざれば、天性にそむくと云はん、天下の人おのく欲する處に隨は、何を以てか天下を治めん。聖人と雖も、惡心なきことあたはず、是れを防ぐことを知て正道を守るに仍つて、聖人とは云ふなり。小人と云へども、善心なきことあたはず、よく惡心を防ぎて善心を守らば、聖人ともなるべし。出家も又々此の如し、淫心ありと雖も、佛の戒法に仍りて、時々是れを慎めば、終には慎ますしても守るべし。たゞ堪へて慎むを以て天性にたかふと云ふは、彼の慎みなき小人よく天性に叶ふと云はんか。是れを許して性癖に隨はしめば、酒色に溺れ、博奕になづみ、朝早く起ることは、我が性にたかふとせず、世のつとめは、我が性にうのむくとてやめ、盗みのすきなる者は、ぬすみをなし、高位高官のすきなる者は、國王大臣の眞似をせば、誰れか是れにしたかふものあらん。是れをいましめん爲めに、政道ありて守らざる者を罪す。民若し我意をほしむるに

じて天性に隨ふと云はん、何んぞ政刑を用ゐん。政道は惡をせめ、天理の本然にかへしらしむる道なり。たゞ民の意に任せて生癖をほしむるにさせて、天然の性に隨ふと云はん、天下の民大亂をいたさん。誰れか之を制統せん。たゞ上下法を犯さず、下は上を敬ひ、上は下をおはれむべし。下たる者、或は心より改めて身をつしむあり、又は心はあらたまらざれども、人目をはぢて身をつしむあり、又は上の政道を恐れて、罪をまぬかれん爲めに慎むもあり。佛の戒法も亦復た此の如し、心よりあらためて能く守るもあり、形ちばかり守て心に守らざるもあり、佛のよかめ罪を恐れて守るもあり、其のしなかはれりとも雖も、形の治る所は一なり。出家にばかり不淫をいましめらるゝは、佛道深廣にして、その旨きはめがたし、妻子等の諸念愛着の念ありては到り難し、故に先つ髮を斷するは、愛根を斷するなりと云ふて、廣大の佛道を成ずること、出家を最大とす。本分出家の行に非すんば、此の道を得かたし。萬劫をすなぐても、誠に出家の行を守る人あらば、佛法滅する時なし。因て出家の功德をすくられたりとす。此の出家を佛法の棟梁として、一切衆生を濟度せば、佛法の到らざる處なし。眞實得法の人に隨て佛法を聞かば、人間、天上、禽獸、虫類に到るまで、已れの非をあらため利を得すと云ふことなし。是の故に佛先づ佛道を聲

聞の出家に授け、姿を世ごとくにして、堅く戒行を守らしめ、盡未來際斷絶せざることを附屬し玉ふ。その故深哉。儒には此の教へなき故に、多くは孔子の書をよめども、その行なじ、口には聖人の言を誦して、身は我がありたきまゝにして、全くつゝしみなし。只少年より學ひならぶと雖も、學はざるより劣れる身を持ちながら、我れは孔子の徒なりと云つて、未だ學びたることもなき他の道を、善とも惡とも知らずして是れをそしる。誠に堯を吹ゆる犬とや云はん。是れ全く孔子のかすを喫して、孔子の道を知らざるなるべし。孔子若しあらば、鼓を鳴して是れをせめん、門を閉て是れをこばまん。孔子もまた我が佛の如く、一方の世にことなる戒行を立て、その道を守らしめて、夫れをして孔門の棟梁となして世俗に教へば、愚俗も雖も、孔子を貴ばん。その道を守る者も、心より守らすとも、人目をはちてなりともその道を守らん。既に我が佛弟子の中、出家今の世に多きか故に、間々密犯をなし、破戒の徒もまた多けれども、十人の内一人か二人は、誠に佛行を行じ佛道を修する者あり。たとひ密犯をなす者も、此の人にはち、世間をはちてなりとも、また佛行をなす。茲を以て、佛道末世に到るほど世にはひこり、上、天子より下、愚俗に到るまで佛法に歸せざるはなし。小兒童までも、南無佛の聲を發せざるはなし。是れ全く禁戒

〔天照大神云々〕  
玄虎は字を大空と  
いひ即ち洞上の古  
佛にして、世に玄  
虎教主と稱し、朝  
廷より佛性通活禪  
師と譽せられたる  
人なり。三光國師  
は、雲州雲梯寺の  
孤家國師なり。最  
澄は、天台の傳教  
大師なり。諸神が  
戒を授かり玉ひ

を堅く守る出家をして、佛法を護念せしむるかゆゑなり。惜むべし、孔門に此の教なきこと。夫れ一切衆生の佛法に歸すること、百川の大海に歸するか如し。諸道の輩、一たんそむひて外に向て行くと雖も、終には佛法の大海に歸す。譬へば百川のそむひて外に向て流るれども、末には大海に歸せされば、歸處なきか如し。その故如何となれば、天地、山川、人倫、草木、禽獸、蟲類、悉く佛法の中を出てず、ろむくとそむかざると、また何れの處に向つて行かん。釋迦佛あつて後の道と思ふへからず。天地未たあらざる先より、曾て動かざる道なり。佛は只是れを教へんか爲め世に出現ありしなり。故に佛門には、釋迦佛を大恩教主と唱ふるなり。此の故に悉く佛海に歸入す、いまの證を引かは、天照大神宮は、玄虎禪師を師として佛戒を授かり、出雲の大社の明神は、三光國師を師として佛戒を授かり、八幡明神は、最澄を師として妙法を聞き、報謝に紫衣二領を施す、住吉明神は、長門太寧寺定安禪師を師として戒を受け法衣を授かる。其の外、諸神の佛法を聽聞し尊敬せらるゝことの因縁、あけて數ふべからず。人王も亦しかり、聖武皇帝は、南都東大寺にて鑑眞律師を師として佛戒を授かり、其の報謝の爲めとて、丈六の盧舍那佛を建立して今にあり。又國中に三所の戒壇を建て、民百姓までも持戒すべしとの勅宣あり、御製の歌に



しとは、高僧傳、洞上聯燈錄などに詳なり。

〔圓珍僧正〕即ち天台第五世の座主智證大師なり、寛平三年十月二十九日、世壽七十八にて入滅す。

〔圓仁阿闍梨〕天台第三世の座主、貞觀六年正月十四日入滅す、世壽七十一。同八年勅して慈覺大師と號す〔源空上人〕淨土の開祖圓光大師なり。

我か戒は何をたもたんあざなゆふな

民やすかれといのるばかりよ

また弘仁帝は、空海上人を師として戒を授かり、清和帝は、禁中仁壽殿に於て圓珍僧正を師として戒を授かる。此の時、冠帶人三千餘人、勅命にて戒を受く。陽成、光孝兩天皇も此圓珍を師として仕へ玉ひ、天徳帝は、圓仁阿闍梨を師として菩薩戒を授かる。源空上人は、三帝の戒師となる。その外歴代帝王、悉く貴僧高德を師として法義を問ふ。其の報謝に寺を建立し玉ふ故に、都の近邊には大寺甚だ多し。尊氏將軍は、夢窓國師を訪ふて嵐山の庵に行き、最明寺時頼公は、禪に參じて、鎌倉に圓覺寺を建て、道元、蘭溪の二禪師を請す。その餘の名相武將、悉く禪を問ひ佛道に歸す。甲斐の信玄は、佛法を學ばざれば、武士の道不案内なりと云はれけり。何故に帝王武將か斯くも高僧を尊敬するやと謂はんに、高僧とも稱する人は、姪愛の不浄を犯さず、臭肉の不潔を喰はず、堅く戒行を持て名利の邪念を捨て、佛道の大道を脩して、大悲心は佛菩薩にひとしく、一切衆生を憐みて、日夜是れを救はんことを願とす、誰れか是れを尊はざらん。故に天旱じて民渴に及ひ、人方不及ばざる時、この高僧を師として雨を請ふに、天是れを感じて雨を降す。帝王は鬼神も恐

る處なり。然りと雖も、御惱あれば、高僧を請じて祈らしむるに、必ず其感應あり。ゆゑに帝王鬼神と雖も、皆高僧を師として仕ふ。佛法は戒行を以て身命として傳はり、戒行は僧を以て身命として傳はり、僧は佛法を以て身命として活命す、是れを佛法僧の三寶と云ふ。其の廣大深遠、天地鬼神も窺ふことあたはず、況や國王大臣何ぞ歸敬せざらん。今の世に仁義の書を學びながら、朝夕人をそしむる天下國家を治るの書を説けども、己れの一身を治めず、民を救ふことを人に教ふれども、自ら酒に酔倒れて人より扶けられ、己れをいさぎよくすることを唱へども、小官小祿をひさばりて人にへつらひ、政道の正きを論ずれども、己れの私欲にひかされて、云ふべきことをも云はず、なすべきことをもなさず、此の如きの身を以て、天地鬼神も歸敬する佛法をとする。此の人、彼の古の天神地祇、國王、大臣、武將雄士にもすぐれたりとせんや、誠に鶴鶴の大鵬を笑ふか如し。元と其の器小なるか故に、纔に學ぶ所の書を以て足れりとして、大道へ入らんと思ふ大志なきか爲めなり。此の小量の我見より、僧は身を我か物と思ふて、一切衆生の爲めに捨つることあたはず、徒らに凡夫名利の境に捨て、武士は身を我か物と思ふて、主君の爲めに捨つることあたはず、徒らに不忠不義の境におち入ること憐むべし。さて此の一切衆生濟度の爲めに

佛法の大海に捨る身は、元と佛に奉りし身なり、それは父毎よりもらひ受けたる身にして元と我が物にあらずと知らざれば、此の迷より我執と云ふもの起る。此の我執は何より起ると尋ぬるに、愚癡より起る。何故に愚癡なるかと尋ぬるに、佛の大智を學はざればなり。此れを學はざるは何故かと尋ぬるに、懈怠なり。その懈怠は何故かと尋ぬるに、我が命は雨の晴れるを待たざることを知らざるが故なり。是れを誠にて行ふ時、誰れか道を得ざらん。是れを行はんとするにその用心あり、人と交りて、縦ひ雑談座興の席を雖も、已れを捨て、分別を捨て、心に「物もたぐはへず、等閑に無益の言をいはず、貴賤上下にかはらず、人の言はをそこつに聞くべからず。」心得ざることをあらは、静かに問ふべし。問ふても合點の行かざるは、我が智慧のたらざるなりと知て、深く心に味ふて見るべし。平生の雜談すら此の如し、況や佛祖の金言、聖賢の妙句をや。今の人聞て好しと知ても、人目をはかりて問はず。問ふて善と知ても、人目を恐れて行はず。是れ未だ已れを捨てず、我執を捨てざるの咎なり。茲を以て、善と知れども移らず、惡と知れども捨てず、徒らに自ら愚癡の境に墮して出ることあたはず、たゞ古人の道を守つてつゞき行はんに、人はれをそじるとも、何の愧かあらん。已れの私をしてそしらんこそはつかじかるべし。こ

を以て、舜は、己れを捨て人に隨ふと云ひ、禹は善言を聞ては拜す、周公は、天下の善を聞くことを失はんとを恐れて、三たび髪を握る、孔子は、朝に道を聞きて夕に死すとも可なりと云ひ、子路は、一善を聞て未だ行ひ了らざるに又聞かんことを恐る。また云はく、學ばざることあり、學んで得ずんは置かず。問はざることあり、問ふて明にせずんはれかずと云ふも、孔門の教とかや。むかし唐の玄奘三藏は、佛教を求めて天竺に往く、果さずして途中にて死す。又生を得て往く。此の如くすること七死七生して、始て佛教を唐に請し來る。六祖惠能禪師は、柴を賣て市を過ぐ、一句の經を聞て、一人の母を捨て、五祖弘忍禪師に參して此の旨を問ふ。趙州は、六十にして行脚す、疎山は、一句の爲めに四千里を行く。日本の最澄、空海は、法を求めて天竺まで行き、榮西は、兩度入宋す、皆なこれ道の爲めに身をなげうち、己れを捨て人に問ふことを好むの人なり。彼の法師は、かりそめの「ますほのすゝき」と云ふこと、此の如く雨の晴るを待たず、此の事をよく合點したしとて、さほど道の爲めに利益にもなるまじきことなれども、捨ておかず問ふ心深く知るべし。小理と雖も、すつる時、終に大理を失ふに到る。何事も、始めより大を好む者は却て得ず、目の先の少しのことより心

ますほのすゝき

かけ、一事として捨て去れば、塵も山となり、一滴も海とならん。只此の「ますほのすい  
 き」より問ふて、終に佛の二代經も、聖賢の經義も到るべし。我が高祖の云はく、善根山  
 上一塵も積じべし、功德海中一滴もゆづること勿れと。今多く聖賢の書を讀めども、さし  
 あたるわさは心得ず、天地の間に一理も疑かはしきことあらば、六道を得たりと云ふべか  
 らず。此の道理を知らんと思はし、いさゝかの言も容易に聞くべからず、疑はしきことは  
 何くまでも往て問ふべし。賊に已れを捨て問ふ時は、始て彼の我執なし。その時、佛祖の  
 道にも叶ふべし、聖賢の教にも叶ふべし。たと何事も人の命は雨の晴るゝを待たすと知て  
 さし置くべからず。茲に一首の古歌あり、

あすありと思ふ心にひかされて

あすありと思ふ心にひかされて

珍重

ますほのすいき終

明治二十九年十二月十一日印刷  
 明治二十九年十二月十五日發行

白隠門法語集發行  
 定價金貳圓五拾錢



編纂者 森 慶 造  
 東京麻布區永阪三十一番地

發行者 田 原 豐 吉  
 東京神田區駿河臺西紅梅町十二番地

印刷者 三 島 宇 一 郎  
 東京神田區表神保町貳番地

發行所 光 融 館  
 東京神田區駿河臺西紅梅町十二番地

印刷所 弘 文 堂  
 東京神田區表神保町貳番地

7/5/41

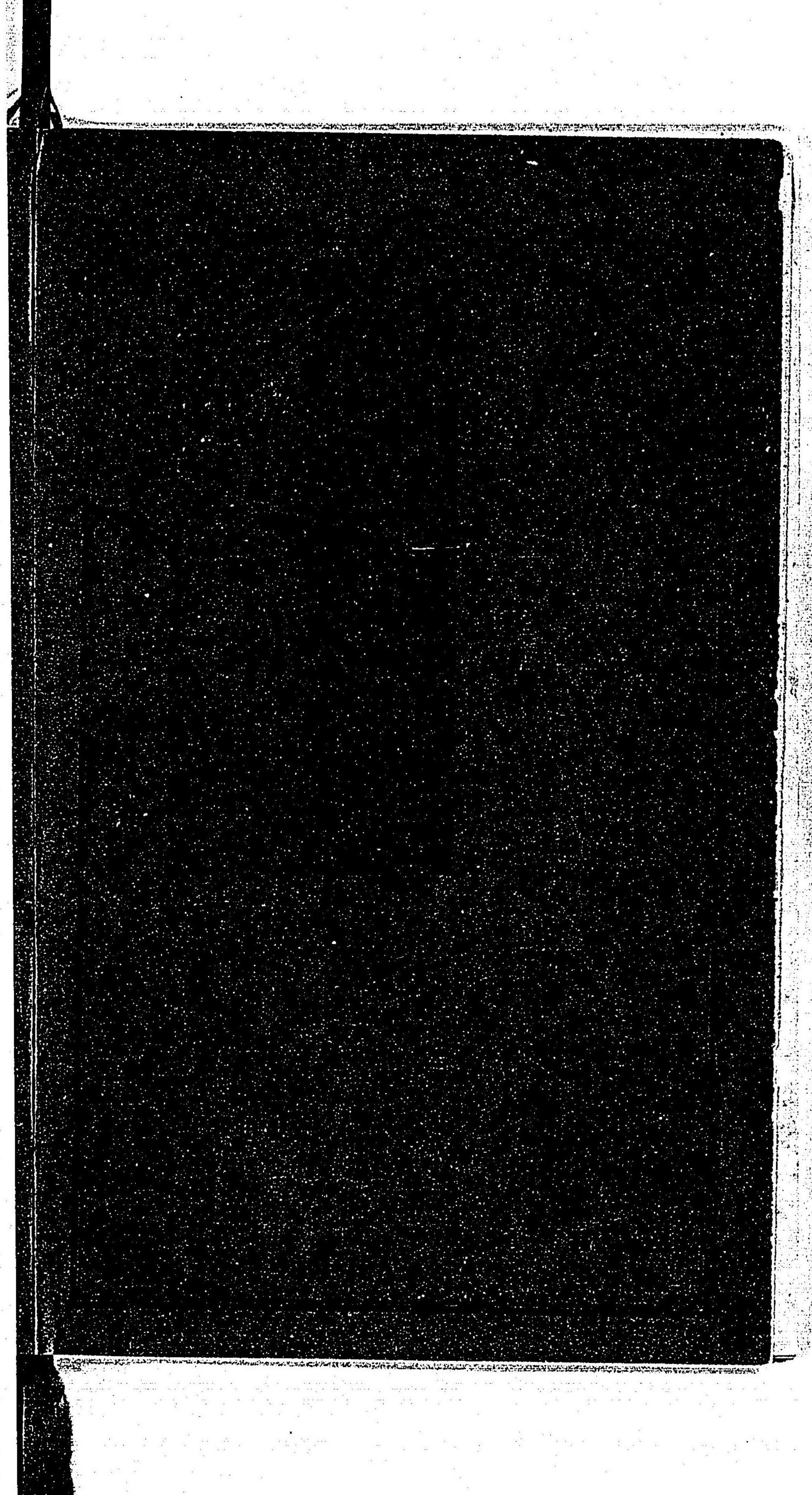
### 發賣所

東京牛込神樂町六番地 益友社  
 東京芝區露月町十八番地 鴻盟社  
 東京麻布飯倉町五丁目 森江佐七社  
 大阪市東區本町四丁目 金尾種次郎  
 名古屋市門前町二丁目 其中堂三浦兼助

### 大賣捌所

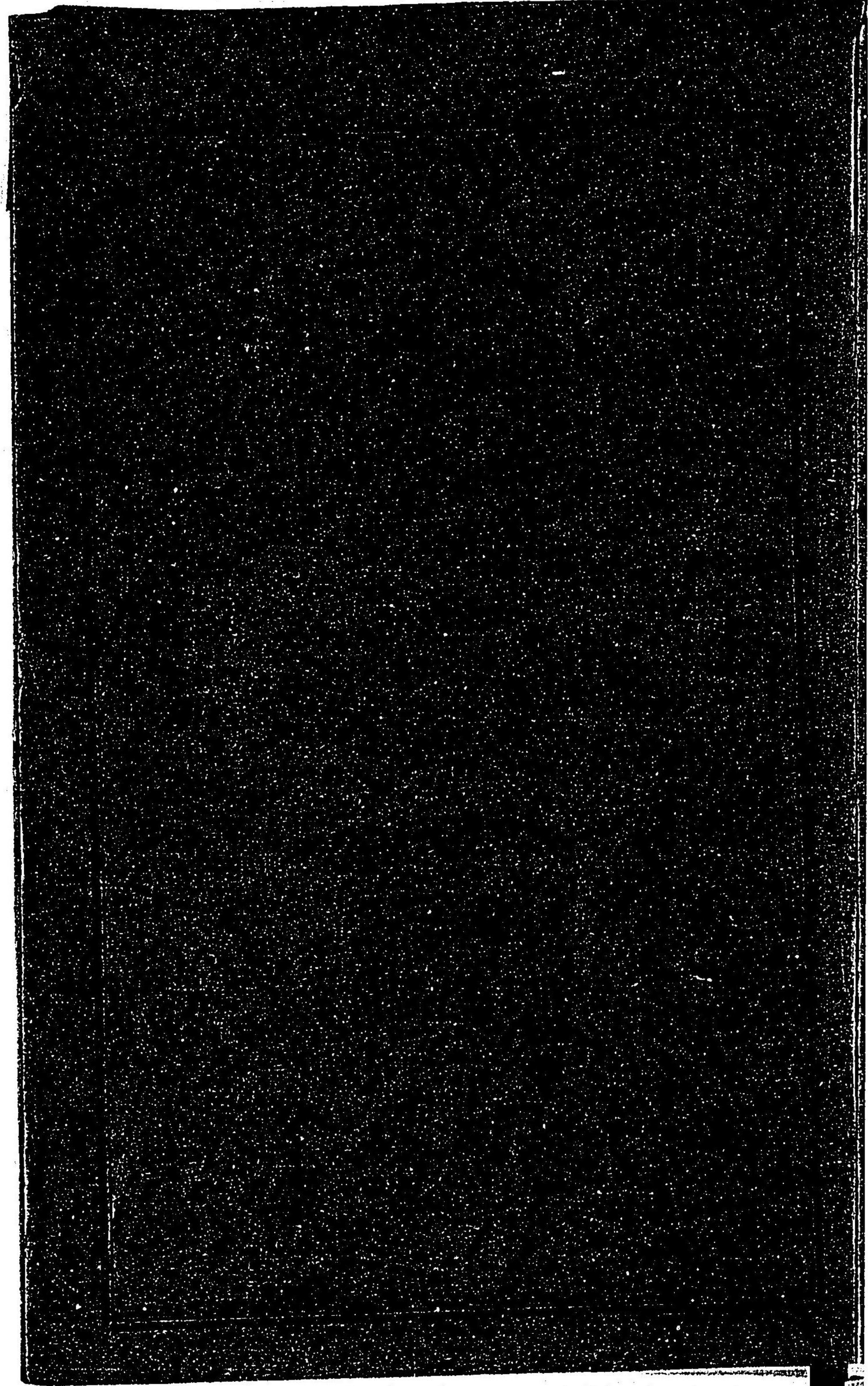
東京銀座坐尾張丁二丁目 東海堂  
 東京神田表神保町 東京堂  
 同 上 菱神保町 田屋  
 東京京橋區鍵屋町 北隆館

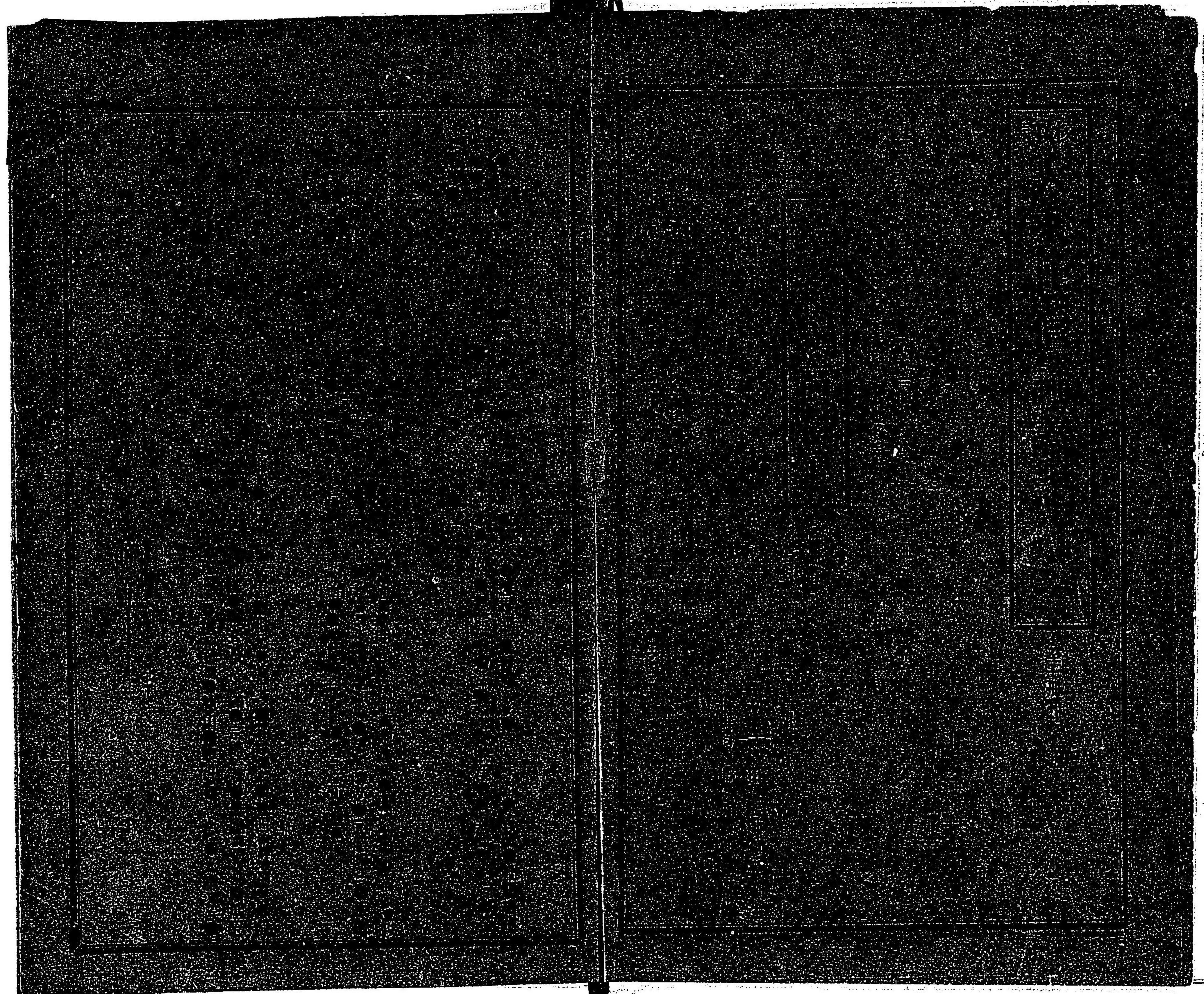
京橋區銀坐二丁目 文海堂  
 同 京橋區鍵屋町 良明堂  
 同 淺草區廣小路 淺倉屋  
 東京本郷元富士町 盛春堂  
 東京本郷元富士町 田中屋  
 東京神田錦丁一丁目 武藏屋  
 同 神田一ツ橋通 有斐閣  
 京都東六條中珠數屋町 法藏館  
 京都下京區五條通 高倉西入万壽寺町 西村十次郎  
 京都 柳技軒  
 京都市三條通高倉東入 出雲寺文次郎



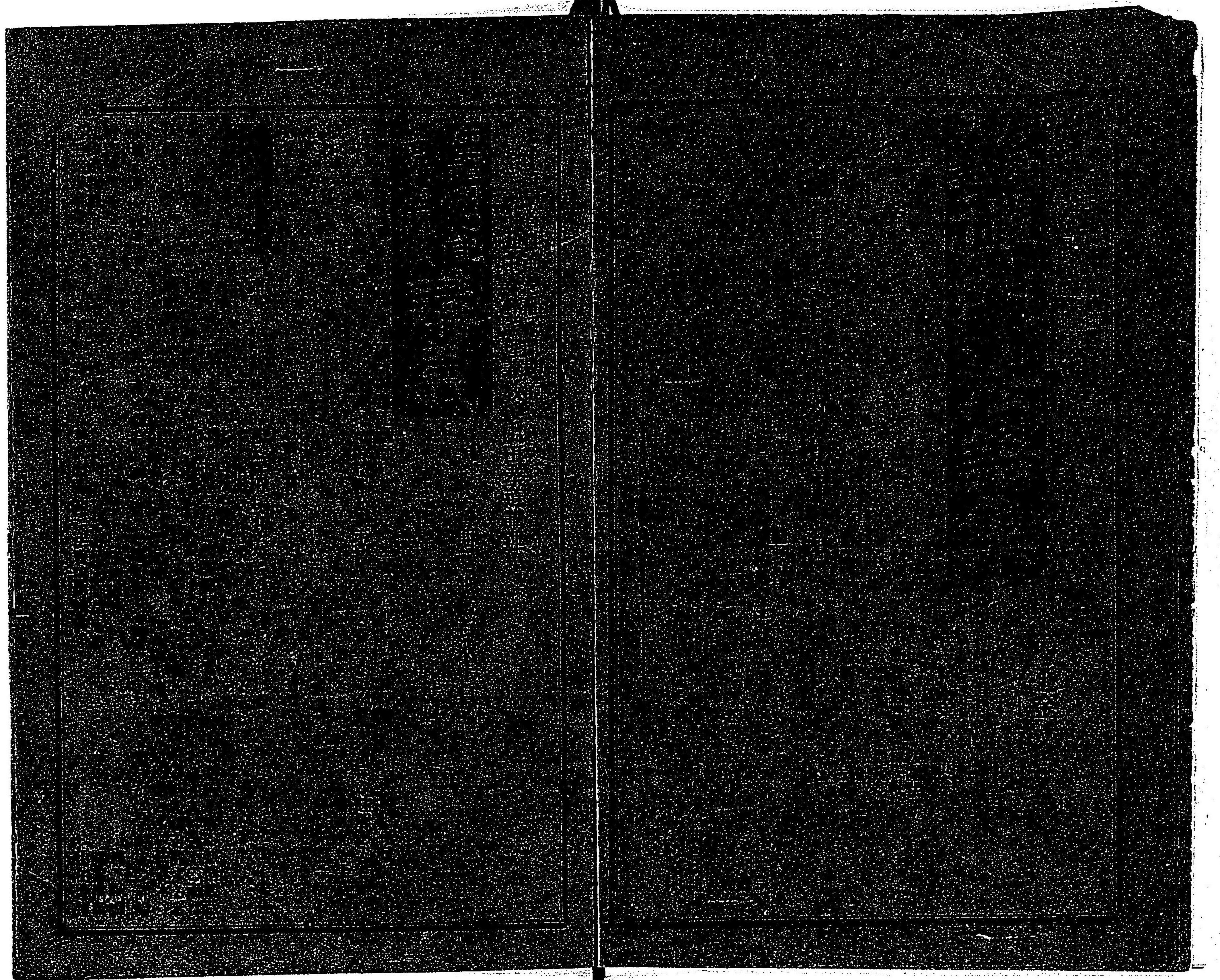
欠

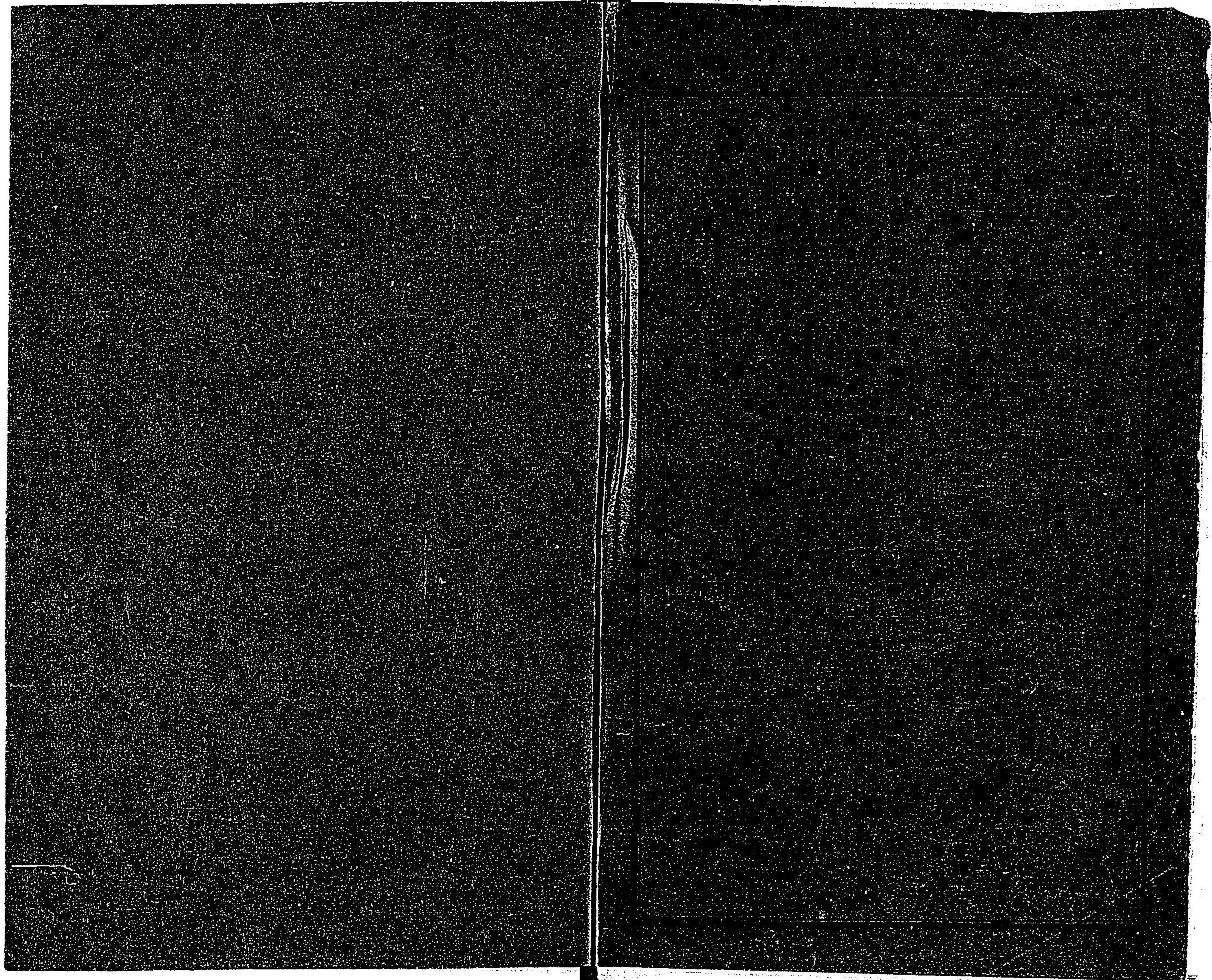
MISSING



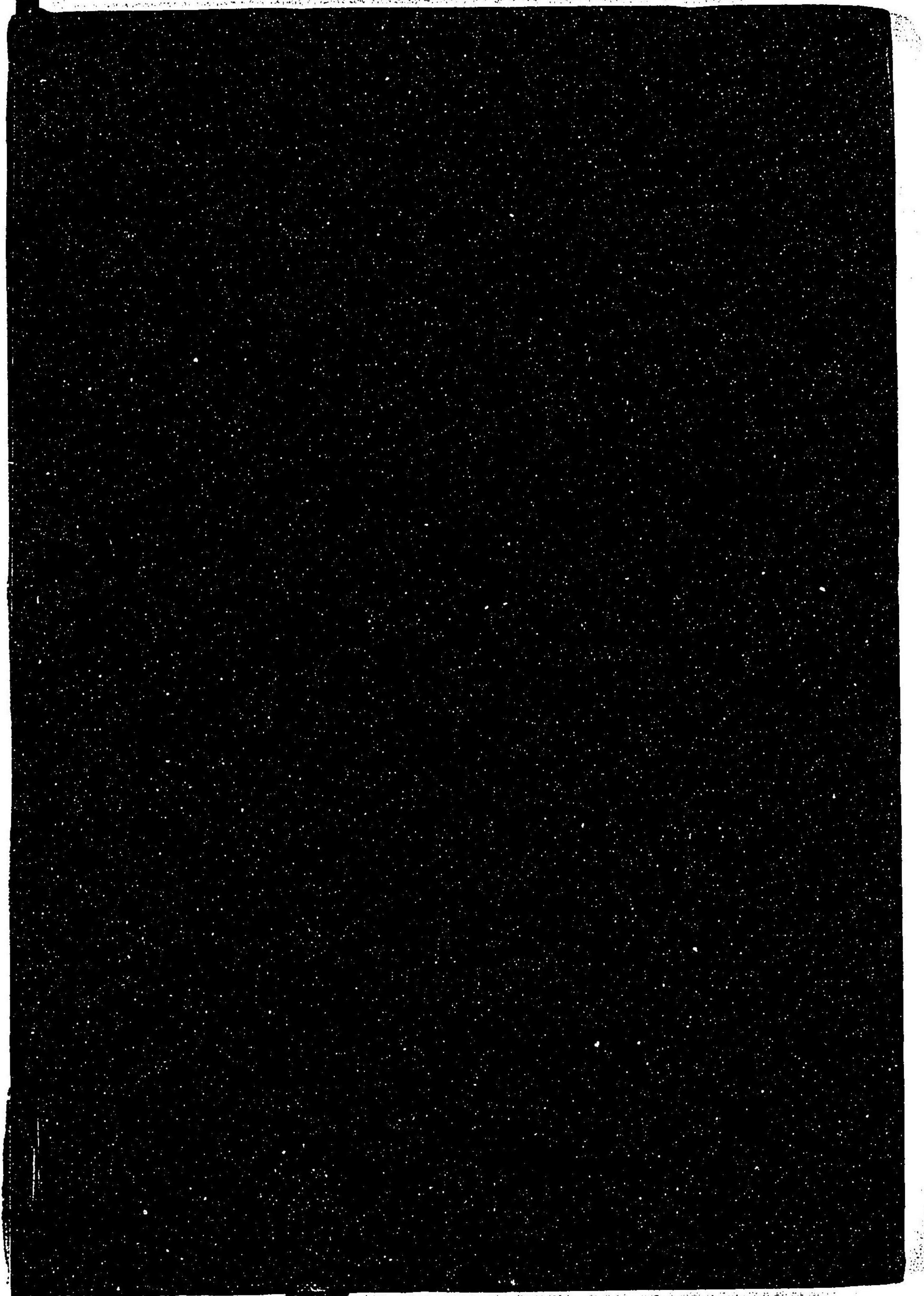








74  
39



019646-000-0

74-39

續禪門法語集

森 慶造 / 編

M29.12

ABG-0427



